

1  
曉明文庫

# 日本共産党闘争小史

市川正一

315.1

315.1  
1752n

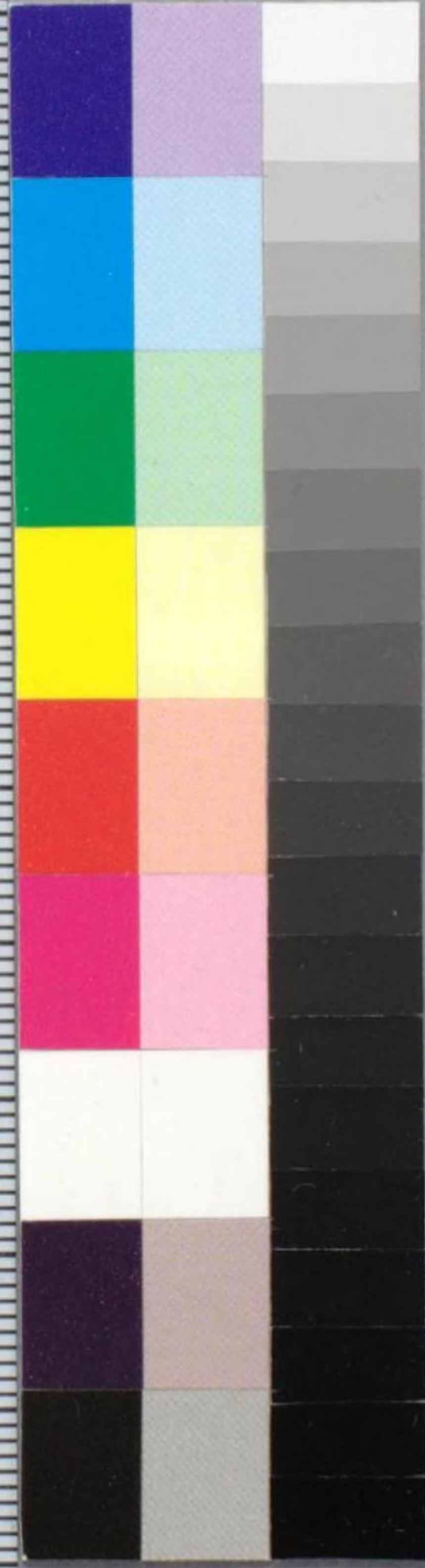
g



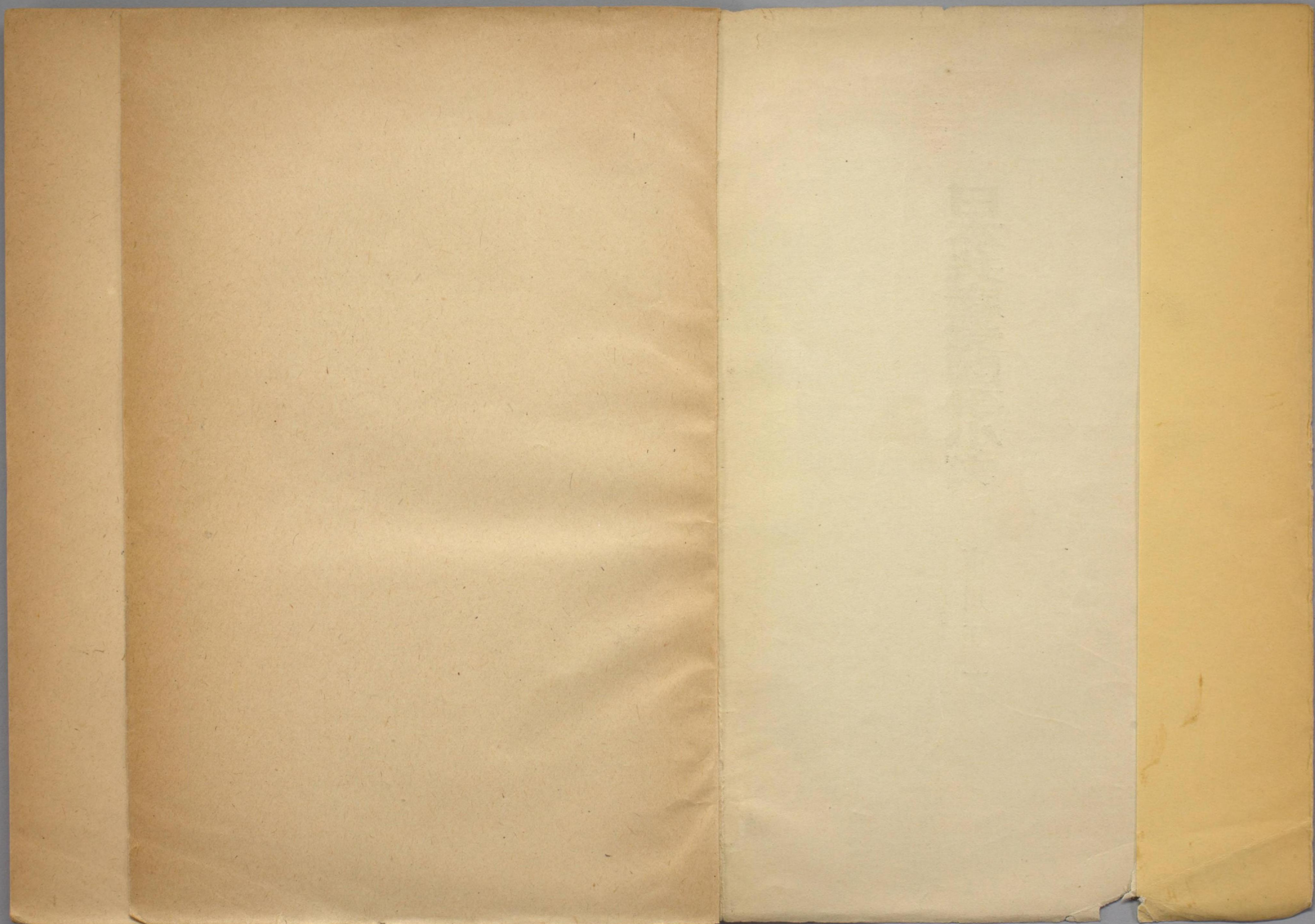
00201913

×

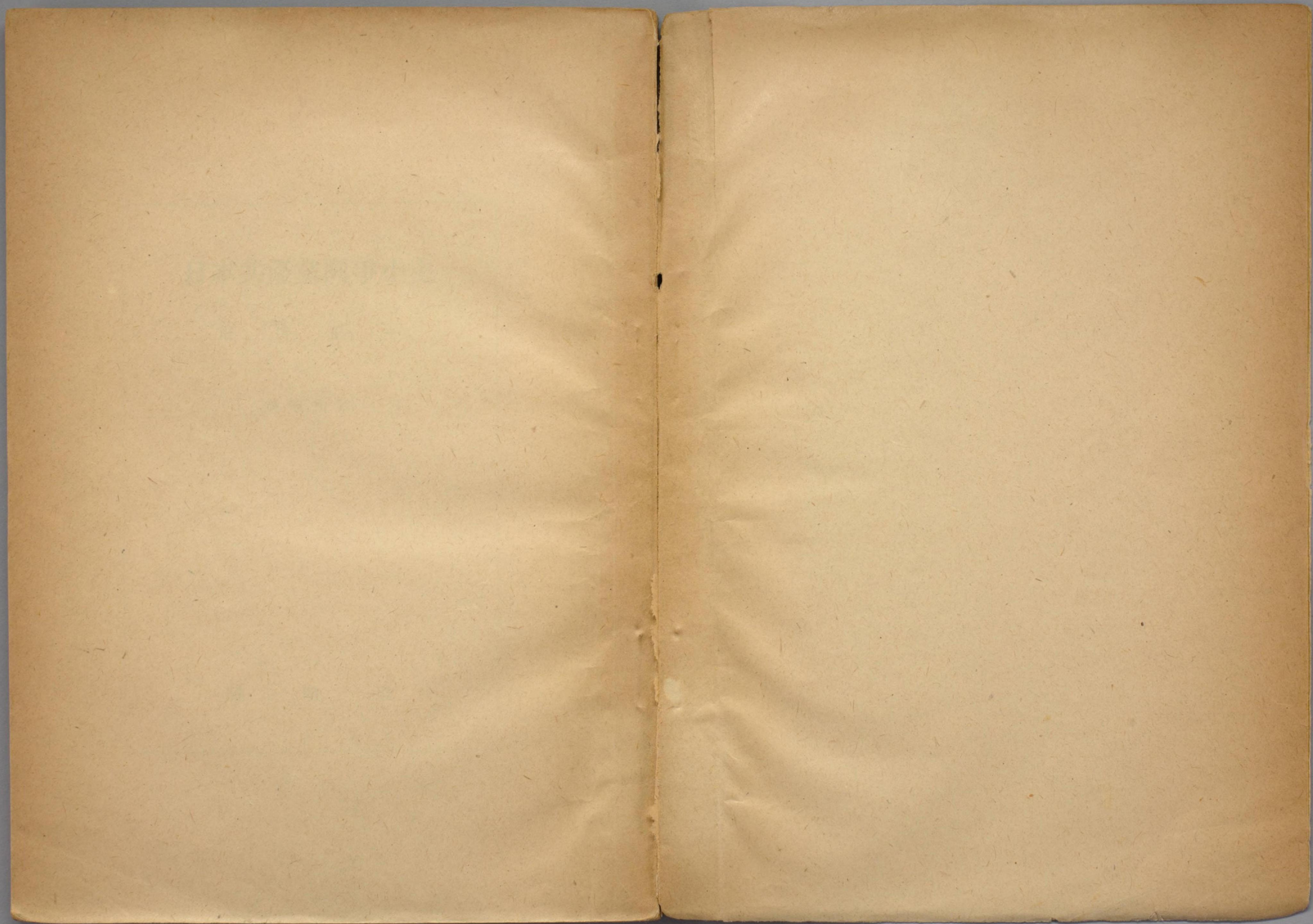
複写













日本共産黨鬭爭小史

市 川 正 一

曉明文庫

1

曉 明 社



315.1  
I 75-2 n  
g



1928年夏モスクワにおいて



201913



## 序

党史は、革命後に、多くの資料と関係者の合議とによつてでなければ正確なる編纂は可能ではない。

そしてまた、歴史は相当の年月を経て書かなければ、正確を期することは困難である。

本書は例言にもある通り、同志市川が法廷において述べたものであり、獄中の困苦の中にまとめられたものである。そして法廷闘争の目的をもつて書かれたことを考えておかねばならぬ。

にもかかわらず、本書は貴重なものであることは争われぬ。同志市川が極めて謹嚴な指導者であり、闘士であつたことは言うまでもない。その彼が、わが党がもつとも困難な立場にある際、敵の攻撃に抗して熱血を流して書いたものであることを忘れてはならない。この陳述をする前に、我々はその内容を獄中の困難の下に討議した。だから決して一方に偏したのではなく、相当練られたものである。

ソヴェート同盟共産党小史が世界プロレタリアートのもつとも貴重な宝であることは言うまでもない。そして我々の非常によい教科書であることも多くの言葉を費すまでもない。それと同列に置くことはもちろんでき得べくもないが、この書を資料としてわが党のすべての人々が新しい闘争のために、教育されねばならない。この本に見られる通り、わが党は多くの誤謬をおかして來た。にもかかわらず終始一貫、党をボルシェヴィキ化するために闘つて來たことは明かである。そしてそれは困難なる事態に際して、いかに理論と実践とを統一するか



あつたことが明かである。我々はいかに多くの小ブルジョアの理論家によつてなやまされて来たかを本書が明かにしている。そしてこれらの小ブルジョアの理論家が理論と実践との隔離を生ぜしめたこと、すなわち彼等の理論が貧困で役に立たないものであつたことを明かにしている。

我々はこの本によつて、党の過去の誤謬をよく検討し、現在もなおこれと同様な偏向が党生活のところどころに存在していることを発見し、これを痛烈に批判することによつて、党を強固にしてゆかねばならない義務を有する。誤謬を見て失望するものはとるにたらない人間である。益々勇氣をふるいおこして、これを克服してこそ、革命は成就するのである。

現在我々は民族の破滅に瀕している。これを救うにはわが党の指導力にまたねばならぬこともまた明かである。したがつて我々は極めて謙虚に自己を訓練してゆかねばならぬ。その一の資料としてわが党の名誉ある不朽の指導者同志市川正一のこの書を労働者農民勤労者諸君に送ることを喜ぶ。

一九四六年七月五日

徳田球一

## 目次

徳田球一氏序文

はしがき(一九三二年七月十日、日本共産党アジアプロ部)

編者例言

序論

一 日本共産党の成立と発展との根拠……………七

(一) 国際情勢 (二) 国内情勢 (三) 日本のジプアジー

(四) 日本の社会民主主義者 (五) 日本資本主義の発達とプロレタ

リアート (六) 党創立直前の時代 (七) 党成立の具体発事情

(八) 党創立におけるコミンと日本共産党

二 創立からいわゆる解党決議まで……………三八

(一) いわゆる第一次日本共産党の創立とその闘争 (二) 六月検挙

とこれにたいしする闘争 (三) 震災テロル(朝鮮人虐殺、亀戸事件)

(四) 解党決議

三 コミンテルンの解党否認から再建まで……………五五

(一) 委員会時代 (二) 一九二五年一月決議 (三) ビューロー時代



(四) 共産主義グループの創設 (五) コミンテルン執行委員会第六回総会における日本共産党再建のための決議

四 再建大会から再組織まで……………六四

(一) 再建大会 (二) 一九二七年における闘争 (三) コミンテルン執行委員会の日本問題決議

五 二七年テーゼに基づき党の再組織から第六回世界大会まで……………八

(一) 再組織 (二) 再組織から三・一五検査まで (三) 三・一五から第六回世界大会まで

六 コミンテルン第六回世界大会以後……………一〇二

(一) コミンテルン第六回世界大会(二八年テーゼ) (二) コミンテルン第六回大会から四・一六まで

結 語……………一三三

最終陳述……………一三七

註

は し が き

日本共産党は、本年七月をもつて創立満十周年を迎へる。わが党はこの際、全日本の労働者、勤労農民ならびに同情者諸君の前に血でつづられたわが党の闘争史を贈る。

日本共産党が組織されたのは一九二二年七月で、同年十一月コミンテルン第四回大会で正式にその支部として確認された。すなわちわが党は、一九一八年に始まつた日本帝國主義のいわゆる第一次対ソヴェート同盟干渉戦争のまつただ中に誕生したのだ。そして今回、またソヴェート同盟ならびに中國國民攻撃のための戦争準備(いな、すでに戦争は開かれてゐる)が、天皇によつて着々と進められつつある時に十周年を迎へたのだ。天皇はこの強盜的反革命戦争の國內的準備として、國家總動員計畫、憲兵と警察との協力、特高警察網の充実等々を行つてゐる。また共産主義者にたいする弾圧は、あたかも血に饑ゑた狼のごとく、党創立以來健闘をつづけた光輝のあるわが党の同志には、天皇によつて死刑法(治安維持法)の極刑が下されんとしてゐる。これらにたいして日本のプロレタリアートとその党は、翻期的な新テーゼを得て、果敢なる闘争に立ち上つてゐる。かかる重大な時期に、しかも我々の手になる最初の党史を發表することは、極めて深い意義があると確信する。

この党史は、現に獄中にあつてブルジョア地主的天皇制の狂暴なテロルと勇敢に闘ひつつある同志市川正一の公判廷における演説を基礎として、わが党創立十周年記念カンパニーのために特に編纂したものであ



る。同志市川正一は、いまは亡き同志渡辺政輔之、および同志佐野学、同志鍋山貞親らとともに、創立当時から日本共産党のために、最も精悍に闘つたわが党の輝ける指導的同志の一人である。この党史の内容については、同志市川正一もいつてゐるやうに、決して党の歴史を具体的、組織的に詳細に述べてゐるのではない。ひいては党史として決して完全なものといふのではない。またここに收められてゐるのは、創立から四・一六の選挙に至るまでに過ぎない。かかる不備不足の点は、獄中にあつて極度に資料が制限されること、特に政治的、組織的に必要な様様の制限あること、言論の自由がまだ甚だしく奪はれてゐる資本家地主の階級裁判における法廷の闘争演説であることから、全く当然である。だが、すべてのかかる制肘にもかかわらず、この闘争の具体的記録こそ、端的に「日本共産とはいかなるものであるか」を最も明瞭に、わかりやすく説明してゐると同時に、血に饑ゑた天皇制の搾取と弾圧とテロルのいつはりえざる具体的反証を與へてゐるものである。共産党にたいしてますます高まりつつある労働者、農民全体の理解と信頼と支持とを極端に恐れるがゆゑに、そのためにこそ、常に逆宣傳と事実の虚構とで、党の面貌を描き出すことに腐心してゐる支配階級にとつて、この党史は大てな鉄鎚である。と同時に、プロレタリアートとその党にとつては、眞に一つの力である。軍事的に警察的天皇制ならびに資本家、地主とその代理人たる右から左をでの社会民主主義者どもと決定的に闘争し、党内の左右の偏向を無慈悲に克服し、およびプロレタリアート勤労農民の発展のための敵であるすべてのものと徹底的に闘争し、党をボルシェヴィキの線に沿つて発展させてきた、共産主義的英雄たちの血をもつてつづられたこの党史のなかから、貴重な教訓と豊富な経験とが、あつすところなく攝取されることを

期待して、これを発表する。

一九三二年七月十日

日本共産党中央委員会  
アヂ・プロ部



若干の註

- 一 この代表陳述は党の綱領（佐野学）、党の組織（鍋山貞親）の後をうけて行つたもので、つぎに労働組合運動および政策、農民組合運動および政策、青年婦人運動および政策、解党派について、等の陳述がある。
- 二 本書のうちにある解党派とは山川均らの場合のほかは、檢挙の後はやく背き去つて出獄して、公判廷に姿を見せなかつた浅野晃、水野成夫らを指す。
- 三 佐野学、鍋山貞親が「轉向」を声明したのは一九三三年六月七日（十日付をもつて発表）であつて、実際に公判廷闘争のち僅かに二年である！
- 四 そしてついで七月六日、三田村四郎、高橋貞樹、中尾勝男らもまた「轉向」を表明したのであつた。

編者例言

- 一 「日本共産党闘争小史」は日本共産党員故市川正一氏が一九三一年七月「日本共産党事件」の公判廷で代表陳述の一として前後五日に亘つて述べた記録によつて編纂したものである。したがつて、「四・一六」（一九二九年）までである。読者は本書が苛烈な法廷闘争のうちに述べられたものであることを念頭におかれたい。
- 二 その記録は、裁判長その他の言葉も入つてはいるが、二十一万字に上る大きなもので、日本共産党の闘争の姿がよく現われている。本書はその本筋をたどつて編み、なるべく記録によることをつとめたが、表現、用語等を変えたところがある。
- 三 一九三二年七月、当時の日本共産党アヂ・プロ部は、やはりこの記録を基として「日本共産党小史」と呼びならわされている一書を刊行された。いまこの「日本共産党闘争小史」を編むに当つて「アヂ・プロ版」を貴い一つの基礎的な材料とし、記録にはない見出しなどはこれにより、その編序を本書に加えた。
- 四 多くの註が必要であると思うが、本版でもまた充分には果しえなかつた。
- 五 本書は一九四六年に発行してから一度版を改めたが、さらにここに版を改めた。活字を小さくし、文章もなるべく読みやすくしたが、本書の性質上極めて「やさしく」することはできなかつた。
- 六 附録は初版改版ともに市川正一氏の公判記録のうち本書にないところを抜書したものであつたが、本版には公判の最終陳述をとることとした。
- 七 本書はすでに四万部以上を出している。いままでの読者および今後の読者は、現在の日本共産党の活動に加



わりまたはよく知り、そして本書から教訓をくみとられんことを御ねがいする。

一九四九年十一月

編者

## 序論

われわれは日本共産党員であるがゆえに、このゆえにのみ、この法廷に立たされている。多くの同志は日本共産党員であるゆえをもつて、また日本共産党のために活動したゆえをもつて、ブルジョアから酷烈に迫害され迫害され、逮捕され投獄せられ、そして長期の刑をうけ、あるいはブルジョアジーの白色テロのために倒れた。わたくしもまた日本共産党員であるがために、他の理由は一つもなくただその故をもつてのみ、この法廷に立たされている。

その日本共産党、わが日本共産党ははたして何をなしたつたであろうか。いまここに日本共産党の過去——われわれが逮捕されるまでの活動を具体的に述べてこの事を明らかにしたいと思う。

わたくしのいまなさんとするところはしかし、党史を具体的に組織的に述べることではない。党史なるものは、われわれにとつて、党にとつて、したがつてまた日本のプロレタリアートにとつて、極めて重要なものである。なぜなら、一國の共産党の歴史はその國における階級闘争の最高の経験と教訓とを集中したものである。もつとも階級意識のある、もつとも進んだもつとも鍛錬された労働者階級の結成、その闘争、その各種大衆団体内におけるまた党内における活動とその果してきた任務、あるいは闘争の発展のうちに現われた種々の分派および分派活動ならびに党内に生じた諸問題——これらを総括して党史をあむならば、それはプロレタリアートの



階級闘争の発展の上に、革命運動の発展の上に、きわめて貴重なものを与える。わたくしは党史を軽んずるがためではなくて重んずるがゆえに、いまこのブルジョアジーの行方階級裁判のもとでは、重要な党史を述べる時機でもなく、また所でもないと思ふゆえに、ここに党史を述べることはしない。いまわれわれの念願とするところは、この階級裁判に対する闘争をもつて全体の階級闘争に参加し、日本プロレタリアートの運動の歴史の一面をこの法廷における行動によつて作らんとすることである。

この法廷は階級闘争の一場面以外の何物でもない。日本の國家権力はこの法廷をてつとつて、階級闘争の場面たらしめている。見よ、法廷には巡查、憲兵、看守がみちみちているではないか、われわれは鉄の手錠によつて運ばれ、法廷に立てば発言を封ぜられ、専らことに公開禁止をもつて迫られているではないか。

われわれを目して、法廷において大言壯言するものがある。果して然るか、否。われわれはいかなる場合にも階級闘争をやめるはずはなく、つねに階級戦士としてブルジョアジーと闘争するものである。この階級的法廷に立つたときにも、また断頭台上の最後の瞬間においても、われわれ共産黨員は階級闘争をやめるものでなく常にその先頭に立つものである。しかしながら、いま百人足らずの傍聴人を前にして大言壯言もつて満ち足れたりとするものではない。われわれはこの法廷において敵から挑戦されている。酷烈な抑圧の下に挑戦されている。この法廷において言論を抑圧するならばわれわれは一言もいふ必要はない。われわれがこの法廷に立つて毅然たることそれ自体が、大衆に対する大きな宣傳となり煽動となることを信じている。われわれは言論の抑圧を回避してその範圍で大言壯言しようなどというケチくさい考は毛頭もつていないのだ。近頃聞くところによると、日

本共産党を最も破廉恥な方法で裏切つた変節漢、解党派は、われわれが法廷でいたずらに大言壯言している、解党派はそんなことをせずに地下にもくつて闘争をするとかいつていることである。今日まで裁判長がわれわれ同志にたいしてとつた言論圧迫の態度は暗々のうちに解党派の言と合致する。これは甚だ興味あることだ。法服の形をかりている日本ブルジョアジーの権力と解党派との合致を示すものでなくて何んであろう。

壇上にある裁判長の背後にブルジョアジーの権力のあるごとく、われわれの背後には、一言も発することを許されず墓場の静けさを守る聴衆を通じてすら、迫りつつある階級闘争の波が、廣大なる大衆の闘争がわれわれを支援していることを直接に感ずる。われわれのここに述べることはブルジョアジーの挑戦にたいする絶対にはげることのできない、やむをえざる、かつ、忍耐を要求される闘争であつて、單なる大言壯言をもつて宣傳するといふが如きものではない。われわれの背後にある大衆は、ブルジョアジーがわれわれに臨みわれわれを断獄せんとすることを果して許すべきか否かを、もつともよく先んじて判断するであらう。

われわれは日本共産党の眞実を蔽わんとするものではない。プロレタリアは決して眞実を恐れぬ。共産主義者こそ最も眞実を愛するものである。眞実を恐れまたは回避し至めるものは、大衆を抑圧し搾取し隷屬せしめることによつてのみ生活を保つブルジョアジーと、そのブルジョアジーの尻尾についている社会民主主義者どもとである。かれらは日本共産党についてあらゆる恥しらすの虚偽、欺瞞、捏造をたくましくしている。われわれはこの虚偽、欺瞞、捏造をぬきだして党の眞実を示さねばならぬ。もちろん、党の秘密事項および党の諸組織、ならびに党の諸機關の内部においてのみ扱われるべき党内問題については一言も述べるわけにはゆかぬ。それは共



産党の、プロレタリアートの利益のために、絶対に必要なことであるからだ。

ブルジョアジーは日本共産党を火つけか泥棒か入殺しの団体かでもあるようにふれまわり、陰謀、大逆、賣國、國賊とあらゆる悪名をおいかぶせ、極悪非道の憎むべき恐るべきものであるとして、共産黨員に極刑をもつて臨んでいる。否、それで満足するものではなく、もしできることなら、日本共産黨員と日本共産党を支持する革命的労働者農民その他の同情者を、法律とか裁判とかいう廻りくどい手続なしに、みなうち殺してしまいたいと思つている。実際において、ブルジョアジーは法律をもつて「合法的」に共産主義者を迫害しているだけではない。かれらは「非合法的」に一切の手段を使つて共産主義者を迫害してきたつたしまた現に迫害している。

かくのごとくブルジョアジーから極度の憎悪と酷烈極りない迫害を受けている日本共産党は、果していかなる「悪事」をなしたであろうか、またいかなる「恐るべきこと」をなしたのであるか。そのなしたたつたことは、そもそも誰れのために恐るべく、誰れのために憎むべきであつたらうか。日本共産党は果して何者の敵であり、また何者の味方であるのか、このことを眞に問題である。

三・一五以來日本共産党はあらゆる弾圧にも拘らず、常にますます発展しているのは何故だろうか。十人の黨員が逮捕されれば、百人二百人の新しい黨員がつぎつぎと現われて、ますますブルジョアジーの恐るべき敵となつていく。共産党は何故に何物をもつても殺しえぬ不死身のものなのだろうか？ それは共産党はプロレタリアートの党であるからである。プロレタリア階級が存在するかぎりには、またそれが成長するかぎりには、その前衛たる共産党は存続し成長し発展するものなのである。

プロレタリア階級は資本主義社会の産物である。現在の日本の社会は資本主義社会であり、資本主義の社会はブルジョアジーとプロレタリアート、この二階級の階級対立を根幹とする社会である。ブルジョアジーは社会的な生産手段を私有独占し、國家権力を掌握し、これによつてプロレタリアートを搾取し隷屬させている。プロレタリアートは社会のすべての富を生産するにかかわらず、自分では労働力のほか何ら賣るべきものをもたない。主人にして搾取者たるブルジョアジー、被搾取者にして賃銀奴隷たるプロレタリアート、このあいりれない階級の対立している社会が今日現にある日本の社会である。かくの如き階級社会の根本的な否定者、反対者、徹底的な革命的階級はすなわちプロレタリアートであつて、資本主義社会を根柢から掘り崩す歴史的任務をもつていのである。したがつてプロレタリアートは過去の階級でなくして未來の階級である。未來はプロレタリアートのものである。プロレタリアートの党たる共産党はブルジョアジーの一切の支配の顛覆、プロレタリアートの独裁の樹立、社会主義の建設という歴史的偉業の指導者である。それゆえに、共産党はプロレタリア階級の存在するかぎり不死身である。

共産党がプロレタリアートの党たることはつぎのことを意味する。第一、人類の歴史において最後の階級社会である資本主義社会そのものの中に深く根をおろしているために、共産党は勝手氣ままに、つくつたりこわしたりすることはできないものである。第二、共産党は労働階級の前衛であり、廣汎な労苦大衆の最も信頼すべき味方であるとともに、ブルジョア、地主ら一切の搾取者の徹底的な敵であること、第三、共産党はブルジョアジーの規律、現在國家の法律に服従するものでなくこれに敵対するものであり、ただ國際的プロレタリアートの規律——これは決して抽象的なものでなく最も具体的にコミンテルンの規律に集中的に表現されている——にのみ服



従し拘束されるものであること、すなわち共産党がブルジョアジーに対して非合法であるのは全くプロレタリア階級本来の性質であり、自國のブルジョアジーに反抗して万國の労働者が團結することは、いずれの國のプロレタリアートにとつても無條件の信條である。

日本共産党にたいする日本天皇制ブルジョア政府の迫害彈圧は階級対階級の闘争すなわち政治的闘争である。日本共産党と日本ブルジョア政府との間の闘争は公然たる権力のための闘争、権力争奪の闘争であつて、他の犯罪的事件でもなく、またいわゆる社会問題というが如きものでもない。ブルジョアジーはこの眞実を労働者農民の大衆が知ることを恐れる。このために彼等は日本共産党に対して野蠻酷烈な彈圧を加えるばかりでなく、ありとあらゆる悪らつな下劣な中傷サンブを試み、日本共産党はプロレタリアの味方ではなくて敵であるかのように見せかけようとして、苦心慘憺しているのである。

このブルジョアジーの仕事を助けるのに頼もしい友人として、彼等は社会民主主義者をもつてゐる。彼等社会民主主義者はブルジョアが直接手の及ばない労働者の間に、プロレタリアートの革命的組織でありその集中的な指導者である共産党に対する不信を撒き散らして、その勢力の破壊につとめ、そして裏切り社会民主主義政党内よつてプロレタリアートをブルジョアジーに結びつけようとするのだ。

数年前までのように、日本共産党がその政綱を公然と掲げて大衆のうちに活動することをしなかつた時代ならば別であるかも知れぬが、すでに共産党が公然と大衆のうちに活動している今日においては、ブルジョアジーと社会民主主義者との一切の努力もムダである。かれらの共産党にたいする迫害憎悪が強いということは、大衆の共産党にたいする信頼が強いことを示すものなのだ。

さて、日本共産党ははたしていかなる「悪事」をなしてきたらうか。これから悪事の数々を述べるのであるが、その主要なものにとどめる。しかし日本共産党の「悪事」を鮮やかに示すためには、プロレタリアートの敵であるブルジョアジーがいつたい、どんな「善事」をしたかを述べる必要があると思ふ。日本共産党は相手なしの一人相撲をやつたのではない。敵手ブルジョアジーとつくんで闘つたのであるから、敵がどんな手をつかつたかを述べることは、日本共産党がどんなことをやつたかを明らかにすることになる。

以下、日本共産党の重要な発展の時期をわけて主要な点をのべる。まず、日本共産党はいかなる時代に生れて闘争し成長し來つたか、今日、われわれが逮捕されるまでの全時代の總括的な姿をのべようと思ふ。



## 一 日本共産党の成立

日本共産党は今日（一九三一年）までに九カ年の生活をへている。この間、日本共産党はコミンテルンの一支体として終始一貫して存している。ブルジョアジーは日本共産党が幾度か無連絡に作られたかのようにいうが、

これはつとつとつび、欺瞞である。日本共産党はブルジョアジーの強圧のために幾度か打撃を蒙り、また党内に流れ入った小ブルジョア的日和見主義のために発展を妨げられ後退せしめられ、またある時には党組織の解体にまでいつたこともあつたが、しかし日本共産党はコミンテルンとともに存続し、その一支部として生成発展の途をたどつてきている。

ブルジョアジーと社会民主主義者とは、日本共産党は特定の個人、社会主義者の巨頭連とか思いもかけずに出現した天才のようなものによつてひそかに作られたもので、その巨頭とか天才とかが左右している徒党だとか、また日本共産党は選ばれた少数者のもので大衆には堅く門戸を鎖した陰謀団体だとかいつている。これは明らかに悪宣傳である。日本共産党はブルジョアジーに対して闘争する日本の労働者階級のうちの革命的勢力がつくりあげ支持し発展させたものである。また実際において、日本共産党の成立から発展のあいだに、最も献身的な努力をささげたものは、有名な社会主義巨頭だとか「天才」だとかではなくて、無名の労働者戦士たちであつた。また日本共産党がブルジョア政府に対して秘密結社であることすなわち非合法の党であることは決して特殊な陰謀的徒党であることを意味するのではない。廣大なる大衆を革命に動員しなければならぬ共産党は決して陰謀的徒党たることを得ないものなのだ。

また、日本共産党は日本の國情に合わぬ、日本とは無縁の全くの外來物であるとブルジョアジーは常にいつており、泉二刑事局長のときは「日本共産党の犯罪は思想的内乱罪であり天人ともに許さざる國賊である」といつている。社会民主主義者どもはその尻尾について、日本共産党は日本の國情に合致しない、日本の特殊性を無視していると好んでいつている。そしてかれら社会民主主義者どもは、日本の國情に立脚したと称する裏切りの無産政党、社会民主主義政党をつくり、ブルジョアジーの代理機関となりはてている。しかしながら恐るべきことには日本共産党ほど日本の國情に深く根をおろした政党はほかにないのだ。日本の現在の國情はブルジョアジーとプロレタリアートとの間の階級闘争の激化したものにほかならず、その日本プロレタリアートの党こそは日本共産党なのである。日本共産党は決して偶然な産物ではない。勝手につくつたり壊したりすることのできるものではない。日本共産党の存在と発展とを基礎づける一定の事情が嚴として存在するのである。

## 1 國際情勢

國際情勢をみると、一九一四年から一八年にいたる慘酷な世界大戦は、最初の國際的矛盾の大爆發であつた。その時からは、偉大なる指導者レーニンのいつたように、戦争と革命との時代であつた。世界的規模におけるブルジョア独裁からプロレタリア独裁への轉換時代である。一九一七年、ボルシェヴィキに率いられたロシア・プロレタリアートの革命が勝利をえて、今日のソヴェート社会主義共和國連邦が樹立され、ここに世界におけるブ



プロレタリアートの國家がはじめて現出した。

かくて、世界は一方ますます破滅に向う資本主義の世界と、他方なにももの力をもつてもとどめることのできない社会主義建設の世界と、この二つの世界に分裂した。またソヴェート権力をその國內いたるところに樹立している中國革命をはじめとして、世界の植民地半植民地においてますます発展している革命は、帝國主義の基礎をゆり動かし崩り崩している。さらにまた、資本主義的生産合理化が荒々しく強行されているが、それもついに資本主義永遠の安定を祝うものではなくて、ますます資本主義の矛盾を深化し擴大し、いまや何人の目にも隠しきれない世界大恐慌をきたしている。

中國においては各軍閥の間の内戦がたえまなく行われて何十万という中國民衆が犠牲にされているが、この内戦は実はそれぞれの軍閥の背景にある日本その他の帝國主義國家の間の國際的戦争なのである。この戦争には日本の帝國主義者どもは積極的に参加しているのだ。また中國の革命に対しては日本をはじめ帝國主義者どもは口実をえてしばしば出兵しているし、中國の沿岸や揚子江のような大河には常に、日本の駆逐艦、砲艦その他が遊弋している。そして日本の兵卒——労働者農民——がこのために多く犠牲にされている。

またこの時代には、第二インタナショナルの裏切り英雄どもが、世界大戦とともに社会主義を弊履のように投げ捨てて、ブルジョア権力の防衛者となり、戦後にはプロレタリア革命の鎮圧者、植民地革命運動の抑圧者の手先となり、ブルジョアジーの政府——例えばドイツその他のごとき——の一員となつてプロレタリア革命運動に對する最大の公然たる防壁となつた。

レーニンは世界大戦中に第二インタナショナルの崩壊を宣言し、第三インタナショナルを創立した。コミンテ

ルンはプロレタリア革命のための、またプロレタリア独裁のための世界党として、世界の植民地半植民地の民族、最も搾取され抑圧されている民族の力強い楯として、世界革命の總司令として、ボルシェヴィキの光輝ある傳統によつて常に一切の日和見主義を克服しながら年ごとに強大を加えている。

こういう時代においてはプロレタリアの政党すなわち共産党のみが革命党であり、またコミンテルンの支部たるもののみが共産党なのである。

こういう國際的事情のうちにはわが日本共産党は成立し闘争し発展してきたのである。

## 2 國內情勢

さて、日本共産党が創立されていらい今日まで、すなわち帝國主義世界大戦が勃発してから今日までの、日本共産党の全生活を基礎づけている國際的條件を述べた。これから國內事情を中心として述べたいと思う。

日本の資本主義は世界大戦を境として全く面目をかえた。日本の資本主義は海外市場と資源とを強奪して飛躍的な発展をとげたが、それは同時に、内部矛盾のはげしい進展を伴つた。この矛盾は戦後にするどく日本の全社会上に、連続的な恐慌、不況、不景氣として現われた。一九一八年（大正七年）の米騒動を最初の烽火として、一九二〇年（大正九年）の恐慌、二三年の大震災恐慌、さらに二七年（昭和二年）の金融恐慌、そして今日われわれがみるとおりの大恐慌の中にひきずりこまれているのである。

戦後の數年間は日本資本主義の生産力もなお幾分、発展の途をたどつたが、内外の事情はその発展をはばみ、むしろ縮小させる方向にむけた。中國革命に脅かされて市場は狭小となり、農業は年毎に破滅的危機に陥り、重



要工業ことに鉄工業のごときは年と共に不況の度を加えている。雇用労働者の数もこの間に絶對的に減少し、労働者の生活水準は資本主義によつては高められず、年毎に奈落の底におこまれている。こういう情勢に面して、日本ブルジョアジーは内外において、経済的に政治的に、また武力的に平和的に、合法的に非合法的に、あらゆる方法をつくして危機を切りぬける策を講じたが、それは結局、労働者農民および朝鮮、台湾、満洲等の植民地の労苦大衆の犠牲によつて行われたのである。それでもなお危機をしのぐことができず、経済的政治的危機はいよいよ深まり、今日のような大恐慌のまつただ中に落ちこんでいる。これは必然のことであつて偶然の不幸といつたようなものではない。資本主義制度が日本に存在するかぎりまぬかれることのできない必然のものである。

かように矛盾は深まり危機は迫つてきた。この過程はまた同時に資本の集中独占を強める道であり、一握りの金融資本家に政治的経済的権力が集中される過程であつた。いまや日本には、一方に労働者農民や植民地大衆の生血を吸つて身動きできぬほどにふくれ上つた超大ブルジョア（三井、三菱、住友、安田、川崎、大倉等）があり、他方に飢餓線上にあえぐ数千万の大衆がある。しかし資本家は満足するにたつだけの利益がないという理由をもつて、巨大な社会的に有用な生産力、工場や機械を休止し閉鎖し荒廃にまかせている。また農村の状態をみると、もう今日の日本國家の指導者であり支配者であるブルジョアジーの手をもつては、いかんともなしがたい状態にある。大地主の土地を没収するよりほかに方法がないほどに切迫した状態、農業革命の危機が迫りに迫つてきている。

三井、三菱などの大ブルジョアから金を出させることもできず、さりとてますます巨大な額に上つてゆく軍事費には一指をもふれることもできず、日本の國家財政はいままさに危機に瀕し破綻に面している。また日本の資

本主義・帝國主義の基礎をなしている台湾朝鮮などの植民地、満洲のような半植民地も、もはや昔のように「うまく」はゆかず、日本の資本主義は自らを支える力を失い、ブルジョアジーの國民経済体系は互解の寸前にある。そこで、ブルジョアジーはますます狂乱的に破壊的な帝國主義戦争に逃れ道を求めてやまないのである。

すでに数年前から日本の帝國主義者は中國にたいして強盜戦争を遂行しているが、さらに、太平洋を挟んでの第二の世界大戦！これに日本帝國主義は大立物としての役目を演じなければならぬようになってきているのだ。この帝國主義戦争、この世界的な破滅的な残酷な世界帝國主義戦争は、すでに日本の陸海軍その他の帝國主義者の現実の日程に上つている。かくて、一方では経済的恐慌、労働者農民大衆の堪えがたい窮乏、隸屬、そして一方では破壊的な残酷な戦争！この両者は形こそ異れ、ひたすらに利潤を追求するに余念のない盲目的に貪欲な資本主義の産出した、つなかりあつた双生兒なのだ。

わが日本共産党はかかる情勢のもとに生れ、生活し、闘争し、発展してきたのである。わたくしは今まで日本共産党の基礎を條件づけた世界情勢および日本國內の客観的な情勢を簡単に要約した。さらに、今日の日本社会、國家を支配するブルジョアジーが具体的に何事をなしたかを述べることに、日本共産党の全発展、全生活を理解するのに必要であると思う。

### 3 日本ブルジョアジー

日本ブルジョアジーはかかる時代のうちに巨大な資本を蓄積してきた。労働者大衆を搾取してえた資本をさらに利用して一層ひどく労働者を搾取し、資本をいよいよますます高く積み立てた。世界大戦の前と後の簡単な数字に



よつてこの点をみよう。

全国の会社拂込資本および出資額の総計指数についてみると、世界大戦直後の一九一九年（大正八年）を一〇〇とすれば、戦前の一九一四年（大正三年）はわずかに三四、すなわち戦後は戦前の約三倍であり、さらに最近の一九二八年は二二〇強を示して大戦直後の二倍強、戦前の六倍半になつてゐる。この数字はもとより大略を示すものであり、なお他の條件（物價等）をも考慮に入れなければならぬが、疑いもなく資本の急速な蓄積を物語つてゐる。またこの巨大資本はますます少数の大ブルジョアの手集中してゐる。すなわち、拂込資本五百万円以上の大会社は戦前には会社総数の〇・三七％で総拂込資本の三八・五六％を、数では〇・四％のものが資本では四〇％を集めてゐることを示し、大戦前ですら資本集中度の高いことを物語つてゐるが、大戦直後には、会社総数の一・四％で拂込総資本の五三・六％を占め、さらに最近一九二八年には、会社数の一・七％強のものが総拂込資本の六五％というものを占めてゐる。資本の集中はまた労働者の集中でもある。一九二八年度において五〇〇人以上使用工場は工場数において全体の一％で労働者総数の三四・六％すなわち三分の一以上を集めてゐる。しかもこれは五人以下の労働者使用の鑛山工場を除いたものであるから、集中度がいかに高いか想像に余りがある。また資本の集積の有様も会社拂込資本などではよくその真相を伝えることができるものではなく、実際ににおいては僅に数個の巨大ブルジョアたる三井、三菱、住友等が数多の会社工場を直接に経営しまたは間接に支配してゐるのであつて、三井系三菱系の会社が全数の三〇％くらいを事実上左右してゐるのである。

資本はますます少数の大ブルジョアの手集中され独占され、少数の金融大ブルジョアが全國民生活、經濟生活、政治生活を支配するようになった。ブルジョアジーは特殊の事情によつて早くから地主勢力と反動的に結合

し、今日、古い地主的な官僚的な半封建的な勢力との共同権力において確実に指導権を掌握してゐる。政党内閣が戦時戦後の資本主義の急激な嵐のような発展のときに生れたのも決して偶然の事ではない。日本ブルジョアジーは單に衆議院や内閣だけでなく、半封建的な最も遅れた残酷な抑圧形態である君主制、貴族院、枢密院などの支配形態をも、かれら一握りの金融ブルジョアジーの利益のために、大衆を抑圧し弾圧する鋭い武器として使用してゐる。

特にブルジョアジーは階級敵なるプロレタリアート——かれらの支配を根底からくつがえす闘争をもつておびやかしてゐるところの——に向つてはげしい抑圧の武器をさし向ける。さらにまたこの危機に際して最も残忍酷薄な産業合理化を強行してゐる。この産業合理化はいかにも全体の利益のためというふうに見せかけるが、事實は全く労働者の犠牲によつてのみ行われるのである。彼らの行く産業合理化とは、労働の強化によつて労働者を生きた機械のごとくにし、工場を労働者の棺桶とする強烈な搾取にはかならぬのである。労働者は強烈な労働強化によつて心身ともに非常に疲弊し、しかもその労働力を盛りかえすために必要な賃銀は絶対に与えられないために、生きながら工場の中で骨と皮とにされている。また、産業合理化は非常に多くの労働者を工場から街頭に追いだし莫大な失業者をつくつた。この失業者は資本主義制度の存続するかぎりには再び雇用されない構成的な失業者である。

ここに産業合理化に関する資本家の言葉をきこう。日本鋼管会社では鋼管一トン当りに要する職工数が一九二〇年には一〇人余であつたが、二四年には生産の合理化が進んだ結果として七人、二七年には五人、二八年の上半期には四人に減じた。この会社の重役笠原某はつぎのようにいつてゐる。「日本鋼管会社の生産費切下げの原因



の第一は氣分の緊張であつてこれが一番能率増進に役立つものである、職員や職工の全部が会社の興隆を感じながら仕事に従事すればできないと思つていたことでもできる。第二は職工の熟練であり、第三は設備の改良であるが、設備の改良といつても豊富な資金をかけて行うのではなく、いままで三人の職工を使つていた箇所を二人半で間に合わせるといふように、どことなく全般に互つて設備を整えるのである」と。すなわち、この言葉は一にも二にも搾取の強化こそが資本家のやる生産合理化であることを語つてゐる。

つぎに農民に対してはどうか？ 日本の権力を握つてゐるブルジョア政府は農村においては地主の利益擁護に汲々としてゐる。小作争議において農民にくだす断乎たる弾圧はここにくだしくいうまでもないが、農村には莫大な帝國主義的租税の重圧を課し、また莫大な借金をもつて縛りつけ、そのうえ、農民にとつて絶対に缺くことのできない肥料までもブルジョアジーは独占價值によつて農民を搾り上げてゐる。しかも三井と三菱とだけではほとんど全肥料とくに硫酸を独占してゐる。ブルジョアジーは地主の利益だけを全力をつくして守り、小作人や貧乏な百姓のごとき農民の大多數を抑圧し搾取し鉄鎖で縛りつけてゐるのである。

日本のブルジョアジーはすべての労働者農民の運動にたいしてますます酷烈な弾圧を加えてゐる。ストライキや農民闘争にたいする警官隊の武装襲撃、必要に応じて軍隊の出動、暴力團の隠然公然の使用、労働者農民の資本家地主にたいする闘争を酷烈に抑圧するためのいろいろな法律法令（種々の労働争議調停法や農民調停法などは調停に名をかりた抑圧の法令である）、治安維持法——我々はいまそれによつて起訴されてゐる——労働者全体の利益のために徹底的に革命的に闘争者を絞首台上にのぼらせることを目的とした治安維持法、これらがいかに労働者農民全体を抑圧弾圧するものであろうか。治安維持法の犠牲者はすでに一三〇七名、治安維持法以外のい

ろいろの法令たとえば暴力行爲取締法違反、騷擾罪、傷害罪などで犠牲になつたものは、昨年の後半いらい部分的に判明したものだけでも三一名にのぼつてゐる。これらの犠牲は同時に労働者農民の闘争、ストライキや小作争議に非常に影響してその闘争力をそいでゐる。もしこれらがなかつたなら労働者農民の闘争力はより強大化されていたに相違ないと、ブルジョア新聞ですらいつてゐるところである。

つぎにブルジョアジーは革命中國にたいして兇暴きわまる軍事干渉を行つてゐる。数々の中國出兵と中國の労働者、農民、兵卒の大殺戮、日常不斷の軍事的侵略、また新舊の中國軍閥——中國労働大衆の許すことのできない残酷な軍閥と結托して最も憎むべき野合によつてその懐を肥やしてゐる。また日本の植民地、朝鮮、台湾の革命的叛乱にたいしていかに酷烈残忍な弾圧を加えたかはここにいうまでもないところである。

さらにこの時代において、日本のブルジョアジーは最も執狂的に帝國主義戦争の準備に夢中になつており、軍備擴張競争の大立物となつてゐることは周知のことである。豺狼のごとく猛々しい帝國主義者は軍備の大擴張を行つてゐる。軍縮會議こそしばしば開かれるが、實際の軍縮などはどこにも影も形もない。會議はただ労働者農民を平和の宣傳で瞞しておいて、いきなり戦場にひつぱりだし、かれらの貪欲の犠牲にするためだけのものだ。日本の軍事費も二一年のワシントン會議の後表面では減少してゐるように見えるが、實際には累年増大してゐる。單に陸海軍予算の面だけ見たのではわからないが、種々の形で戦争準備のために労働者農民の膏血からなる國庫支出を増大してゐることは疑いもない事實である。ロンドン會議で日本は保留財源が五億円うかびでたといつてゐるが、実はうかんではいなくて、うち三億七千四百万円という莫大な金額は海軍補充計画に使用されることになつてゐる。このことについては小ブルジョア的な世論がちよつと不平をならべたてたことがあつた。ブ



ブルジョアジーが平和と軍縮の宣傳に汗だくになつているとき、社会民主主義者たちはすぐその尻尾にくつついて平和主義を撒き散らしている。しかし、こんなことでは帝國主義戦争に対する日本の準備が刻々に進んで、今日明日にも、どんな導火線でもすぐに爆発する形になつていふことを少しも否定することはできない。一方において平和を説いていながら、それよりも強く忠君愛國主義、排外主義を盛んに鼓吹しているではないか。この愛國主義、排外主義の鼓吹は平和主義の宣傳と相呼應して、労働者農民をブルジョアジーの利益のために戰場にひきだし大砲の餌食にするためにやつていふのだ。帝國主義國が相対立しているこの世界においては帝國主義戦争は不可避である。たとえば、ドイツは賠償金および債務の支拂延期を許されたが、その足もとから早くも危機に陥り、大銀行は支拂停止をし、そしてフランスの軍隊はドイツの國境に集結するようになつた。これは世界戦争の現実の糸口である。帝國主義戦争はいたるところに大きな口をあけていふ。

帝國主義戦争にたいする闘争はわが党のみが遂行してきた。日本共産党はその幼弱な時代においてすらも、日本の中國にたいする現実の戦争に反対してあらゆる手段をもつて戦つてきた。濟南事件の当時、日本共産党と中國共産党とは共同声明を発表し、出征軍隊にたいする共同宣傳を実行し、またそのうち第三師團の出兵にたいしては帝國主義戦争反対を叫ぶとともに、労働者農民は戦争をたたきつぶして自國のブルジョア國家権力を顛覆する以外には自分たちの利益をほんとうに守る方法はないことを宣傳した。しかしながらなお力の及ばないものがあつた。今日戦争の危機はますます深刻となつていふ。國際的な反帝國主義デーは八月一日である。全世界の労働者は共産党の旗のもとに、この帝國主義戦争——世界の労働者農民や植民地民族を殺戮してただ少数資本家どもの利益を図るための帝國主義戦争にたいして、大衆的デモによつて抗議し反対しこれを紛碎しなければならぬ。

戦争が始まつたならプロレタリアートはブルジョア政府を倒して戦争を内乱へ轉化しなければならぬ。この共産党の主張を全國の労働者農民の目の前に示すことが必要である。

#### 4 日本の社会民主主義

最後に重要なことは、ブルジョアジーがあらゆる方面における酷烈な搾取圧制を今日では自身の手だけでやりとおすことができなくなつたので、これを援ける頼もしい友人を必要とするようになったことだ。今日の時代では、労働者の中におけるブルジョアジーの代理人たる社会民主主義者、あらゆる形の社会民主主義者たちが、ブルジョアジーの労働者農民にたいする抑圧支配とその危機のきりぬけとを助けている。これがなくては今日のブルジョアジーはその支配を維持することができないのだ。獅子身中の蟲として決定的に労働者の利益を裏切り、労働者大衆の利益をブルジョアジーに賣り渡すことを任務とする社会民主主義者がなかつたならば、ブルジョアジーはとらうていその支配を維持し得ないのだ。いかに社会民主主義者がブルジョアジーの支柱となつていふかは、小はストライキの例から大は戦争にたいする態度において明瞭である。

この社会民主主義者の中には、今日のように経済的政治的危機が切迫したときになると、かつては労働者階級の最も強い組織である共産党に加わつていながら、階級闘争が尖鋭化するともに共産党を裏切つて逃げだした社会民主主義者——最も右翼的な露骨な君主主義者であり「愛國」主義者であり排外主義者である社会ファシスト的解党派がある。こういう社会民主主義者は危機が迫れば迫るほど、階級闘争が激化すればするほど、ブルジョアジーの非常に頼もしい頼み甲斐のある援助者となるものである。社会民主主義者はすべて天皇主義者であり



忠君愛國主義者であり排外主義者であり「平和」主義者である。またかれらは一様にブルジョアジーの戦争遂行の大きな援助者であり、かれらなくしては今日の反動的な戦争は行われぬ。第一次世界大戦において、第二インターナショナルの英雄たちは大言壯語をもつて戦争反対を叫びながら、大戦勃発とともにいち早くも戦争予算に賛成し裏切り去つてしまつた。この裏切りがなかつたならば、あれほどの大殺戮戦は遂行されなかつたのだ。今日においても社会民主主義者の援助がなくては戦争遂行が困難なことを知つていたので、ブルジョアジーはあらゆる方法で社会民主主義者を愛し、社会民主主義者もまたこの愛をうけいれてゐる。最近大合同したと称する全労農大衆党なるものの綱領を見ると、労働者農民大衆の味方であるかのような名前こそつけてゐるが、そのうちに帝國主義戦争反対の片言隻語すらもない。それどころか、そこには労働者農民の世界的入國および住居の自由確立という項目がある。これは輝やかしい労働者農民の社会のために社会主義建設の発展をとげつつあるソヴェート同盟への入國自由の要求かと思ふとさにあらずで、前後をよく読むとアメリカにおしかけて入國する自由を要求してゐるのだ。とりもなおさず、日本帝國主義者の対アメリカ戦争政策の一部をたくみに主張してゐるのだ。この全労農大衆党も演説会では帝國主義戦争反対を景氣よく叫ぶかも知れない。が、實際の行動、闘争ではこれを裏切つて、共産党および革命的労働組合、赤色組合の反帝國主義戦争闘争の組織を妨害しサボタージュし、官憲のかわりを勤めて労働者農民大衆の参加を抑えるのに狂奔するのだ。どんな名前をつけようと、社会民主主義者は労働者農民大衆の憎悪すべき敵であり、ブルジョアジーの大切な味方である。かれらはまたソヴェート連邦の敵でもあるが、これはここでは述べない。かれら社会民主主義者はさらにまた、中國革命にたいする日本帝國主義者の干渉を公然隠然と幫助しており、また中國革命を裏切つて中國の労働者農民を幾百万も殺戮したもののどの盟友でもある。またかれらは、日本の帝國主義者が朝鮮台湾などの植民地民族に対する鉄鎖による圧迫の支持者であり、「植民地の解放、植民地の独立」をみずから掲げることには怖毛をふるうが、このために闘うものに対しては実に勇敢に反対するものなのだ。

さらに、これら社会民主主義者は資本家的な経営、とくに「産業合理化」の最も忠実な協力者である。産業民主主義というような御題目のもとに、いかにかれらが資本家に忠実な労働者圧迫の代理機関となつてゐるかは、労働総同盟、海員協同会などの行動を見れば明らかである。またかれらは労働者農民の革命的な運動にたいするブルジョア政府の弾圧、白色テロを陰に陽に極めて熱心に支持してゐる。革命的労働者を組合から追いだし、また工場では、挑戦的な資本家と闘争する労働者を工場主に密告し警察にひき渡し監獄に追ひこむ役目も演じてゐる。日本の社会民主主義者は最も國際的に立派に顔のきく社会民主主義者である。日本の今日ではこんなに國際的なものは他にはない。

## 5 日本資本主義の発達とプロレタリアート

日本共産党は一九二二年七月に創立された。わが党はたんに日本の共産党としてだけでなく、世界プロレタリアートの党たる第三インターナショナルすなわちコミンテルンの日本支部として創立された。そして今日に至るまでコミンテルンの支部として終始一貫して存続し発展してきたのであるが、日本の資本主義、日本の政治経済と無関係であるかというに、もちろんそうではなく、その根底には日本資本主義の発展がある。日本共産党は日本のプロレタリアートの政党であるから、日本のプロレタリアートを産んだ日本の資本主義の発達についてこ



に簡単に述べたい。

六十三年前の明治維新は日本の歴史上における一つの明白な革命であり、また「國体の変革」であつて、これによつて日本資本主義は嵐のごとき急激な発達をとげた。後藤象次郎、福岡孝悌などが慶應三年かに朝廷にだした建白書の中に「御國体を変革し」あるいは「國体の変遷」「國体の一新」の言葉を用いている。治安維持法に「國体の変革」の文字があり、日本の國体は万世一系不変であるといつてゐるが、明治の功臣たちは明治維新を「國体の変革」であるといつてゐる。この変革は日本における生産の所有関係が變つたこと、すなわち封建時代と資本主義時代とは根底の生産関係が變つてきたことに基づくのである。それらしい日本資本主義の発達は実に目ざましいものがあつたが、この急激な発展はいわゆる天佑によるものであろうか、または日本のブルジョアが特に精巧であつたがためであらうか。日本の資本主義の発達も、他のいづれの國にも劣らないむごたらしい犠牲、資本家の盲目的な利潤追求のためにプロレタリアが残酷な犠牲となることによつてのみなすとげられたのである。

第一には、明治の初年においては土地を農民からどしどし收奪し、また高い租税をとりたて——当時ひきつづいて農民一揆が起つたことによつてもわかる——あるいは高利貸によつて農民を收奪搾取した。

第二には、労働者にたいして野蠻残酷な搾取を行つた。飢餓的な低い賃金、長い労働時間、幼児やかよわい婦人など抵抗力のない労働者の酷使、また地獄のような監獄部屋や紡績工場の寄宿者などの残酷な制度、これらによつて日本の資本主義は発達したのである。明治二十年から三十年頃の神戸のマッチ工場では軸つけ作業のために五つ六つの幼い子供を使用し、いかに物價が安かつたその頃とはいへ、終日こき使つて日給は一銭か二銭であつた。また当時の紡績女工の日給は八銭二三厘、男工でも十七銭といふ低いものであつた。すこし進んで明治四

十年ごろになつても、紡績男工は四十銭、女工は二十五銭という低賃銀である。労働時間は普通に十二時間と称しているが、実際はその二倍に近く、場合によつては二三日も晝夜兼行で働かせることがしばしばであつた。こゝういふ残忍酷薄な搾取によつて日本工業の花形であり輸出貿易の大宗である紡績業は発達してきたのである。

第三には、かかる苛酷な労働条件を労働者に強いるためには、吸血的な法律や兇暴無比な警察が日本資本主義の発達にとつて絶対に必要であつた。搾取が兇暴酷烈をきわめるとともに抑圧もまた兇暴酷烈であつた。このことは今日の日本内地と朝鮮とをくらべればわかる。朝鮮の民衆を掠奪し抑圧することは日本内地の労働者に対するのよりもはるかに酷烈である。植民地朝鮮では日本内地で見ることのできない兇暴な法律と警察とがある。朝鮮には今でも笞刑というものが法律的に存在していると聞いている。また日本のブルジョアは國軍と称して労働者農民大衆を戦争の犠牲においやつて植民地を略取し、その植民地民衆を徹底的に收奪し、これに徹底的な圧迫を加える。このことは朝鮮台湾および名目は何ともあれ実際では日本の植民地になつてゐる満洲における明白な事実である。実にこゝういふ手段によつてのみ日本資本主義は欧米の資本主義と拮抗するまでに急速な成長をとげたのである。

日本のブルジョアはかかる成長をとげるとともに封建的な地主勢力と反動的な結合をなした。すなわち凶暴な官僚的な政府はこの結合を現わしている。一九二七年のコミンテルンの日本に関するテーゼは「一八六八年（明治元年）の革命は日本にブルジョアの発展の路を開いた。だが政治権力は封建的諸要素の手中、そして軍閥、宮廷閥の手中に止まつた。その場合、日本國家の封建的特質は單に傳統的殘存物、舊時代の遺物であつたばかりではない。それはまた資本主義の原始的蓄積のために便利な道具となり、日本資本主義はその後の発展の全行程



をも通じて巧みにこれを利用した」といい、また「舊日本國家のブルジョア國家への変質は二つの方向にそつて行われた。すなわち一方では、産業・商業・金融ブルジョアジーの比重と政治的意義とが不斷に増大し、他方において経済的諸原因および労働者農民運動に対する恐怖、そしてまた帝國主義政策の要求にかられて、封建的諸層と新興ブルジョアジーとの融合がきわめて急速に進行した」といつているが、まさにそのとおりである。

日本資本主義は世界大戦を一線として、飛躍的な発展をとげた。これは前にも述べたが、海外市場の強奪、大正五年大隈内閣（加藤外務大臣）時代の中國に対する強盜的な二十一カ條約の強制、國內労働者の極度の酷使による急激な生産増大と搾取の強化、——これらによつて発展し、大戦を利用して一挙に大飛躍したのである。三井三菱を筆頭とした大ブルジョアは日本の労働者農民、朝鮮台湾中國の労苦大衆の生血をあくことなく吸いとつて肥え太つたのだ。そしていまや日本ブルジョアジーは舊地主勢力を凌駕して、日本帝國の主人になりすましている。一九二七年テューゼにおいても「近代日本は資本家と大土地私有者とのブロック——しかもそのヘゲモニーは前者すなわち資本家にある——によつて支配されている」、また「正しく現代の日本國家こそそのあらゆる封建的特質と残存物とにかかわらず、日本資本主義の最も集中的な表現であり……」といつているが、これまた、まさにそのとおりである。このことは日本を少しでも進歩的にしたのではなく、かえつて一そら強烈な反動の鉄鎖で全日本をまきつけたのである。

以上述べたように、日本における資本主義の発展は目ざましく進展したが、これは同時にブルジョアジー対プロレタリアートの階級闘争をも非常に発展させた。すでに明治年間においても、若き日本のプロレタリアはいわゆる藩閥政府、專制政府に反対する自由主義的な大衆闘争に参加している。当時はかかる大衆闘争の公然また隱

然の指導者はブルジョア政党であつたが、實際の兵卒として働いたものは労働者である。日露戦争の大犠牲にたいして日本大衆の不平が高まつたとき、ブルジョアジーはポーツマス條約反対というスローガンで労働者の不平をはずしてしまつた。そこにかの焼打事件のごとき大衆蜂起的なものが起つたが、ブルジョア政党者流はさんざんにプロレタリアを使つておきながら、直ちに藩閥政府、官僚政府と妥協苟合してプロレタリアを路傍になげすめた。こういう例は他にも数多くあり一々挙げるにいとまがないほどであるが、その最後のものは普通選挙運動であつて、ブルジョアジーのプロレタリアートにたいする裏切り行爲の最も醜いものの一つであつた。普通選挙を中心としたデモクラシー運動の大衆動員のさい、馬に乗つて先頭に立つた尾崎行雄らはちよつとの間だけ行列の先頭に立つたが、忽ちに労働者を警察や牢獄にひき渡して藩閥政府といひ加減な妥協をした。

かかる間にも、明治から大正にかけて日本プロレタリアートは政治闘争に向う一つの過渡的な経験を積んできた。むろん日本のプロレタリアートは世界のすべてのプロレタリアートと同様に、時に騙されながらも常にブルジョアジーにたいして闘つてきている。プロレタリアが少しでも資本家に反抗して自分の利益を主張すれば、資本家は直ちに半封建的な國家機關の力を借りてこれを強圧し、新しく興つた労働者の運動、労働組合運動や社会主義運動を一切非合法だと宣告し抑圧した。

明治三十三年（一九〇〇年）にできた治安警察法によつてその翌年には最初の社会民主党が禁止された。ついで明治四十三年（一九一〇年）の幸徳事件を機会として社会主義者にたいする迫害がひきつづき行われた。かかる状態のもとに日本のプロレタリアートは闘争をつづけた。日露戦争当時には日本のプロレタリアートはまだ殆んど國際主義をもつていなかったといつてもよいほどに稚いものではあつたが、帝政ロシアの第一革命の前夜、



一九〇四年にヘーグに開かれた万国社会党大会で、当時の日本の社会党の闘士片山潜——今日コミンテルンの輝かしい指導的地位にあるセン・カタヤマ——が、日本ブルジョアジーの敵國である帝政ロシアの社会民主労働党のブレハノフ——いまは裏切り者の棟領とされているが——と堅き握手をしたのである。日本プロレタリアートの稚い時代に先覚者の一人が日本ブルジョアジーの敵國の社会主義者と握手したという事実は日本プロレタリアートの光榮ある記憶である。

さらに大正七年（一九一八年）の米騒動に例をとつてみよう。この米騒動は小ブルジョア指導者が奸商征伐というスローガンにもつて行つたが、その本質は日本資本主義の危機、世界大戦中に極度に発展した資本主義の矛盾の最初の爆発にほかならないのである。この米騒動がいかに野蠻的な方法で残酷に鎮圧されたかについてはここに語りぬが、ここに注意すべきは、その当時まだ自己の組織された指導者をもたなかつたプロレタリアがみずから先頭に立つて到る所に闘つた、ということである。米騒動の先頭に立つて英雄的に闘つたのは労働者が中心であつた。この米騒動があのような慘憺たる敗北をなめなければならなかつたのはなぜであらうか？ それは一大衆蜂起の中心たるプロレタリア階級に組織された強い指導部、すなわちプロレタリアートの政党、共産党がなかつたからである。大衆のかかる蜂起が共産党なくしてはいかにもみじめな敗北をうけるものであるかを、つともよく示すものであつた。

また日本プロレタリアートにとつて一つの最も記憶すべき事件は、一九一九年（大正八年）の三月における朝鮮の蜂起、かの万歳事件の名をもつて知られている独立のための蜂起である。日本帝國主義の堪えがたい鉄の圧迫のもとに抑えつけられていた朝鮮民族は、やむにやまれず日本帝國主義の怖るべき軍隊の前に蜂起した。そし

ていかに残酷な鎮圧を加えられたかここにあらためていう必要はない。当時、日本プロレタリアートはこの朝鮮民族の蜂起にたいして積極的な援助を与えることができなかった。これは日本プロレタリアートの朝鮮民族にたいする一つの恥辱である。しかしながら、今日においては日本プロレタリアートも成長して、朝鮮台湾の植民地民衆、中國労働農民大衆の最もよき信頼すべき忠実なる革命的盟友となりつつある。

## 6 党創立直前の時代

つぎに日本共産党創立直前の段階にはいる。まず社会主義同盟の時代について簡単に述べたい。

前に述べたような、労働者の数的増大と大工場の集中という客観的な条件とその政治的経済的闘争の経験および國際的經驗によつて得た主観的な条件の発達によつて、日本プロレタリアートが階級闘争のための一つの指導機関として、かれら自身の政党を要求するに至つたのは当然である。

一九二二年（大正十一年）に出された過激社会主義取締法案は、日本労働者の階級的闘争への進出、なかんずくロシア革命の影響をうけたボルシェヴィキのスローガンによる革命的政治闘争への傾向にたいして、日本ブルジョアジーが恐怖してそれを強圧するために出した最初の法令である。当時の日本プロレタリアートは、そしてすでに結成しつつあつた共産主義者はこの法案に反対する大衆闘争の先頭に立つて活動した。そして一九二三年二月十一日の大示威運動によつて、この過激社会運動取締法案なるものを粉砕したのである。同時に、これと並んで三悪法案と称せられた労働組合法案、小作争議調停法案をも、当時生れたばかりのまだ幼く弱かつた共産党に指導された大衆的示威運動によつて粉砕しやつた。



この時期に労働組合の方向においては、組合運動が急進化して、アナとボルという言葉でいわれるほどに、労働者運動の陣営内に共産主義運動が発展し、政治的闘争も著るしく進みつつあつた。このとき一九二〇年十二月に社会主義同盟が組織された。これは無政府主義、共産主義その他の革命的な諸団体の合成体であつて、根本においてプロレタリアートの政党としての力をもつものでもなくまたそういう性質のものでなかつた。が、すでに階級闘争の経験を経た社会主義的労働者、自覚した階級意識をもつてきた社会主義的な労働者は、この社会主義同盟の中に自分たちプロレタリア階級のための闘争組織を見出そうとして、その成立を歡呼して迎え、数多くのものがこれに参加した。今日、日本共産党に活動しており、また指導者として捕われてこの席にいる労働者同志の中には、この当時社会主義同盟に参加した同志たちが多くいるのである。

かかる先進的な労働者の熱烈な歡呼をうけてできた社会主義同盟であるがゆえに、当時の改良派組合主義者である棚橋小虎、麻生久——今日全國労働大衆党の委員長とかいつているが——は、労働者の政治的要求に恐れをなしてこれに反対し、「労働組合へ還れ」という合言葉を労働者に与え、もつて政治的闘争への進出からひき戻そうと躍起になつた。また当然のことながら、当時のブルジョア政府も数カ月でこれを弾圧し解散せしめたのである。とにかく日本の労働者は世界大戦後に社会主義同盟をもつたのである（その前の明治時代の社会民主党および社会党はしばらく別として）。社会主義同盟は一つの試金石であつた。これによつて日本の先進的な労働者、階級意識のある社会主義的労働者は、党のない状態すなわち無党社会主義——單に思想団体またはその連合体としてだけ存在するそういう無党社会主義がいかに弱いものであるかを痛切に體驗して、思想団体やその連合体の社会主義同盟のようなものは、結局において無益であるばかりではなく、かえつて運動の発展にとつて邪魔にさえなることを感ずるようになった。そして一九二〇年の経済恐慌期およびその後の反動期において、資本家が労働者

にたいしてとつた強圧的態度に抗争して日常経済闘争に勝利を得るためにも、いままでのようなことでは不十分であることを感知した。また分散的な親方的な改良的な労働組合運動を集中化し、大衆化しさらに革命化するためにも、これまでの方法では何事をもなしえないことを知るにいたつた。また特に無政府主義およびサンヂカリズムあるいはアナルコサンヂカリズムは日本プロレタリアートの階級的な政治的な発展を阻害するものであり、これを一掃するためにも一つの新しい力強い指導的な中心を絶対に必要とすることを知るにいたつた。これは日本の労働者が日本共産党を要求し、その成立のために根本的な動力となるにいたつた理由である。もちろんこれを促進し激成し発展させたものは、実に國際的なプロレタリア運動の発展、ことに一九一七年ボルシェヴィキに率いられたロシア・プロレタリア革命の勝利の影響であつて、それは実ははかり知ることのできないほど廣大なものであつた。ロシア革命については、日本のブルジョアジーは世界のブルジョアジーと協力して若いソヴェート・ロシアを包圍して反革命的攻撃を行い、また新聞や雑誌や学校や、その他あらゆる所あらゆる手段でロシアの革命党すなわちボルシェヴィキにたいして悪宣傳のかぎりを盡した。しかしながら、日本のプロレタリアはこれのロシア革命こそ、自分たちとつながるものであり、ロシア革命によつて樹立された労働者農民の國、プロレタリア独裁の國こそ、労働者の國家である、という階級的な同情と好感とを示した。これが日本ブルジョア政府のソヴェート・ロシアにたいする反革命的な干渉となり、一方シベリア出兵にたいする日本プロレタリアートの非常な憎悪と闘争の根源となつたものである。勝利を得たロシア・プロレタリアートは日本プロレタリアートの兄弟であり、かれらに教えられかつ鼓舞されるのだということ、進んでは尊敬すべき階級的兄弟であることを、日



本の労働者はその労働者の本能をもつて知り、また世界の共産主義者の運動によつて教えられたのである。

このときに我々のせひとも記憶しなければならぬ一つのことかあつた。それは、日本の労働者がロシア革命にたいして単に海を隔てて同情し共鳴したばかりではなく、先進的な自覚ある労働者、進んだ革命家たちが海を越えてシベリアに渡り、身をもつてロシア革命の成就を助け、侵略し來つた日本ブルジョアジーの軍隊にたいして、ロシア革命を破壊するな、我々の兄弟の國、労働者の天下ソヴェート・ロシアにたいしてソヴェート・ロシアの労働者農民にたいして銃を向けるな、という宣傳を勇敢に行つたことである。非常な困難を冒して、我々の同志、尊敬すべき先覚労働者はシベリアにおいて、また進んではヨーロッパ・ロシアにまで行き、身をもつて革命を助け、日本帝國主義の侵略にたいして闘つたのである。同志佐藤のごときは、シベリアにおいてロシア革命擁護の非常に困難な英雄的闘争に身を捧げて遂にその地に散り果てた。ロシア革命は實際に日本の進んだ労働者自身のものである。すなわちボルシェヴィキ——当時は過激派と呼ばれ鬼のごとく狼のごとくいわれていたが、資本家にとつては恐るべき過激派であらうが、労働者にとつては眞の味方であり指導者である——もつともすぐれた世界的な革命指導者レーニンによつて率いられた、鉄のごとき革命党ボルシェヴィキこそ労働者の眞の前衛であり労苦大衆の最も信頼すべき味方であるというこの理解を、日本の労働者は身をもつて示したのである。日本共産党成立の機運はかくあらゆる点から成熟してきた。ちようどこのときに、第三インターナショナルの指導によつて、日本におけるコミンテルン支部としての日本共産党が創設された。これは國際的な働きかけによつて世界党の一部分としてできたものであるが、決して單に外國から押しつけられた司令部ではなくて、實に日本プロレタリアートとその闘争の發展とに確實に根をもつていたのである。

## 7 党成立の具体的事情

以上は党の成立の基礎を述べたのであるが、これから日本共産党成立の直接的な具体的事情を明らかにしたい。第一に強調すべきことは、コミンテルンの働きかけによつてコミンテルンの直接の指導支援のもとに、日本の労働者階級が日本共産党を組織したことである。一九一九年三月コミンテルンが創設された。コミンテルンは第二インターナショナルと異つて最初から東洋に甚大な注意を拂つた。多くの植民地や半植民地のある東洋、帝國主義からの解放を求める民族をもつた東洋、革命運動の最大の舞台となる運命をもつ東洋、ここにコミンテルンは甚大な注意を拂つた。そして東洋の一隅にある日本は、植民地革命運動の舞台たる東洋における反動反革命の柱であり、中國朝鮮台湾を抑圧し、ソヴェート・ロシアにたいして東方からの進撃を企んでいる。かかる情勢の下にある東洋にたいしてコミンテルンが非常な注意を拂つたのは当然のことである。

東洋に注意をはらつたコミンテルンは一九二一年その主唱のもとに極東民族大会を招集した。二一年の末にイルクツクで準備會議を開き、二二年の一月から二月にモスコイにおいて極東民族大会を開いた。この大会は新たな世界分割、新たな世界大戰の陰謀に対する革命的抗議とともに、極東における共産主義運動の結成、民族革命運動の支持を重要な目的としていた。

この大会に参加したものは、ソヴェート・ロシアの勝利を得たプロレタリアート、中國の民族革命運動の代表者、日本帝國主義の束縛から脱せんとする朝鮮の民族革命運動の代表者、蒙古の独立革命運動の代表者、そのほか多くの國々における民族運動の代表者および日本のプロレタリア運動の代表者等であつた。その人々は共産主



主義者、社会主義的な革命団体の代表者、あるいは民族革命団体の代表者として各々の差はあるが、いずれも帝國主義にたいする決然たる敵手の革命的代表であつた。この大会において、日本の労働者は中國朝鮮における共産党の結成運動と並んで日本共産党の結成を急がねばならぬことが決定された。

日本の代表者たちはこの民族大会における成果をもたらし、日本共産党の結成運動に貢献するために活動した。コミンテルンはかように極東に注意を拂い、極東民族大会開催の主唱者となつて大いに活動したが、そのほかにもあらゆる方法で日本の革命的労働者を指導した。アナキストにたいしても、震災で殺された大杉栄にたいしてすらも、革命的性質をもつていけるものには積極的に働きかけ、いかにアナキズムやサンヂカリズムが誤つていけるか、それはいかにプロレタリアートの解放にたいする革命的な空言にすぎないか、それはまた権力の問題にふれない結局のところ勝利を約束しえない敗北的なものであるかを説得することに努めた。

かくのごとく、あらゆる手段によつてコミンテルンの指導者たちは、日本におけるプロレタリアートの階級的成長、その階級闘争の勝利のために絶対に必要なプロレタリアートの政治闘争の組織、プロレタリアートの革命運動の指導者、司令部である日本共産党を組織させることに全力を注いだ。

しかしながら、日本の先覚労働者たちは前に述べたようにコミンテルンの断乎たる力強い働きかけを單に待つていたのではなく、積極的に自分の力で党成立の方向へ努力していた。一例をあげると、共産党結成のために他國の共産党の日本人支部との連絡接触につとめていたし、また前に述べた、ソヴェート・ロシアにたいする日本帝國主義の干渉と戦つた同志佐藤のごとき先進者たちは、日本共産党を築き上げるいしずえ、最初の柱の一つであつた。かようにコミンテルンの指導と結びついて日本プロレタリアートの先進分子は党の最初の建設のために

活動してきたのである。

以上述べたように、日本共産党はコミンテルンが外からまた上から強制的に押しつけてつくられたものではなく、またもちろん機械的にコミンテルンに服従するものでもない。以下このことを党成立の具体的な條件について説明する。すなわち党成立における党とコミンテルンとの關係を述べる。

## 8 党創立におけるコミンテルンと日本共産党

コミンテルンの指導者と日本の当時の共産主義的な指導者との會議によつて日本共産党は一九二二年七月に組織され、同年十一月のコミンテルン第四回世界大会に代表が出席して党の成立を報告し、初めて正式にコミンテルン日本支部日本共産党として認められた。日本共産党は第四回大会以前に日本で創立されたものであるが、當時すでにコミンテルンは創立宣言を有しており、また一九二〇年の第二回世界大会において決つた規約をもち、また種々のテーゼすなわち党の指導原理を審議可決していたので、規約第一條の「この規約を承認し、コミンテルンの支部として、日本におけるプロレタリア革命運動の指導者として積極的に活動する」によつて党を成立せしめ、そつして第四回世界大会の承認を得たのである。コミンテルンの第二回大会において可決されたコミンテルン規約ならびに二十一カ條の加盟條件、そのほかプロレタリア独裁に関する指導原理を日本共産党がコミンテルンの支部として当然承認し、これを日本共産党の根本原理として採用したわけである。このコミンテルン規約には前文においてその目的をつぎのごとくいつている。これは同時に日本共産党の目的でもある。いまごく重要な個所だけを述べる。



「コミンテルンはあらゆる手段をもつて、武器をもつてしても、國際ブルジョアジーの倒壊と國家の完全なる廢棄の過渡段階としての國際的ソヴェート共和國の建設とのために戦うことを目的とする。」

さらにつづけてこの目的のための手段を説いて、「コミンテルンはプロレタリア独裁をもつて人類を資本主義の暴虐より解放する可能性のある唯一の手段であると考え、またコミンテルンはソヴェート政府こそプロレタリア独裁の歴史的に与えられた形態であると考へると断言している。」

このコミンテルンの根本綱領、目的ともいべきその眼目はもちろん今日のコミンテルンにおいても少しも變りはない。これは第六回世界大会においてできたコミンテルンの綱領を一見すれば明らかである。コミンテルンはその成立の初めから一貫した明白な目的をもつており、それを公に大衆の前に示し世界的プロレタリア独裁のために闘つてきたのである。この同じ目的、根本綱領を日本共産党がその成立の最初からもつていたことは当然である。

日本共産党とコミンテルンとの組織的な關係についてはコミンテルン規約につきのごとく規定している。

「コミンテルンは資本主義の廢絶と共産主義の建設とのために闘争する労働者團體が嚴格に集中的な組織をもたねばならぬことを知つてゐる。またコミンテルンは眞実に全世界の統一的共産党でなければならぬ。あらゆる國々で活動してゐる諸共産党は單にコミンテルンの個々の支部にほかならぬ。」

この集中的な統一的な全世界党としての國際共産党の不可分な構成要素として日本共産党は組織され、コミンテルンに加盟した。これがコミンテルンと日本共産党との組織的關係の根幹である。なお詳細な点はこの第二回世界大会において決定された規約の個々の箇條があり、そこに各國支部とコミンテルン本部との關係が規定さ

れているが、ここには述べない。

コミンテルン二十一カ條の加盟條件はとくにレーニンが直接起草した嚴格なものであり、プロレタリアートにとつて歴史的なものである。いま個々の條文については述べないが、ただ一言強調しておきたい箇條がある。「それは全ヨーロッパおよびアメリカの今日の情勢の下では共産主義はブルジョアの合法性に信賴することはできない、だから共産主義者は決定的な時に革命に対する義務を果すために、なるべく合法的組織とならんで非合法的な組織機構をつくる義務がある」というところである。

當時は世界大戰後の世界的な革命的危機の波動の高潮した時代であり、全ヨーロッパ、アメリカの一般情勢は、革命の指導者として大衆を革命に動員する任務を、直接当面の日程として共産党に課した時代であつた。そこでここにとくに、敵の権力との徹底的な衝突闘争のために絶対に必要な非合法的組織の重要性を強調してゐるのであるが、しかもこれは決して一時的なものではなく、第六回世界大会における政治情勢に関するテーゼにおいてもこの点が強調されている。第六回世界大会のときもやはり、新たな革命的波動の高まりつつあつた時代であつたためであるが、コミンテルンは全世界におけるブルジョアジーの法律の束縛をうけてその範囲内だけで仕事をするとしようかまかしは絶対にしない。徹底的に支配階級と闘いブルジョアジーの一切の権力を根底から破壊するために闘争する共産党は、最非ともブルジョアジーと闘ひうる鞏固な非合法的の地下建築、非合法的組織をもたねばならぬ。これはいつでもかわりない原則である。

日本共産党の創立された時代には、日本の一般政治的情勢はヨーロッパ先進資本主義諸國におけるほどに共産党の合法的存在を許さなかつた。つまりプロレタリアートの力が總體的に弱くブルジョアジーの権力が反動的に



強かつたのである。このことはブルジョアジーが政治的自由を次第に擴大して遂には日本共産党をも合法的存在にするが、それまで一時的に非合法的存在であるという意味ではない。日本共産党はもちろん敵との闘争によって共産党にたいする抑圧の法律を少しずつでも、その段階において無効にするように成長しなければならぬし、また事実成長しつつあるが、國家権力の争奪戦、階級戦争においてブルジョアジーと直接に相対する共産党は最後まで、すなわちブルジョアジーの権力を覆えしプロレタリア独裁を樹立するまでは、いかなる意味においても非合法的組織をもたねばならぬ。それは日本共産党が創立当初にすでに明らかにしているところである。

なお、創立の事情に現われたコミンテルンと日本共産党との関係について一言つけ加えておきたい。前にも、コミンテルンが日本の労働者階級にたいしてその前衛である共産党の組織を促進させるためにあらゆる手段を講じて働きかけたが、また同時に、日本の革命的労働者がいかにコミンテルンの指導を求めて日本プロレタリアの階級党を結成するために熱心に活動したか、かくしてコミンテルンの指導的働きかけと日本の労働者の熱心な活動とが結びついて共産党を組織するに至つたか、ということは述べた。が、日本共産党がまったくコミンテルンの機械的な一つの人形にすぎないとか、またコミンテルンが金とテゼをもつて日本共産党を左右しているとか、破廉恥きわまる悪宣傳を敵はまことらしくふりまいている。日本共産党の創立当時におけるコミンテルンと党との関係はごく簡単である。要するに、コミンテルン第二回大会において採用されたコミンテルンの規約ならびに二十一カ條の加入條件、これを日本の共産主義者が承認し、この承認の上に党を築き上げて正式にコミンテルン第四回大会で承認を得たのだ。すなわち日本のプロレタリアートが國際プロレタリアートの集中的に集結したコミンテルンを自己のものとして、自己の戦闘組織として承認し、その一部になつたのである。このことは、コ

ミンテルンと日本の党とがなんらか別個のものであつて、それが一方の働きかけを受けて機械的に従つたとか、まただらしなく加盟したとかいうものでは決してないことを明らかにし、日本共産党はプロレタリアートの世界党であるコミンテルンの不可分の一要素であることを明らかにするものだ。ブルジョアジーにはこういう組織上における國際主義がとらうてい理解できないのだが、社会民主主義者たちはまたこのブルジョアジーにくつついて、やはり日本共産党にたいしてそういういろいろのデマゴギーをとばしている。

さて、日本共産党が創立された意義をごく簡単に次に要約するが、日本共産党の創立は日本のプロレタリア運動史上に劃期的な意義をもつていものである。

第一には、プロレタリアートの世界党の一支体としての日本共産党の創立によつて、日本のプロレタリアートは國際的プロレタリアートに堅く結びついた。

第二には、なんらの職業的なまた宗派的な集團ではなくして、かえつて職業的な宗派的な集團を克服して、プロレタリア階級全体のための闘争、プロレタリア階級全体の利益、を代表する政党として、始めてわが日本共産党ができた。

第三には、一切の改良主義的、議會主義的な幻想に反対し、プロレタリア独裁のための闘争にプロレタリアートを意識的に向けるようになった。

最後に、前にもちよつといつたが、日本のブルジョアジーの法律に束縛されない非合法的な党として、ブルジョアジーが解散することのできない党として、始めて日本のプロレタリアートはこういうものをもつたことである。これらの点から見て、從來のいかなる社会主義的な労働者団体とも截然と區別されるものである。



## 二 党の創立からいわゆる解党決議まで

これから日本共産党の重要な発展段階をわけ、主要な時期について述べるのであるが、詳細に月日を追つて述べるわけにはゆかぬので、いきおい簡単になる。なお、党の政策ならびに活動の中で、労働組合運動における政策とその指導的活動、農民運動における政策と活動、さらに共産青年運動に対する党の指導支援、これらは非常に重要であるから、党の歴史を扱う上には相当に詳細に述べねばならぬのであるが、これは他の同志が述べるのでここにはふれない。

日本共産党の創立から少くとも四・一六事件までの歴史、党生活史で最も重要な劃期的な分界線は、一九二七年のコミンテルンにおける日本問題についての決議、いわゆる二七年テーゼの発表である。この前と後とは、日本共産党の思想的・政治的影響力において、またその組織的な発展の速度において、またその大衆にたいする公然の結びつき、ないしは党が大衆に隠れていなか、あるいは大衆の前に公然と政綱を掲げて活動していたか、またコミンテルンとの結合が強かつたか弱かつたか、ということについて非常に明瞭な区別が現われている。この二七年の再組織前の時代についても、やはり幾らか小さな段階にわけてみる事ができる。

### 1 いわゆる第一次日本共産党の創立とその闘争

第一には、第一次日本共産党と称せられていた時代、すなわち日本共産党が創立された一九二二年七月から翌年

の六月検挙といわれる第一次共産党の検挙、九月の大震災の反動、これを経て日本共産党が一時的に日和見主義的指導のために組織を解体したとき、いわゆる解党のときまで、これを最初の一段階として述べたいと思う。

第一次共産党と称せられている時代の情勢をいかつまんでいうと、当時は國際的には戦後の革命的な危機がまだすつかり退いたとはいえず、ヨーロッパの中心には革命の低氣圧が深く渦まいていた。その秋には失敗したかのドイツ革命の危機があつた。國內は大正九年（一九二〇年）の恐慌以來ひきつづいて沈滞状態の中にあつて、資本は労働にたいして攻撃的攻勢的に出てきており、労働者の運動は大正八年（一九一九年）を一つの頂点とし、また農民の方も大体これを一つの小さな頂点としており、ストライキにおいても、農民の争議においても、時に幾らか減退しまた停滞を示していた。しかし階級闘争は資本の攻勢にたいする労働者と農民との必死の抗争によつて確実に深刻化しつゝあつた。労働者は舊來の手工業的な職業別的な分散した闘争の組織から、産業別的に集中的に統一的に組織されたものを要求する方向へ進みつゝあつた。これは思想的方面においては、アナキズムにたいする「ボル」すなわち共産主義の圧倒的な勝利によつて表現されており、組織的な方面においては、労働組合運動における、自由連合主義にたいする集権的合同主義の勝利にあらわれている。また時に階級意識のある労働者の間における階級的政党すなわち共産党にたいする暗黙の大きな要求の成長に現われている。同時に数年來のブルジョア自由主義反動といわれるもの、すなわち当時の憲政会、政友会、革新俱樂部等のブルジョア政党が指導するブルジョア・デモクラシー運動の波が労働者の間にも影響を及ぼし、改良主義的な首領たちをとらえて議会議主義の方へ誘いこみつゝあつた。

この情勢のもとに生れた日本共産党が当面した第一の重要な任務は、労働者の間における小ブルジョア的な思



想——古いサンヂカリズムの思想ならびに新たに起りつつあつた議會主義的思想、これらの小ブルジョア思想にたいして闘争しこれを克服することであつた。すなわち労働者を階級的な政治闘争に押し進めることである。第二は当時、党それ自身の中においても労働組合運動の中においても、前時代の支離滅裂な宗教的な分派組織の遺産があつたので、この遺産を清算して、労働者を一箇の集中的な組織された固い規律のある階級的な軍隊に編制し上げ鍛え上げることである。これが党の当面した第二の重要任務であつたと思ふ。

これらの任務のもとに戦つていた当時の党はコミンテルンの直接の指導、力強い説得、助言など、あらゆる援助によつて、第一には「大衆へ」というスローガンをもつて闘いに臨んだ。この「大衆へ」のスローガンはすでに一九二一年第三回コミンテルン世界大会で採用された國際的なスローガンであつて、当時の日本共産党がこれを採用しなければならぬことは國際的に見てさうであつたばかりでなく、とくに僅か一握りの少数者のグループにすぎない、大衆から孤立して来た、当時の党にとつては絶対必要な最も重要なスローガンであつたのである。

つぎには「政治闘争へ」のスローガン、これが当時の党の重要な第二のスローガンであつた。この「大衆へ」と「政治闘争へ」との二つの重要なスローガンをもつて、いわゆる第一次共産党は創立の初からコミンテルンの指導のもとに大衆化への任務をもつて来た。しかし当時の党における幼稚な小ブルジョア的な殻をぬけきれない思想、前時代の小ブルジョア的な手工業的な分派組織の遺物か、この共産党の大衆化、階級的な政治闘争への積極的な進出を著しく抑えたことは争えない。「大衆へ」と「政治闘争へ」という、この二大スローガンを廣く大衆に宣傳するために、日本共産党は党議をもつて、当時最も重要な指導者の一人であつた山川均氏に一つの宣傳文を起草発表させたのであるが、それが一九二二年の夏に当時の党の機関紙「前衛」にあらわれた有名な「方向轉換論」

である。この「方向轉換論」は根本においては日本共産党の党決議を経てつくられた宣傳文であつて、その眼目は「大衆へ」「政治闘争へ」という革命的なコミンテルンの直接指導の下にできた正しいスローガンを實現することにあつたが、しかし今日すでに明らかなように、「方向轉換論」としてあらわれたあの宣傳文においては著しく本来の精神がまげられている。これは当時の指導者山川均氏がとくに意識的にまげたものでもないが、山川均氏によつて代表されていた当時の小ブルジョア的な、なかならずサンヂカリズムの濃厚な残滓に支配されたものにほかならぬ。それにもかかわらず、この「方向轉換論」による宣傳その他の文書による宣傳、種々の集会および労働組合内の實際闘争における党員の組織的な仕事、等、等によつて日本のプロレタリア階級は急速に政治闘争の方向へ、共産主義の旗のもとにおける政治闘争の方向へ進出していつた。当時の日本共産党はかくのとき重要な中心的な任務をもつていたのであるが、それを最も具体的に集中的にあらわすものは党の綱領である。

当時における日本共産党の目的および根本綱領はいうまでもなく、コミンテルン第二回世界大会で採用された規約その他の諸テーゼにほかならぬが、さらに日本共産党はコミンテルンの日本支部として、日本の特殊な情勢に應じた一國の党としての綱領をもつべきであると考え、この綱領を作製するために活動した。コミンテルンもまた第二回大会以後、各國の共産党支部に向つてその党の綱領を作製するように求めつつあつたのである。

日本共産党の綱領は当時は完成しなかつた。当時、コミンテルンの指導的な同志の直接参加によつてできた日本共産党綱領草案があり、その審議決定をコミンテルンは日本共産党に指令した。そこで、党はこの日本共産党綱領草案の審議のために一九二三年五月に臨時大会を開き、無産政党組織の問題とともに、この綱領の審議に當つたのであるが、綱領草案は審議未了のまま大会後にもちこされ、さらに党内の種々の機関によつて審議決定さ



れることになつていたが、まもなく六月検挙にあい、ついで九月の震災、その後の反動時代における混乱、つづいて解党——かくて遂に草案たるにとどまつている。ゆえに、これはどこまでも党の綱領草案であつて決してそれ以上に出でないものである。しかしこれには、当時の党の重要な任務がはつきりと現われている。かような重大な問題が当時の日本共産党内において取り扱われたことは記憶すべきことであると思うから、ごく簡単にこれについて述べてみたいと思う。

まずこの綱領草案においては、当時の日本の経済的政治的一般情勢を分析し、日本における國家権力の構成の問題にふれている。さらに、当時の日本の政治における半封建的な表現物たる天皇制にたいして、日本のプロレタリアートは先頭に立つて闘わねばならぬこと、その指導権をプロレタリアートが握らねばならぬことを強調している。したがつてその行動綱領の中には、君主制の廃止を始めとし、貴族院枢密院の廃止はもちろんのこと大土地所有の没収というスローガンをも掲げた。さらにまた、当時ブルジョア政党的指導した普通選挙要求の運動が大衆的な運動となり、小ブルジョアのみでなく労働者大衆をも必然的に巻きこむ形であつたから、この綱領草案は、普通選挙運動にたいして党は積極的に入り込み、その中においてブルジョア的な一切の議会的幻想と闘い、これを革命的な議会主義にまでもつてゆかねばならぬ。という意味を記している。農民問題についてはここに詳しく述べないが、大私有土地没収のスローガンを明白に掲げることによつてその全般を推すことができるのである。そのほかにも重要な点はあるが、主なものを摘出してこれだけの重要なものを含む綱領草案が当時の日本共産党において討議され審議されたことは意義あることである。当時の日本共産党の指導部における古い小ブルジョア的な指導者は、この君主制にたいする闘争の問題、普通選挙運動への積極的な参加およびそのブル

ジョア・デモクラシーの制限欺瞞にたいする闘争、この大衆闘争の中に直接入りこんでのブルジョア・デモクラシーのための実践的な闘争、これらの重要な任務を回避したのである。そのことがその後の党の発展にとつて非常な妨害をしたことはいうまでもない。

以上でほぼ当時の党の政治的任務の大体を述べた。

(註) 綱領草案における行動綱領はつぎのごときものである。

一、政治的分野における要求

- 1、天皇制の廃止
- 2、貴族院の廃止
- 3、十八歳以上のすべての男女に対する普通選挙権
- 4、労働者團結の完全なる自由(労働組合、労働者政党、クラブその他の労働階級諸組織)
- 5、労働者の出版の自由
- 6、労働者の屋内及び屋外集會の自由
- 7、示威運動の自由
- 8、同盟罷業の権利
- 9、現在の軍隊警察憲兵秘密警察の廃止
- 10、労働者の武装

二、経済的分野における要求

- 1、労働者の八時間労働制
- 2、失業保険その他の労働社会保険
- 3、市場による労賃額の制定
- 4、最

三、農業分野における要求

- 1、天皇、大地主、寺院の土地の無償没収とその國有
- 2、貧農を支持するための國庫土地資金の設定、特に従来小作人として自分の道具で耕作した一切の土地を農民へ私有財産としてではなく與えること
- 3、果進所得税
- 4、奢侈特別税



#### 四、國際關係の分野に於ける要求

- 1、一切の干渉の廢止
- 2、朝鮮、中國、台灣および樺太よりの軍隊の撤退
- 3、ソヴェート・ロシアの承認

当時の党の組織状態について原則的なことを述べたいと思う。当時の日本共産党はコミンテルンの支部として組織されたものであるが、いまだ一挙に前時代の宗派的分派的なグループ組織の遺産を清算することができず、非常に多くそれが残されていた。種々の思想団体ならびに労働組合の方面においても、職別的ではないが思想的分野によつて幾つかの小グループがそのまま存続していた。このために、当時の党は工場を基礎として組織されていなかつたばかりでなく、一般に労働者農民の勢力が極めて微弱であつた。また当時の党の基礎組織はやはり細胞と名づけられてはいたが、これは経営細胞ではなくて、居住区域および大衆団体その他の党外大衆運動における仕事の線にそつてぼつぼつと組織された小さなグループであり、根本においては社会民主主義的組織を継承したものにすぎなかつた。すなわちボルシェヴィキ的な工場を基礎にした組織の上には立つていなかつた——光輝あるロシア・プロレタリアートの經驗の集積であるところの工場細胞、経営細胞の組織とは全然無關係であつて、これが当時の党組織の最大弱点をなしていた。こういう組織は必然的に党内に種々の宗派的に傾向を存続させまたこれを再生産させたのであつて、この組織の徹底的なボルシェヴィキ化なしには党の政治的生長も発展も非常に制限抑圧されるのである。

なお当時、党は機関誌として「前衛」をもつていた。この「前衛」は党の宣傳機関誌ではあるが決して中央機関紙と称せられるべきものではなかつた。日本共産党の中央機関紙、すなわち日本共産党中央委員会の機関紙と

して黨員および党外の革命的労働者農民大衆に党にたいする信頼を与えるために絶対に缺くことのできない中央機関紙ができたのは、やはり一九二七年のコミンテルン決議に基き再組織以後のことであつた。それ以前には種々の機関紙をもつていたが、それは決していまいつたような重要な役割をもつ中央機関紙ではなくて、それと區別されるべきものであることを附言しておく。機関紙「前衛」のほかに、当時の党は労働組合運動方面の宣傳機関紙として最初に「労働新聞」後に「労働組合」という小雑誌的な機関紙をもつていた。この「労働組合」は四号か五号かまで出したが震災の時に廃刊した。農民運動の方面では「農民運動」という機関紙をもち、農民の間における宣傳煽動の一つの機関として使用していた。

当時における日本共産党の重要な活動闘争を述べると、第一に國際的方面においてはソヴェート・ロシアへの日本帝國主義の武力干渉にたいする抗議運動、すなわち對露非干渉運動がある。

世界のブルジョアジーがロシア革命をいかに恐れたか、いかに必死になつてこれを押しつぶすために協力して攻撃を加えたかは前にも述べたが、かれらブルジョアジーは一九一七年の最初のいわゆる二月革命、帝政ロシアの顛覆した第一次革命にたいしては平氣であつたばかりでなく、ある帝國主義者のごときはこの帝政ロシアの倒壊、ツァー政治の顛覆を助けたとさえいわれている。日本の帝國主義者どもも当時のブルジョア輿論や新聞などを見れば明白なごとく、第一次革命、帝政ロシアの顛覆、ブルジョア政府なかつて小ブルジョアの参加したケレノスキー臨時革命政府成立まではさほど攻めたてず、むしろこれに非常な興味をもつていたと断言することができる。ところが一たび十一月革命が、ボルシェヴィキに率いられたプロレタリア革命が起つてそれが成功するや否や、全世界のブルジョアジーは震駭して必死になつて攻撃をはじめ、日本の帝國主義者はいち早くシベリアに



出兵した。翌年の一九一八年夏の寺内内閣の出兵宣言によつて、日本はチエコスロバキアの東漸——東へ進んでシベリアを侵略する、その東漸を助けるために、沿海州すなわち極東シベリアの秩序——日本帝國主義者にとつて都合のよい秩序——を維持するために断乎として出兵する。さらに事情が有利になるならば増兵すると宣言した。それ以後、一九二二年までの五カ年間に、日本帝國主義者はシベリアの野に七万三千の兵をとどめ、戦死者傷病死者は三千五百を算し、つかい果した軍費は十億円という莫大な額にのぼつた。これらはすべて日本ブルジョアジのシベリア侵略のために、ロシア革命にたいする反革命戦争のために、労働者農民が拂わされた犠牲である。ソヴェート労働者の英雄的防衛、はじめてもつた自己の祖國を防衛する自己犠牲的な英雄的防衛によつて日本軍隊のシベリア侵略は遂に敗戦に終つたのである。「忠勇義烈」をもつて誇り、戦争といへば必ず勝つと盲目的に考へていたし、またいまでも考へている日本帝國軍隊も、このシベリア出兵においては完全に敗けたのである。当時尼港事件として傳へられて大騒ぎをしたニコライフェスク事件は、極東においては十分に組織された赤衛軍をもたなかつたロシアの労働者が、日本帝國主義の狂暴な侵略にたいしてやむを得ず身をもつて防ぐために、バルチザンを組織して日本軍隊に抗争してたつたのだ。バルチザンが尼港事件をひきおこして罪のない日本人を多数殺したといつて盛んに煽動したが、これは明白に、日本帝國主義者が無辜の人民を使喚して、尼港でロシアプロレタリアートのバルチザンに衝突させるように挑戦したものだ。シベリア出兵は敗戦に終つた。うまくゆけばシベリアでずいぶんうまい汁が吸えると思つていたブルジョアジは、この敗戦を見て軍閥攻撃を盛んに始めたのであるが、これは単に日本ブルジョアジが自分の失敗を自分で咥いていたにすぎないのだ。

日本共産党はもちろんこの反革命的なシベリア侵略に反対した。また日本帝國主義者が大連会議や長春会議に

よつて、ソヴェートの労働者から賠償金を強奪しようとしたのに反対して闘争した。さらに二二年夏には、日本共産党員のあらゆる場面における活動によつて対露非干涉同志会が成立した。これは数十の無産者的思想団体と労働組合とを網羅して、日本帝國主義者のシベリア侵略にたいする日本プロレタリアートの闘争を遂行する組織としたものである。日本共産党はこの対露非干涉の大衆運動における中心スローガンとして「労働ロシアからの即時完全な撤兵」「対露通商開始」「労働ロシアの承認」を掲げた。

つぎに、当時のロシアの大饑饉救済運動と結びつけて日本の労働者の間にソヴェート・ロシアにたいする同情支持の運動を組織した。二三年のメーデーにおいてはわが党の主唱した「労働ロシアの承認」というスローガンが採用された。二一年から二三年にかけてのロシアの大饑饉は単に天候不順のためのみではなく、反革命が荒れ狂つたために豊饒なロシアの國土、廣い豊かな土地をもつロシアの國土が荒廃して、そのために饑饉が酸鼻の極に達したのである。世界のプロレタリアがこのロシアの饑饉にたいして心底から同情を集めたことはいうまでもない。日本共産党も日本の労働者の先頭に立つて、二二年の夏から種々の手段によつて「ロシアの饑饉を救え」と訴えた。「飢えたるロシアを救え」というスローガンは、到る所の工場において、労働組合の中において、農民の間においてまた廣く小ブルジョアの中においてさえ採用された。また党は機関紙「前衛」そのほか役立てうるあらゆる機関を動員し、またブルジョア的な自由主義的な新聞雑誌まで動かして、廣い範圍に互つてロシア饑饉救済のための寄附金を募集した。そうしてこれをまとめてソヴェート・ロシアの労働者農民に贈つたのである。

なお、國際的運動の方面においては、二三年一月フランスがドイツのルール地方を軍事占領したことによつて抗議の示威運動を挙げる事ができる。またこの時代を通じて「日鮮の労働者團結せよ」というスローガンを



掲げて、朝鮮の労働者との團結結合のためにいろいろの闘争をした。

つぎに、労働者農民の日常闘争の指導、その革命化、その組織の強化の面において、当時の党はかなりの活動をした。各地のストライキおよび農民闘争への組織者の派遣、宣傳煽動、とくに労働組合統一のための闘争に積極的に働いたのであつた。なかならず労働組合運動の統一のための闘争においては、無政府主義者の自由連合論に反対した集権的合論の旗印のもとに活動し、二三年の秋、大阪において全国総連合の創立大会を開催するに至つた。この大会は無政府主義者側と共産主義者側との衝突によつて、遂に決裂し、そのために解散されたようにいわれている。この大会においていわゆるアナとボルとが衝突したことは事実であるが、ブルジョア政府が大会を弾圧し解散を命じたのは、結局においてアナキズムの主張が少数で破れ、圧倒的多数である共産主義の主張のもとに労働組合の総連合が結ばれる氣勢が濃厚であつたためである。この大会は解散されたが、その後もなお、共産党の労働組合運動統一の闘争は今日までもつづいている。さらに労働者運動の方面においては、とくに失業者運動に力を注いだことをあげることができる。

当時、日本のブルジョアジーは日本の労働者の進出とその闘争の革命化の傾向を防止するために、過激社会運動取締法案、労働組合法案、小作争議調停法案等をつくつたが、党は当時のいかなる労働者農民にも明らかなこれらの悪法案にたいする闘争の先頭に立ち、二二年から二三年にかけて、この三大悪法案反対の大家闘争を組織した。全国的思想団体、労働組合、農民組合五十余をもつて悪法反対無産者同盟を組織し、また全国労働組合悪法反対同盟を組織するよう活動した。そして二三年二月十日の悪法反対の大示威運動となり、遂にこれらの悪法案を不成立に終らしめたことは前述のとおりである。

なお、党は水平社運動、当時勃興してきた特殊部落民解散のための闘争を援助し、黨員中の若干の同志は最も献身的に最も革命的にこの水平社運動の指導に當つた。そしてこの運動をプロレタリア解放の運動に結びつけるために闘つた。

さらに当時においても、共産青年同盟の組織のために党が直接援助したことはいうまでもない。

これらの時代を通じて、党はつねに労働者の政治闘争のための闘争を最も熱心に行つた。サンチカリズム、アナキズムの思想の残滓にたいする闘争は当時における重要な闘争の一つであつた。

日本共産党は、そのように当時のあらゆるプロレタリアートの階級闘争の先頭に立つて闘つてきた。その間に前に述べたごとく綱領審議のための臨時大会を開いたほかに、その以前、二月であつたと思うが、創立大会後における最初の大会を開き、党の規約ならびに対露非干渉、労農ロシア承認のための闘争の中心スローガンを決定し、なお、前時代からもち越してきた分派的組織を克服するために役立つた指導部員の改選等を行つた。

こうして党は徐々に闘争の中において発展しつつあつたのである。

## 2 六月検挙とこれにたいする闘争

このとき、ブルジョアジーはかの六月検挙によつて党の主な活動部分を没つてしまつた。

一九二三年六月における共産党検挙はブルジョアジーがプロレタリアートの階級的結成の進出を弾圧した最初の大検挙であつた。ブルジョアジーは第二の幸徳事件だとか、大逆事件だとか、その他いろいろと悪煽動のかぎりをつくした。これは決してブルジョアジーが日本共産党の目的や性質について無知であつたためではなく、三、



一五事件におけると同様にやはり意識的に、ブルジョアジーが自分を守るために天皇制を武器として用いたのにすぎないのである。

この検挙によつて、党は従来の指導部その他の活動的な党員の一部を獄中にさらわれたのであるが、この検挙にたいしてはあらかじめ検挙後における指導部を構成しておき、検挙後における闘争の方針を定めていたのである。この検挙によつて、当時の党の一般党員はもろん、日本の労働者は決して幸徳事件とか大逆事件とかいうデマにひるんで屈服してしまふことはなかつた。かえつて労働者大衆はこの検挙事件によつて日本共産党の存在を知り、党にたいする漠然たる支持要求を強めて来たのである。当時の党は大衆の間にはいかなるものであるかが具体的に知られていなかつたが、この検挙によつて共産党なるものはプロレタリアにとつて憎むべきものではなくて、なんらか自分たちの味方ではあるまいかという考えが廣大な大衆の間にもたれ始めた。しかしこの検挙は日本の労働運動の指導を共産党からそむかせるのに全然役立たなかつたわけでもなく、この後、九月の大震災における大反動とともに、小ブルジョアの指導者、改良主義者をますます右傾せしめ腰を抜かさしめ、一般労働運動においては社会民主主義の発生、またわが党内においてはかの解党主義の発生を助けたのである。

### 3 震災テロル（朝鮮人虐殺、龜戸事件）

一九二三年九月一日の震災は——かの第一次共産党の被告として我々が市ヶ谷に入つているときに見舞つたのであるが——一時的に一地方的に無政府状態を現出した。

ブルジョアジーはこれを内乱鎮圧のための演習に用いた。戒嚴令のもとに、軍隊の手によつて、また自警團とつた虚偽の悪煽動によつて虐殺されたのである。

またこの震災において、日本のブルジョアジーは龜戸事件という名をもつて日本の労働者の胸に忘れることのできない大きな恨みを植えつけた。それは革命的労働者、わが党のもとにあつて共産青年同盟の指導者であつた同志河合義虎をはじめ革命的労働者九人を残虐に殺害したことである。党はこの英雄的な犠牲者を永く日本のプロレタリア運動に記憶せしめるために、二七年の再組織のときに日本共産党の党籍にのせた。

日本のブルジョアジーはこれらの労働者の虐殺、朝鮮民族の虐殺だけではあきたらず、震災のどさくさに勅令をもつて治安維持のためにする罰則なるものを設け、これをやがて今日の治安維持法にひきなおしてしまつた。かくのごとく日本のブルジョア政府は震災において、ブルジョアジーの利益のためには震災手形補償法というブルジョアジー保護の掠奪的な補償法案を設け、一方においてはプロレタリアート、被圧迫民族にたいしてはこゝろい手段をとつたのである。

### 4 解党決議

震災における反動、それにひきつづく資本家の攻勢のもとにおいて、小ブルジョアの指導者たち、労働運動における小ブルジョアの間には、リベツ化といわれ自由主義化と称せられる運動が擡頭してきた。これは要する



に、ブルジョアジーの強力なる攻撃、白色恐怖的な反動の前に動揺する小ブルジョアの腰ぬけ的な、ブルジョアジーにたいする屈服にはかならぬのである。当時、党の指導部においてもこのリベツ化の傾向に影響されて、小ブルジョア分子がその階級的性質を自己暴露した。今日、日本の裏切り社会民主主義の舊い大先達の一人である有名な赤松克麿も、当時日本共産党の指導部内にあつて最も勇敢に党をふりすてて、リベツ化どころではなく全く完全に立派に社会民主主義に向つて突進して行つたのである。

彼が「科学的日本主義」なるものを提唱したことを顧りみればこのことは明らかであるが、同時にこの勇敢なる赤松氏とならんで山川均氏以下の臆病な変節者が出てきた。これは、正面から共産党を否定することはなしないが、この反動のまえに典型的な小ブルジョアの動揺を示し、自然成長論的な傾向をとつた。もう少し日本の労働者が目ざめて自然に共産党を結成するようになるまで待たなければならぬ、という典型的な日和見主義の思想を代表して、山川均氏以下の小ブルジョア分子はやはり實質的には党を裏切り党を抛棄したのである。こういう小ブルジョアの思想の動揺が党内にあることが、いかに党にとつて、したがつてまたプロレタリア運動全体にとつて致命的であるかは、これらの小ブルジョアの指導者たちが單にみずから党をすてるだけでなしに、党を解体せしめ、党の解体を強調して党のために闘おうとしている革命的労働者を無党状態に陥し入れたことが、いかにその後の日本プロレタリア運動の発展を阻害し妨害し毒したかによつてもわかるのである。むろん、この解党は決してなんらの摩擦なしにすらすら行われたものではない。さすがの赤松克麿氏のごとき勇敢なる裏切り者ですらも、党内の革命的労働者をごまかすために、また党外の労働者にたいしても何とか表面をごまかすために、日本共産党の解散は單に一時、党内における不純分子、封建主義的な分子を掃除するための方便にすぎない、と

いつてごまかす必要があつたのである。そうしなければ、とうてい党員大衆に解党を消極的にでも受けいれさせることができない状態にあつたのだ。実際また、当時の党における労働者黨員たちは解党の決議にたいして反対し抗議したのであるが、結局それらの厚顔無恥な小ブルジョアの裏切り者たちによつて党は解体され、ブルジョアジーに賣り渡されてしまつたのである。むろん日本の労働者の革命的要素はこれにたいしてどこまでも盲目ではなく、直ちにこの解党にたいして再びより一そう堅固な共産党を再建するための闘争を開始した。特にコミンテルンは強硬に最初からこの解党にたいして絶対に反対し、この解党決議に承認を与えず、即時党の再建をせよと命令してきた。コミンテルンの日本共産党の解党にたいする闘争は、解党決議が行われた二四年(大正十三年)の春、直ちにこれに対する反対の指令となつて現われた。コミンテルン執行委員会から日本共産党の解体を認めないことを当時の日本共産党の指導部にたいしていつてきたのである。コミンテルンが日本共産党の解党をもちろん認めるはずはないのであるが、すべて一國の党の重要なことはコミンテルンの執行委員会の承認を得なければならず、コミンテルンの執行委員会が反対すれば無効になるのである。その大会で決定したことは、コミンテルンの執行委員会がこれに反対して異議を唱えないかぎりはもちろんそのまま承認されるが、しかし誤つていゝという判定をくだされるなら、それは取消さるべきであるしまた取消されてきた。

そもそもこの解党決議は、当時の党の正式大会で決定されたものでないことはもちろん、また、やむを得ざる場合の大会にかわるべき会議による決定という性質のものでもない。この解党は裏切り者たちが極めて陰險な策動によつて、あちらこちらから自分に都合のいい人を選びだして集めてこそそと決め、しかも結局廣く賛成をえたように思いこませてやつてのけたのである。こういう意味において、この解党なるものは、党としては、大



会あるいは大会にかわるべき会議が責任を負っていないものであつて、全く少数の裏切り者たちの悪辣な陰謀的手段によつてなされたものなのだ。

そこでちよつと説明の必要がある。この解党が決してすらすら行われたものでないことは前にもいつたが、いろいろの摩擦や反対があつて、裏切り者はきれいさつぱりと解体してしまひたかつたのはやまやまではあるが、それもゆかぬので、何とかごまかすためにいろいろな方法を講じた。その結果、革命的黨員たちに席を与えて機関を残すために、一つの組織をおいた。裏切り者が革命的な要求にたいしてなしたこのよりの表面的な妥協があつた。それがのちには、結局において小ブルジョア分子の裏切りをうち破つて党の再組織の機関として實際に働くよりのなつた委員会である。

### 三 コミンテルンの解党否認から再建まで

#### 1 委員会時代

この解党後に残された委員会は、解党そのものがすらすらと行われずに波瀾があつたように、決して單純な統一的なものではなく、その中にはやはり、ごく素朴的ではあるが闘争的な革命的な一分派と全く敗北主義的な武装解除的な解党主義の本流を代表した者とが、最初のうちにはまだ一しよになつていた。

かかる委員会がコミンテルンの強力な働きかけによつて、即時党再建に進め、ということになつた。党再建のための具体的な實際の闘争に入るに及んで、一方の提唱派といわれた單に宣傳提唱でしばらく満足しなければならぬという自然成長論者と、他方の労働者の革命的な要求を素朴に代表した当時行動派と呼ばれていたものと、この両分派は一しよに住まつてゐることができなくなり、前者はついにこの委員会から脱退してしまつた。その後の委員会はコミンテルンの直接の指導のもとに、いわば行動派の手中に完全に歸して、党再建のための實際の仕事にあらゆる方面から従うよりのなつた。この委員会を實際の党再組織のための委員会たる任務につかした最も強い力は、いふまでもなくコミンテルンの指導であつた。すなわち一九二五年（大正十四年）一月に至つて、コミンテルンの指導者は日本共産党の再組織に関する決議をしたのである。



上海会議で決定されたこの二五年の一月決議によつて、従来の日本共産党の指導部は徹底的に批判されたが、前述のいわゆる第一次日本共産党の綱領草案とともに党としては発表しなかつた。コミンテルンから発行された綱領問題資料と題する文献があるが、それにはたしか終りの方に日本共産党綱領草案がのせられていると思う。これは今日では翻訳されていると思うが、当時は発表されなかつた。しかしこの重要な文献、決議のとき重要な指導方針が公表されなかつたことは、今日までのプロレタリア運動に非常な損失を与えている。

この一月決議はいつている。「今日、日本の全共産主義者の集中せる組織(すなわち共産党)がないことは、日本の革命運動にとつて大いなる危険である。しかるに現在日本の同志たちは、運動が相應に自然成長を遂げたのちに共産党を結成するという日和見主義に墮している」と、そして「この日和見主義を打破することなくしては日本の革命は絶対に前進しえない」と、かく一大鉄錘をくだしているのである。

ついでこの決議は、党の従来の指導者の非常な幼稚さと大きな過失と、なかななくコミンテルンの指導にたいして実践的な一切の行動をもつてする注意が缺けていたこと、表面でこれを承認しながら実行ではサボタージュしたこと、こういうことについて痛く図星をついて激しい叱責を加えているのである。すなわち、日本共産党の従来の指導者は観念的抽象的理論は弄ぶが正しい共産主義の知識を缺いており、俗悪なマルクス主義の理論、非マルクス主義レーニン主義——実際のマルクス主義レーニン主義とは縁のない俗悪的なマルクス主義レーニン主義しかもちえなかつた。第二に、革命的戦術によつて大衆を指導し党を大衆的基礎の上に築くことを知らなかつた。また闘争の中から鍛えられた強い規律がない。また単に個人的関係をたどつて党員を結合し、したがつて共産主義者ではない封建主義者たちさえも混入していた。さらに今までコミンテルンの指令を決して十分には実行

しなかつた。それからまた、民主主義的な要求、大衆の民主主義のための要求闘争と普通選挙運動の必要、労働者農民の日常闘争への必然的な積極的参加の必要、合法的出版の必要、これら種々のことが必要であることをコミンテルンが忠告したことを無視してしまつた。——こういつて、雷のごとき革命的憤怒をもつて叱責しているのである。これはなんら辯解の余地のない、一点の余地もないことであつて、当時の党の缺陷を完全に説明しているのである。

一月決議の最後に、党の孤立という問題についてつぎのようにいつている。すなわち労働者大衆のわが党にたいする不信用、もつと正確にいえば大衆からのわが党の孤立の原因は、党の活動ががいて消極的であつたこと、党指導部の誤つた指導、すなわち労働運動および政治生活における一切の重大問題にたいする党指導部の消極政策にあると認められる——と。これで見ても、労働者の一切の重要な経済的政治的問題において、独自の積極的に闘争し指導しないかぎりには、共産党はかならず後退する、前進しえないのみでなく大衆の前進に対して逆に後退して、いやおうなしに孤立せざるを得ない、ことを強調している。

### 3 ビネーロー時代

この重要な意義のある一月テーゼによつて、党再組織委員会が実質的に党再建のための活動を開始した。その以前から、さきに述べたような僅か数名にすぎない小さな委員会があつたが、その中にはいわゆる行動派と提唱派とがあつて決して統一のある行動はとれず、宣傳も小ブルジョア主義日和見主義のみに傾いていたが、しかし、この弱い委員会ですら、当時の革命的労働者を全く無視していたのではなく、常に中心的な革命的指導をもとめ



ていた革命的労働者を、直接にあるいは間接に、また積極的と消極的との差はあつたが、周囲にひきつけて統制をとつていた。しかしこの一月テーゼによつて再組織委員会は實質上、革命的な労働者派行動派の手に歸し、いまは亡き同志渡辺政之輔がその中堅指導者の一人となつて、党再建のために悪戦苦闘する時代に入つたのである。この時代から委員会は日本共産党再建を直接任務とする一つのビューローとして活動し、実際に名前もビューローと称した。そしてこのビューローは、その下に革命労働者の集團を方々につくり、それを連結して闘争を指導するに至つた。

この時代は國際的には安定期、資本主義の一時的な安定期に入つていたが、同時に矛盾はますます深くなつていつた時代である。しかし、日本においては前にのべたように、震災直後の反動時代、資本家たちが震災の打撃からまぬがれるために資本家的復興事業をおこし、その犠牲をすべて労働者の肩の上に課した時代であり、階級闘争は激化し深刻化してゆくばかりであつた。かかる状態のもとにブルジョア側では、今日の民政党の前身である三菱系の憲政会が盟主となつて、憲政擁護を名としたいわゆる護憲三派内閣を成立させた。特権階級打破の旗印のもとに労働者を煽動してきたブルジョア護憲三派は、階級闘争の進展に直面して、一方では普通選挙法案を出したり、國際労働會議代表者の選出権を労働組合に与えるようなことをして、プロレタリアートを偽瞞して自己の側に獲得しようとし、一方では特権階級打破を叫んだ同じブルジョア側がプロレタリアートにたいして今日の治安維持法案を制定発表した。この普通選挙法案と治安維持法案とはブルジョア側のかくのごとき條件のもとではプロレタリアートを抑圧する道具、武器として離すことのできないものであつた。さきに過激社会運動取締法案として葬られさつたものを、狡猾に卑劣に、今度は國體の变革、私有財産制度の否認という下劣な法文

をもつてプロレタリアを十年の懲役に処する法律を制定した。プロレタリア陣営においては、こういうブルジョア側の攻撃のもとに、一方においてはブルジョア側の積極的な援護支持を受けて社会民主主義が成長し、他方ではこれと逆比例して革命化し左翼化して共産党の陣営を下から固めつつあつた。かかる時代において、党再組織委員会はコミンテルンの指導の下に、共産党の再建のための主観的條件をどしどし獲得することができた。革命的労働者をこのビューローのもとにだんだんと獲得し増大することができた。

この時代に労働組合運動において、改良派と革命派との分裂がはじめて大衆的な規模で行われた。まず二四年の春から翌春にかけて行われたいわゆる総同盟の内紛事件、つづいて二五年五月における総同盟の分裂、日本労働組合評議会の創立がこれである。

いわゆる総同盟の内紛事件にたいしては、当時、山川均氏たちはこれを労働組合の内政問題にすぎないという見解をとつていたのであるが、革命的労働者側は、これを最も明らかな改良主義と革命主義との対立であり、その分裂であるとして主張してきたのである。ちようどこの時に、二五年五月に日本労働組合運動に関してコミンテルンが一つの決議をした。それには日本の党再組織委員会の代表も参加した。詳しいことはここに述べないが、この決議はに労働組合の総連合、すなわち統一のための闘争、産業別組合統一のための闘争をとき、そのほか総同盟内部の反対派すなわちまだ分裂しなかつた革新同盟は総同盟から分離してはならぬ、あくまで総同盟内にとどまつて擴大強化しなければならぬことを決定し、また左翼労働組合の全國的機関紙の発行が緊急な任務である規定してしたのである。このうちの全國的機関紙は「労働者新聞」の創刊として現われたが、総同盟内に踏みとどまつて革命的反対派は右翼分裂主義とあくまで抗争しなければならぬ、内部にあつて擴大強化しなければ



ならぬといふ條項は、それが國內にもたらされる前に、分裂が強行されたために行われなかつた。

#### 4 共産主義グループの創設

かように直接党内においてもまた外部においても、コミンテルンの直接の指導支援をうけて委員会の仕事は進展してゆき、遂に共産党の結成のための過渡的段階として「共産主義グループ」を結成するまでになつた。これは二五年八月であつた。そして九月には左翼労働者の圧倒的な支持をうけて「無産者新聞」が創刊された。

一月のテーゼは上海におけるコミンテルンの指導者の会議でつくられたが、それを代表が國內にもたらし、ビュロー擴大会議を開いて審議し、これを実行に移すことについて協議を行い、コミンテルンの一月テーゼを完全に承認しこれを実行に移すための具体的方法を決定した。

このビュロー会議で採択された政治テーゼと組織テーゼとがある。いまその最も肝要な点だけを述べて、この当時における党の最も重要な任務の説明をこれで代表することにしたと思う。

このテーゼはまず日本の情勢を分析している。すなわち現在の日本の深刻な長びいた不景氣は急速に恢復さるべき徴候をどこにも見出しえない。経済的財政的狀態はますます不正常不健全なものとなり、その結果、労働者階級および小作人大衆の生活の窮乏とその急進化とはますます度を強めている。その情勢はいわゆる無産政党的組織運動の急速な展開の中によく現われている。これにたいして支配階級のすべての分派、憲政会、政友会、貴族院、枢密院はあらゆる方法をもつて無産政党的大衆から切り離して、無意味な政治団体たらしめようと一生懸命になつてゐる。他方、共産党を裏切つた赤松一派の改良主義者たちは無産政党的共産主義者を排除した社会民主主義党とする陰謀を逞しうしつある。

これにたいする日本共産主義グループの任務は、まず赤松一派の社会改良主義、つぎにそのころ安部磯雄などによつて作られた日本フェビアン協会、それから政治研究会の舊幹部、これら小ブルジョア急進主義を具體的闘争の中において克服して無産政党的圏外に放逐することを第一とする。

第二の任務は、大衆自身の興味と活動とによつてのみ大衆的な階級的無産政党的は形成されうることを認識して、あらゆる宣傳的、組織的方法をもつて大衆を動員すること、これである。

第三には、日本共産主義グループの直接の指導下にある労働者教育協会、水平社青年同盟、無産青年同盟ならびに左翼労働組合を結合して、無産政党内に共産主義的分派を作ること、これが第三の任務である。

当時の無産政党的組織運動の中には、いま明白に社会民主主義となつてゐるものをすべてを含んでいた。が、それは当時においては、なおその中に共産主義者が活動しうる革命的な闘争舞台として用いられるものであり、この無産政党的運動において社会民主主義、改良主義と酷烈に闘争しつつ共産主義の勢力を強め、この無産政党的運動を共産党の側に克ち取ることが、このグループの任務としてテーゼが規定している眼目であつて、決して共産党の外になんらかの政党的が必要であることを少しも意味するものではない。また同時に、労働者農民の特殊な政治的戦線という形で山川均氏が合理化していた日和見主義的組織論とも無関係なものである。

最後に、無産政党内に共産主義的分派を作ることの規定している。これは当時の無産政党的運動は今日のような数年前から労働者抑圧のブルジョア代理機関になりかけてきた無産政党的とは區別さるべきもので、なお革命的意



義をもつていたからである。さらにこのテーゼにおいて、無産政党なるものは決して共産党に代るべきものではないことを明白に示している。

すなわち「我々は無産政党が我々の理想的政党であるという幻想のもとに活動してはならない。眞のプロレタリア政党は共産党あるのみ」と言っている。

かように共産主義グループの創立会議において採択された政治テーゼは、極めて重要な意義をもっている。この会議は政治的方面だけでなく、組織的方面でも非常に重要な役割をもつていた。ここで採択された組織テーゼについて簡単に述べる。

党は工場細胞を基礎とする民主的中央集権主義の原則に立つ、労働者農民の大衆団体の中にフラクションを構成する、こういうボルシェヴィキ的組織原則はこの組織のテーゼにおいて明白に採用されている。すでに前年——（一九二四年）コミンテルン第五回世界大会において、党のボルシェヴィキ化というスローガンが採用された。党の政策がいかに正しくとも、プロレタリア大衆との間の正しい結合関係、工場細胞を基礎としたボルシェヴィキ的組織がなければ無意義となるこのことは、日本共産主義グループの確立会議においてもやはり採択され、この原則に基づいて党の再建に進むことに決定したのである。

この会議における主なる決定事項はこの組織テーゼ、政治テーゼに完全に表現されている。この時代における党活動の概要は二つのテーゼを述べた時に附け加えたので、細部のことは述べないことにする。

## 5 コミンテルン執行委員会第六回総会における

### 日本共産党再建のための決議

この間に、党を結成すべき条件が客観的にも成熟してきた。翌年一九二六年二月から三月にかけて開かれたコミンテルン執行委員総会、プロフィンテルンの幹部会、国際無産青年同盟の幹部会には、日本共産主義グループの代表者が出席し、日本共産党再建のための直接の具体的な決議が作られた。同年六月日本の代表がこの決議を國內にもたらしたので、擴大ビューロー会議を開催し、この決議について詳細に徹底的な討論を行い、その実行方法を協議決定した。

この二六年六月の擴大ビューロー会議以後、党は急速に労働者の革命的要素を吸収して党の再建大会を開催する運びになった。

この擴大ビューロー会議で決定されたことは次のようなものである。すなわち即座に党員を百名くらいに増大すること、それはすぐにもできる。大会をできるだけ速やかに開くこと、当時我々は入獄していたが、この入獄者がだいたい出てくる時を見はからつてやる。この大会までに党員をおよそ三百名くらいに増大すること、これは見こみが十分ある。これらの実行のために努力すること。コミンテルンの決議とプロフィンテルンの幹部会の決議とをできるなら合法的に宣傳文として発表し、できなければこれを非合法的に出版すること、などである。

コミンテルンの幹部会でできた決議の実行は、二六年の後半に着々と実践に移され、十二月に党再建大会を開催するようになった。



#### 四 再建大会から再組織まで

##### 1 再建大会

日本共産党は一九二六年十二月再建大会を開くまでに発展したが、その背景として二六年中における労働者運動の急速な高潮、農民運動における土地問題の急迫切迫化、それについて日本のブルジョア國家権力の最も断乎たる鎮圧手段があり、労働者農民は日常の利益を守るための闘争においてすでに、國家権力と直面せざるを得ない状態がいよいよ増大した情勢がある。二六年にはストライキの件数も飛躍的に増大し、また共同印刷の争議や濱松樂器会社の争議や別子銅山の争議におけるごとく、六十日あるいは百日以上に互るような長期な、そしていづれも資本家とのつびきならぬ頑強な闘争に血の出るまで争う形となつた。農村の方も形勢はほぼ同様であつて、争議件数も二六年は著るしく増加しているし、新潟縣木崎における大争議に見るように、農民の地主にたいする闘争はもはや眞に自己の生存のためにあくまでも土地に嚙りついて徹底的に闘争せざるを得ないところまできた。この農村における農民と地主との土地の争奪問題において、日本のブルジョアジーは地主の徹底的な味方であつて、政府は農民にたいして非常な彈圧を加え、何百という農民が投獄される状態であつた。

労働者はそのストライキにおいて頑固な非合法的な組織をもち、強固な非合法的な指導と結びつくことが絶対に必要であるよになつた。そして、みづから進んで半非合法的な組織をもつて敵と徹底的に闘争せざるを得な

い經驗によつて、労働者大衆はアヂトとか、移動本部とかいわれた非合法的な組織をもつようになり、さらに共同印刷の争議において端緒を現わし、次いで百五日に互る長期の流血的な徹底的な闘争を闘つた濱松樂器会社の争議において労働者大衆が下からの闘争組織として作つた細胞が現われた。そして、この争議のための細胞の組織によつて、官憲、会社の暴力團など、一切の敵の勢力と争うよになつた。このことは、労働者階級の闘争が激化し深刻化した結果、日本共産主義グループの指導に結びついたかなり多数の労働者が共産主義的労働者党を求めていたこと、闘争の經驗をへたいわば階級闘争の將校ともいべき共産主義的労働者が日本共産党の結成を待ちかまえて門前に立ち扉の開くのを待つてゐること、そしてあらゆる途をもつて党に接近し党に頼ろうと努めつつあつたことを示すものである。それについて今でも忘れられないことがある。「無産者新聞」の投書欄に一つの投書があつた。それはその当時、ブルジョアジーの政府と一しよになつた右翼社会民主主義者たちが評議會を「共産系」だと攻撃したのについて、「共産系といつて盛んに悪くいわれているが、共産系というものは一体どんなものかよくわからない。共産系というものはどんな目的をもつてゐるもので、例えば今どんなことをしている連中なのか」との質問であつた。これは共産党をいろいろの形で暗黙のうちにもしくは公然と求めていた労働者の声を反映しているものと思う。これにたいして当時の「無産者新聞」の編集部は「共産系といつては改良主義者の一つのデマゴギーである」と答えていた。これは何も「無産者新聞」の解答者が特別に間が抜けていたのではない。当時の党が、かくまでも強くあらゆる手段で共産党に入りたい共産党が欲しいことを明らかに語つてゐる、これらの労働者の要求に應ずることができないほどに、まだ小さかつたことを反映しているにすぎない。しかし、このことは、この「共産党云々」にたいする労働者の眞の要求、「共産党」にたいする攻撃につ



いて労働者が感じていたことを示すものであるとともに、小ブルジョア分子はマルクスやレーニンの本を読んで共産主義を口にしても、眞に共産党の組織、実際の階級闘争のための組織を絶対に必要とすることを身をもつて知り、身をもつて示すことはできないことを現わすものである。また、「共産系」にたいする政府と改良派社会民主主義者とのあらゆるデマゴギーと組織的な排撃運動にもかかわらず、労働者はますます共産党こそが自分たちの本当の味方だということを知ってきたことがあきらかにされると思う。そういう條件は日本共産党の再建を非常に有利に導いた。もちろん、五・三〇事件をもつて烽火をあげた支那革命の発展、國民軍の先頭に立つて実際に犠牲的に闘つた支那の労働者農民の英雄的な闘争、これらが日本の労働者に偉大な影響を与えたことは重要なことである。

一九二六年十二月に党再建大会が開かれたが、このとき、いまはなきわが党の英雄的同志渡辺政之輔が重要な指導的地位に立つて最も熱心に活動した。この党大会は、日本の労働者階級が一つの政党として、舊い第一次時代の党からその後のいわゆるグループ時代に於いて存在していた一切の舊い分派的宗派的組織を克服して、新たに再建される意味において、また労働者階級の圧力によつてそこまで到達したことにおいて、非常に重要な意味を日本のプロレタリア運動史上にもつている。コミンテルン執行委員会もこの大会の成立にたいして祝電を寄せて日本共産党再建を祝して激励した。

しかしながらこの大会の採用した根本方針には大なる誤謬があつた。このことは今日ではすでに明らかである。福本主義といわれている一個の誤れる小ブルジョア的な指導によつてこの大会は左右されて、福本主義の政治方針を採用したのである。この福本主義なるものはこの年にはじめて日本の小ブルジョア階級の間に見られたので

はなく、その数年前からすでに現われてだんだんと浸潤しつつあつたものである。福本主義は今日では、二七年のコミンテルンの日本問題決議に基いて日本の党の諸同志、なかんずく同志佐野学その他の指導的な同志たちが理論的に批判をしている。また全党員および党の影響下にあつた革命的労働者、左翼労働者は実際の行動をもつて、闘争をもつて、これを批判し克服してきたのであつた。今日ではこれを理論的にも政治的にも詳しくいうには及ばない。

この福本主義が擡頭したことについては、二五年ないし二六年において階級対立が尖鋭化し、それとともに共産主義的左翼党と社会民主主義的右翼党との対立闘争の激化してきたこと、および階級闘争の発展の中において舊來の左翼の指導精神であり舊來の共産党の指導精神であつた山川主義の指導が徹底的な破綻を暴露し、日本の労働者はこの破綻して死骸となつた山川主義の指導に代つてブルジョアジーと社会民主主義者との攻撃にたいして有力に闘いうる新しい指導を痛切に要求しており、それなしにはもはや運動を進めることができないところに来ていた、という情勢を見なければならぬ。また、福本主義の擡頭は國際的情勢にも關係がある。國際的に資本主義の一时的相対的安定期、資本主義の一时的表面的な復興期——むろんそのもともとも矛盾はますます激化しつつあり、労働者にたいする抑圧はいよいよ加わつていたが——において、労働者運動とくに共産主義的な運動の中に存在する、小ブルジョア層から絶えず落ちこんできて小ブルジョア思想を代表する動搖的な日和見主義分子が、この資本の一时的表面的な安定状態に眩惑されて鉄のごときコミンテルンの闘争規律に不信の念を抱き、いろいろな形で反コミンテルンの思想を撒き散らすようになった——こういう一連の國際的右翼偏向があつた。なおこの右翼偏向は極左偏向と隣り同志であり親類同志として結びついていたのである。ドイツにおけるルー



ト・フイツシャー、ユルシユ、ルカツチらのいろいろの形で、またソヴェート同盟においてもボルシェヴィキの社会主義的建設の闘争に反対しはじめたトロツキーを始めとする一連の人々、こうしたすべての國際的な反コミンテルンの一つの傾向があつたが、これが日本においては福本主義の形をとつて現われてきたのである。この日本における小ブルジョアの急進主義は、当時、革命的労働者の要素とともに党に流入しつつあつた小ブルジョアのインテリゲンチヤの要素をとらえて、たちまち党および左翼大衆團體を風靡するに至つたのである。福本主義、その理論闘争、分離結合論——それらがどんなに誤つていたものであるか、どんなに現實の日本のプロレタリア運動を阻害したことが、また後へ引き下げたものであるかは明らかである。当時でも労働者はこの福本主義の諸文献や諸言論に現われたものに多少の不滿を抱いたものであり、分離結合論や理論闘争主義にたいしては、多かれ少かれ不審を抱いたものが多かつた。しかもなお、福本主義に左翼労働者の圧倒的多数が引きこまれたのは、福本主義が山川主義の指導の破綻の後に代つて登場してきて、山川主義において労働者が最も失望した共産党を組織するという要求がこれで充たされるかと思つたからである。すなわち——詳しいことを批判するのではないが——福本主義が強調している主体あるいは主体的條件というものをこそ、自分たちの要求している共産党である労働者はとつたのであつた。また、そうとれるように、福本主義は主体または主体的條件なるものをもつてきたのである。しかし、今日では明らかになつたように、福本主義における主体なるものはマルクス主義の意識だけの集結であり、組織を全く抽象したところの觀念的な主体であつた。その主体はマルクス主義意識のあるところには何処にでも存在する、どこにでも共産党らしいものができるというにすぎないのであつて、實際の共産党、労働者階級の闘争の現實の組織とは無關係のものであつた。しかも、この主体的條件または主体という理論闘争、

分離結合論等の表面華やかな論議は、いままでも労働者が求めて求めえなかつた共産党にたいして、パンの代りに石を与えたともいへば、労働者はパンと間違えてこれを受け取つたのである。これはやはり日本の労働者階級の大きな不幸の一つであつた。舊指導の山川主義は党内においても福本主義の浸潤によつて左から右へ押し出されて、その後福本主義が入つてきたのであるが、この福本主義は山川主義を押し出しただけであつて、決してこれを克服してしまふことはできなかつたし、またそうしたことのできる性質のものではない。この福本主義が労働者階級の闘争の發展によつて築きあげられた党大会において、指導相方針としてとりあげられたことは、日本の労働者階級にとつて大なる不幸の一つであつた。

党再建大会はしかし、同志渡辺政之輔をはじめとして若干の優秀な労働者同志が参加して開かれ、党の当面の諸政策を決定し、新中央委員会を選任した。そして長いあいだ失われていた党を今こそ恢復して闘争に臨むのだという意氣をもつて、前に述べたような、闘争経験を積んで党の門前まできていた、階級闘争の將校ともいへばき人々がこの党に入つてきた。このときにコミンテルンはこの党再建大会そのものにたいして祝意を寄せると同時に、この大会が採用した福本主義の方針に、まつききに強く反対を表明した。コミンテルンの指導はこの大会の採用した方針を日本のプロレタリア階級を毒するものであるとして否認し、モスコのコミンテルン中央執行委員会プレジヂウムにおいて正しく解決をつけなければならぬことを主張したのである。

党大会の採用した方針ならびにその他の諸政策はコミンテルンの強く反対するところとなつた。同時にコミンテルンは、当時なお党内に浸潤していた山川主義の指導——すでに福本主義のために實際には大衆闘争の場面から除外されていたがやはりまだ残つていた——が、福本主義にも劣らずコミンテルンの主義に背馳するものであ



ることを指摘した。そして、この双方を克服することなしには日本のプロレタリア階級は勝利することはできないという見地から、当時においては分派ではなかつたが福本主義派ともいべきものの代表とまだ残つていた山川主義派の代表、これらをいづれもモスコイに呼んで、徹底的な討議を行つて決定を与えなければならぬことになつた。当時の幹部派ともいべき福本主義派の中には、その後福本主義克服のために先頭に立つて闘つた名譽ある指導者、同志渡辺政之輔もいたのである。同志渡辺政之輔は当時の非常に困難ないろいろの條件のもとにおいて、十数名の党員の参集する党大会を開くために、実際に身をもつて当つたのであるが、その決定にたいするコミンテルンの招集を非常に重要視し、是非ともできるだけ多くの者がモスコイに赴き、コミンテルンの指導のもとに徹底的に討議して誤れるところを正し、正しいものをえなければならぬことを主張して、いわゆる福本主義派の代表はモスコイに行くことになつた。その当時はなお党内問題であつたからいべきではなかつたけれども、今日においてはもはや公表されて少しも差支えないことと思うが、当時の反対派である少数派すなわち山川均氏その他をもつて代表する人たちは、このモスコイの招集にたいして、同志渡辺政之輔その他の同志たちが反対派もモスコイにいつて討議し決定をしなければならぬと熱心に説得に努め、モスコイに行くためのいろいろの手段についても骨を折つたが、山川主義派その他の労農派の指導者たちはこれをサボタージュしたのである。党は中央執行委員等の留守中における指導機関を設けて、モスコイで決定されるまでとにかく大会で採用した方針のもとに實際運動を進めて行くことになつた。

当時、党にはいまいつたように、一方には福本主義、一方には山川主義、この組織的分派ではないけれども二潮流があつたので、それをいま説明の都合上で幹部派とか反対派とかいうように呼んだが、もちろん幹部派という

のは分派ではなくして、これが当時の党そのものであつたのである。この点をとくに言明しておく。

なおまた附言すべきことがある。共産党を裏切つたある人々は、コミンテルンの指導者が——この者どもはコミンテルンの日本支部長といつてはいるようだがそんなものはない——共産党の大会を否認する、一國の党大会を否認するなどは怪しからぬ、といつてはいるが、これは明らかに國際的組織規律というものを全然知らないからだ。コミンテルンの指導者が單に指導者であるといふことで党大会の決定を否認することはできないが、コミンテルンの執行委員会が一國の党大会の決議が誤つているときに、これを破棄せしめることができるのは当然である。階級闘争の組織において、國際的な中心がその一支部の決議の誤つていゝ場合にはこれを否認し、新しい正しいものに変えることができるのは當然のことであり、またそうあるべきものである。

## 2 一九二七年における闘争

一九二七年、この年は日本共産党が福本主義の指導方針のもとに、そのレールの上に車を載せて進行しながらも、その後の階級闘争の發展は福本主義のレールをはずし、別の正しいレールの上に載せなければとうてい階級闘争の機関車を進めることができないことを現実に証明した年である。

すでに労働争議、農民闘争の激化において見たとおり、日本の資本主義は危機を深めつつあつたが、遂に一九二七年（昭和二年）四月になつて、いわゆる昭和金融恐慌が勃発した。この恐慌の労働者農民にたいする影響は実に甚大なものがあつた。金融恐慌の労働者にたいする影響、すなわち大量的解雇、賃銀値下げ、工場閉鎖等が労働組合に組織されていない廣大な労働者をも資本に反対して奮起せしめた。またこの金融恐慌の影響はもとよ



り農村にも及び、農村における階級闘争はこれがためにすばらしく激化した。農家の重要収入の一つである繭價の非常な下落によつて特に養蚕農民の窮乏がひどく、従来の小作争議に起ち上つた小作人だけではなく、廣い範圍に互る貧農大衆が全國到る所に起つて争うにいたつた。

再建大会以後の党活動、主として一九二七年の活動がこの労働者貧農の闘争に指向されたことはもちろんである。日本共産党は、政府が少数財閥保護のために五億圓にのぼる補償法を実施するやこれにたいして反対し、恐慌の犠牲者たる労働者の大衆闘争を組織するために工場代表者会議の運動を宣傳、煽動、組織し、また前年來から行つていた帝國議會解散のための闘争、普通選挙遂行のための請願運動——かの廣大な大衆を動員しえた請願運動をさらに続行し、五億の金を大衆から強奪せんとするブルジョア議會にたいする闘争を指導した。これらの闘争には左翼の労働者だけではなく、中央、右翼の大衆も参加して、実に三月以上に互つて強力に闘い、日本共産党はこの全闘争を通じて大衆を革命化し、共産主義的労働者を作りだすことに努力したのである。すべての重要な運動は「工場へ」を合言葉として行われ、労働者の一切の闘争は工場において組織されなければならぬことが、金融恐慌の影響にたいするせつばつまつた闘争のうちに痛切に学ばれた。「工場へ」という合言葉はこのときにあらゆる方向に向けられた。例えば無産者新聞読者組織の活動においても、工場における読者会の組織という合言葉をもつて進められた。日本共産党がこの年に一九二七年テーゼを受けたことが、工場細胞を基礎として党を再組織する方向に進んだ根據である。これらの運動は、当時の社会民衆党、日本労働党などの社会民主主義者の小ブルジョア的な闘争指導と鋭く対立して、工場代表者会議運動にたいしてかれらは積極的な消極的なあらゆる妨害を行い、自己の傘下の大衆がそれに参加することあらゆる狂態の限りをつくした抑圧を加えたが、これにたい

して党は容赦なくその小ブルジョアの根性を摘発して闘つた。

かくのごとくこの二七年は金融恐慌にたいする闘争によつて労働者階級の闘争が非常に進んだが、これに最も重大な影響を与えたものは中國革命のすばらしい發展であり、日本帝國主義の対支干渉にたいする中國プロレタリアートの闘争である。この中國革命の指導権は革命を裏切りすてた中國ブルジョアジーから中國共産党を指導者とする中國労働者階級の手に移りつたのであるが、この時代における中國労働者の比類なき英雄的な自己犠牲的な闘争、外國の帝國主義軍隊の砲火を浴びつつ激しい殺戮迫害の中において發展させた英雄的な闘争が、日本プロレタリアートにどれほど大きい感動を与えたか、大きな影響を与えたか、大いなる教訓を与えたか、それはその後ますます明白になつているところである。

その当時においても、たとえば中國の戰闘的な労働者が糾察隊あるいは便衣隊を組織して帝國主義者と抗争したことが日本労働者の間に直ちに「輸入」されたように見えた。が、これは決して單なる流行ではない。中國の英雄的な労働者の闘争にたいする日本プロレタリアートの感激が、日本帝國主義者の中國にたいする武力干渉、ことに中國の軍閥等と結托して中國のプロレタリア農民を殺戮することにたいする階級的憤怒に結びついた、偉大な革命的影響である。これが日本共産党を養う一つの大きな力であつたことは争えないと思う。今まで日本の労働者は、中國人といえれば自分たち日本人よりは遙かに劣つたものであるように宣傳され、またそう思いこんでいたのであるが、二六年から二七年にかけての中國プロレタリアートの榮譽ある革命闘争に面しては、全く階級的な愛、革命的な同志愛を感じ、中國労働者の英雄的闘争によつて自分たちが激励されたのである。それが日本の共産主義運動の發展に大きな力となつたことを強調しなければならぬ。党のこの年の活動については簡単にするが、



かくのごとく一方では金融恐慌の影響にたいする労働者階級の闘争、他方では中國革命の発展、中國プロレタリア闘争の影響、これらによつて日本のプロレタリアートは非常に発展していつたのである。

日本共産党はその当時、福本主義という反國際主義的な、反コミンテルン的な、反プロレタリア的な、小ブルジョア的な指導方針を採用してそのもとに活動していたが、ここに至つては、その福本主義の指導とこの實際の階級闘争の発展との間に現われてきた矛盾を認めざるを得なくなり、日本共産党の当時の指導部は、十分に意識しなかつたけれども福本主義を部分的に實際の闘争の中で修正を加えたのである。その年の夏から秋にかけて、共産党は党自身の綱領をもたねばならぬ、党は非合法中央機関紙をもつて大衆の間に公然と党の政策を宣傳し公然と闘争活動をしなければならぬ、また、すべての運動は何よりも工場を基礎にしなければならぬ、党自身はやはり工場細胞を基礎にして再組織されなければならぬ、というような重要な問題に逢着してその解決を迫られたのである。しかしこれは何といても福本主義を清算しないかぎりには、そしてコミンテルンの正しい指導と直接に結びつかないかぎりには、絶対に不可能なことであつた。また實際においても、そういう問題に逢着した当時の指導部は、中央委員会ならびに擴大中央委員会を開いて、これらを議題にのぼせて討議した。しかしまだこれを実践に移すことはできなかったのである。工場細胞の問題については、コミンテルンの第二回組織會議の工場新聞に関するテーゼとともに細胞組織に関するテーゼ等が日本にも文献として入つた。当時の党指導部はそれに接して一そうその重要さを痛感したのである。

党は工場細胞を基礎として再組織するために過渡的な方法として、從來の地方的な、地域的な仕事關係のフラクション的細胞組織にたいして、重要な工場の細胞を組織する任務を受けもたせる、すなわち從來の細胞にあらたな工場細胞の組織委員會の任務をもたせ、その周囲の受けもち工場の労働者を引き入れて工場細胞を作りだすための一個の外廓ともいふべきものを組織し、重要工場に接触してそこに細胞を作りだす、こういう方針をとつたのである。当時の細胞のうちの最も活動的なものは、この仕事に熱心に活動し、工場新聞なども指導部から指令を待つまでもなく発行した。またそういう活動的な細胞では、工場新聞に関するコミンテルンのテーゼ等を翻譯して、黨員に配布することもしたくらいであつた。

しかしながら結局において、当時の党を工場細胞の上に再組織することは、そういう從來の細胞が工場細胞委員會を作つてもつて行く方法では容易にできなかった。これはやはり、二七年テーゼをもつてモスコウからの代表が帰國して、決然たる根本的な党の再組織をなし、從來の細胞を解いて新たな工場細胞または工場細胞準備會組織に再建することによつて始めてできたのである。ここで明らかなことは、福本主義の誤つた指導を清算することができなかつたけれども、實際の闘争の発展は党をかかゝる重要な緊急の問題に逢着せしめたいということであり、また大切なことは、やはり当時コミンテルンから指摘されたように、あらゆる形の小ブルジョア的な指導を断乎として克服しないかぎりには、いかによい思いつきがでたところで、いかに緊急な重要問題に面とぶつたところで、それを實踐に移すことも解決することもできないということである。この二七年の党活動はそのことを証明するために再組織したといつても過言ではないくらいである。以上で二七年における党活動についてごく總括的に述べた。

二七年七月モスコウに行つた日本の党の代表者同志はコミンテルンの指導のもとに、日本の党の問題を討議した。コミンテルンの指導者は全世界のプロレタリア運動を指導するために寧日なく実に忙しい、それこそ寸暇も



ないほどに絶えず活動しているが、しかし日本の問題のためには非常に大きな日時を割いた。山川均氏の氣の抜けたくだらない文献や福本主義に関する著書なども念入りに翻譯し、それらをよく読みよく検討し、また日本の實際の労働者運動の狀態の検討の上にもあらゆる方法をつくし、日本の党の問題にたいして實にあますところなく批判を加えたのである。もちろん日本の代表者諸君は、同志渡辺政之輔を始めとして労働者の最も活動的な積極的な同志諸君はこの討議に實に熱心に参加した。そして十分な討議を経た結果でき上つたものが、二七年七月におけるコミンテルンの日本に関するテーゼである。

このモスコイに行つた日本の代表者の間にも、やはり労働者的な要素と小ブルジョアのインテリゲンチヤの要素とがあつて、この問題の討議の間にわかれて、労働者グループというものができた。これは党に誤つた指導がある時に生ずるものであり、そのこと自体は不都合であるが、この時の分派はいわば健全な分派であつた。そういう意味のものが同志渡辺政之輔を代表的な指導者として存在した。そうしてこれが二七年テーゼを日本の運動に實際に移すに當つては非常な活動をしたのである。日本共産党は、二七年七月の決議によつて始めて思想的にも政治的にもボルシェヴィキの線に入り、そうして民主的中央集権主義の具体化のために、組織的に最も重要な工場細胞の基礎の上に党を正しく据え、日本の共産党にコミンテルンの線に沿つた抜くべからざる正しい礎石を据えたのである。

### 3 コミンテルン執行委員会の日本に関するテーゼ

そこで、この二七年のコミンテルンの日本問題テーゼはいかなるものであるかをごく圧縮して述べなければならぬ。

これはすでに翻譯されて二八年三月に雑誌「マルクス主義」に出ているが、この翻譯は非常に杜撰なもので、当時の党においても直ちに改訳することを決議したが、遂に今日までその改訳を果さずにいる。

この重要な日本の党の劃期的な文獻、このテーゼの正しい翻譯ができ、それが日本の労働者大衆に與えられることは非常に重要なことである。これはすでに数年前の決議ではあるが、今日においても非常に重要な意義をもつているから、その正しいものを與えることは依然として必要であると考える。

一九二七年七月、モスコイのコミンテルン執行委員会において日本の代表者とコミンテルンの代表者とが討議し決定した日本に関するテーゼ、いわゆる二七年テーゼは、日本のプロレタリア運動にとつて、したがつて日本共産党の發展にとつて、重要な劃期的な意義を有するものであることはすでに述べた。このテーゼがコミンテルンにおいていかに周到なあますところのない討究の結果によつてできたものであるか、また突然と二七年にできたものではなく、その以前にすでにコミンテルンは日本の党の問題に関して幾つかの重要なテーゼを作成していたかは、これまでに説明した。特に一九二六年すなわち前年の二月のコミンテルン執行委員会幹事会における日本問題の決議、これが直接に二七年テーゼの先驅をなしている。二七年テーゼが二七年の會議において初めてきたという性質のものでないことは、このテーゼの意義を述べてゆく間に明らかになるであらう。

この二七年テーゼが今日の日本のプロレタリア運動にいかに實際に大きな前進的な役割を演じたかは、今日においては何人も疑うものはない。ただこのテーゼを振りかえつてその不十分な点を拾いあげ、あの二七年当時においてはこの点はかくかくにすべきであつたというような、回顧的な高等批評的な非難をするものがあるが、これは断じてコンミニュニストのとるべき態度ではないと思う。今日このテーゼを振りかえつていろいろの非難



をすることは人おののすき勝手であるが、当時においてはこれが日本のプロレタリア運動にとつて最高の力の表現であり最高の指導方針であつたこと、そしてそれが実際の運動を少しも妨害しなかつたどころか偉大なる前進的の役割を演じたことを強調しておく必要がある。このテーゼが何故にかく偉大な役割を演じたかを説明するに当つては、幾分このテーゼの眼目について述べる必要がある。

テーゼは日本の客観情勢を分析している。そして注意すべき点は、「日本帝國主義はなおその発展の上向線上にある、とはいえ、その地位の矛盾、その一層の前進を組む諸困難の堆積は脅威的性質を帯びはじめている、そのことは何よりもまず資本主義恐慌の特別の尖鋭化に現われている」と規定している一節である。これはいうまでもなく、日本の党に擡頭してきた福本主義理論の一つの現われである日本資本主義の急激な没落という独断論、また他方において、イギリスをはじめヨーロッパ諸國のいわゆる資本主義の安定状態を日本にそのまま当てはめて、日本資本主義が安定しているといふとき無意味な議論を吐いていた他の右翼的一派、この双方にたいして断然反対した見解であり、当時までの日本資本主義の情勢を正確にいひ現わしているものである。この上向線を辿つていくということは、労農派左翼社会主義者一派がそれを唱えて有頂天になり、日本の資本主義がなお隆々たる発展の途にあるようにこじつけたものとは全く縁のないものである。このテーゼは明白に日本の資本主義が上向線を辿つていくといつては、それには非常な制限がある。とくにアメリカの資本主義に較べて非常に制限されたものであり、また最も重要なことは、そうした上向線を辿つていく日本の資本主義のその内部における矛盾は非常に激烈に増大しつゝあつて、一つの脅威的な形態をさえとり始めた資本主義恐慌の尖鋭なる形をとつていくことである。テーゼは金融恐慌の直後にできたもので、とくにこの点を正確に捉えて日本資本主義の

矛盾の激烈な発展に注意を促している。

つぎにテーゼは日本の國家権力の構成を取り扱つていく。今日の日本の資本主義が世界大戦中においてすばらしい発展を遂げた結果、日本の國家権力は資本家と地主との反動的ブロックの手にあつて、従来はそのヘゲモニーが地主的勢力のもとにあつたが、いまや完全にブルジョアジーの手中に移り、そのヘゲモニーの下に反動的ブロック政権が運用されるに至つたことを強く示している。これは二三年の党大会で審議された共産党綱領草案における見解より一歩進んでいる。この綱領草案では、日本國家の半封建的な性質を地主勢力のヘゲモニーという点に歸して日本の現政府は地主政府であると規定していたのである。しかし二四年から二五年の護憲三派内閣の成立につづいて憲政会単独内閣が成立した。この発展をコミンテルンは正当に評價して、二六年二月テーゼにおいてはすでに明白に「つぎのよう」にいつていた。「世界戦争の間に日本の資本主義は急激な発展を遂げ、従来地主のヘゲモニーのもとにあつた資本家地主のブロック政権は、いまや完全にブルジョアジーがそのヘゲモニーを握るにいたつた」と。二七年テーゼは二六年テーゼのこの点に関する規定を継承し、さらにこれを明白にしたのである。

テーゼはさらに日本における來るべき革命の展望について重要なことを規定している。これはすでに公表されているものであるから簡単にする。

このテーゼによれば、日本のブルジョア民主主義革命は強行的速度をもつて社会主義革命に轉化するであろう。なんとすれば、近代日本國家は種々の封建的特質と残存物ともかかわらず正しく日本資本主義の最も集中的なる表現であり、その幾多の最も中枢的な神経を包擁しており、それゆゑに、それにたいする打撃はまた全体



としての日本資本主義体制にたいする最も力強い打撃となるであろうからである。すなわちこれによつてみると、日本におけるブルジョア民主主義革命は社会主義革命への過程における一段階にすぎない。たとえブルジョア民主主義革命を指導するとしても、プロレタリアートはけつしてその階級的展望を見失いはしない。反対に、正しく社会主義革命への轉化の展望こそが、プロレタリアートにとつて闘争のあらゆる段階において決定的である。この意味で日本におけるブルジョア民主主義革命の展望は、すでに早く一九二二年の綱領草案の当時から発展してきているのである。二二年の綱領草案においても明白に、日本におけるブルジョア民主主義革命の完成はブルジョア支配の顛覆およびプロレタリア独裁の実現を目標とするプロレタリア革命の直接の序幕となりうるであらう、といつてゐる。また同草案は、日本共産党はブルジョア民主主義の敵手ではあるけれども、それにもかかわらず過渡的なスローガンとして天皇の政府の顛覆および天皇制の廃止をかけた、かつ普通選挙権獲得の闘争を指導しなければならぬ。実にこれを実行することは日本の革命運動の現在の發展段階において、共産党の旗の下に最大限の勢力を集中し、その勢力の指導権を握り、かくして日本のプロレタリアートのソヴェート権力のための未來の闘争の道を開拓するために必要である、といつてゐる。さらにまた二六年のテーゼはこの点に關して、日本ではブルジョア民主主義革命がプロレタリアートのヘゲモニーのもとに労働者と農民とによつて遂行されなければならぬ、すなわち、ブルジョア民主主義革命はプロレタリア社会主義革命に急速に轉化する基礎をもつてゐるのであるから、共産党は労働者農民などのあらゆる進歩的民主的要求の先頭に立つて最も積極的に犠牲的に活動しなければならぬ、といつてゐるのである。

二七年テーゼは二二年以來の發展を規定してゐるのであるが、なおこのテーゼにおいては、とくに現代の日本

においては、革命の客觀的條件が非常に成熟してゐるにもかかわらず、一方においてレーニンが革命の主觀的條件と名づけたものが非常に未熟である。テーゼはこの主觀的條件の成熟のための闘争、すなわち共産党の擴大強化、その指導的役割の高度化、大衆の間における政治的指導権の獲得の重要性を非常に強調してゐる。

またこの二七年テーゼにおいて最も重要なことの一つは、共産党の役割を強調することに関連して、舊來の日共本共産党における誤つた小ブルジョア的指導、いわゆる山川主義、——このテーゼにおいては同志星によつて發表されてゐる思想、——他方これにたいして新しい誤つた小ブルジョア的思想、いわゆる福本主義、——このテーゼでは同志黒木の代表する思想といわれている、——これら党の發展を妨害する二つの重要な偏向過誤にたいして徹底的な批判を加へてゐることである。これについてはさきに述べたので、ここでは詳しく述べぬが、コミンテルンはこの山川主義と福本主義とがあくまでも日本プロレタリア運動の妨害物たる敵であると強調し、これらとの闘争を假借なく遂行すべきことを主張してゐる。しかしこのテーゼを見てもわかるように、山川、福本がテーゼにおいて同志星、同志黒木としていい現わされてゐるが、——これは今日では明白なことであるからあえて公言するが——この同志星なり同志黒木なりを山川主義、福本主義の克服とともに党から葬ることはしなかつた。コミンテルンおよび共産党はさういふことは決してしなかつたのである。

しかしながら同志星（山川）が党から葬られて今日では公然たる党の敵となつてゐるのは、ほんらい山川主義を徹底的に克服してゐるコミンテルンのテーゼに従はず、かえつて党に反逆しコミンテルンに反逆して行動をしたがためであつて、このために彼は党およびコミンテルンから放逐されたので、決して山川主義の克服と同一ではないのである。



## 五 二七年テーゼに基ずく党の再組織から第六回世界大會まで

### 1 再組織

日本共産党はこの重要な劃期的意義を有するコミンテルンのテーゼを受けてこれを実践に移すことになった。コミンテルンはこのテーゼとともに日本共産党の新しい中央委員を任命し、このテーゼの精神に基ずいて党を根本的に再組織すべき任務を擔當せしめた。コミンテルンが日本の党の中央委員を新たに任命した。すなわち、党再建大会の決議をコミンテルン執行委員会が討議して、日本の党に新たな方針を遂行する固い義務を課し、このテーゼを與えると同時に新たな中央委員を任命したのである。

このことはブルジョアや社会民主主義者にはなかなか理解のできない、官僚的なもののように思われるであろうが、これはコミンテルンが世界的の集中的な嚴格な統一組織であることの一つの証據にすぎないのであつて、さらにこの新たな日本の中央委員は決して永久にそのままになるのではなく、日本共産党は直ちにこのテーゼを実行に移して活動すると同時に、できるだけ速やかに党大会を開き、その大会でこのテーゼを確認し新たに中央委員を選出すべきものである。

日本共産党はこのテーゼを即時実践に移すことにした。モスコに赴いた日本の党の代表者は一九二七年十一月に帰り、十二月二日に擴大中央委員会を開催した。擴大中央委員会においては二七年テーゼについて熱烈な討論が行われ、すべての同志は圧倒的支持をもつて、このテーゼに基ずき党内でも最先頭に立つて指導的に活動す

ることを誓つた。さらに新しい中央委員しかもその常任委員が、従來の党のすべての細胞にこのテーゼに関する報告にゆき、全党員が充分討議し各黨員が確信をもつてこのテーゼを実践に移すように努力した。黨員の圧倒的多数をしめている、ブルジョアジーにたいする闘争の經驗によつて学んだ労働者闘士たちは、実に熱烈な賛同をこのテーゼに向け、身をもつてその実践に當ることになり、このテーゼをもつて喜び勇んで工場にとんでいつて活動した。党はこのテーゼに基ずいて直ちに党全体の根本的再組織、改造を行つた。従來の細胞を工場細胞または工場細胞準備会に組織替えして、党は工場の中から労働者大衆の革命的エネルギーを吸収し、眞に労働者の大衆党とならぬ道をここに踏みはじめたのである。

またこの根本的再組織、すなわち工場における活動、工場細胞の確立発展のための闘争、これらによつてはじめて全党員が積極的に党活動に参加することになった。またこの再組織の結果、従來は非合法的存在を余儀なくされた大衆に自己の姿を隠していた党が公然と政綱を掲げて大衆の中に現われるようになった。中央委員会は直ちに政治テーゼ、組織テーゼ、労働組合運動に関するテーゼ、当面の諸政策に関するテーゼ等を作成し討議して、全中央委員会の決定を経てこれを公表した。また党の中央委員会の機関紙として「赤旗」を創刊し、これは黨員のみならず党の周囲にいる革命的労働者の間にひろく頒布するようになった。かようにしてはじめて、党は大衆と直接結合しうるようになったのである。これは日本共産党にとつてこのテーゼの最初の重要な意義の実現であつて、このテーゼによつて思想的にも政治的にも、また組織的にも、日本の共産党は正しいレーニン主義の基礎の上に、コミンテルンの線の上に立つて、もはや抜くべからざる労働者大衆党としての礎石を据えることができたのである。こういふ風にしてこのテーゼは実現の緒についたのであるが、その実現を極めて有利にした條件が



ある。それは國際的、國內的の客観的な條件、また國內における労働者の過去数年に亙る苦難な闘争の経験であり、これらが党に直接に加わり、または党を支持する力となつて、大衆党としての共産党の出発を容易ならしめたのであつた。

労働者の闘争においては、二六年以來ストライキは深刻化を辿つてきたが、二七年の金融恐慌から俄かに公然かつ激烈となつてきた資本家的産業合理化にたいする大衆の生死の闘争、頑強なる闘争が起つた。また農民の方面においては、同じく二五年から二六年にかけて小作争議が飛躍的に増加し、とくに直接的な土地争奪の争議が飛躍的に増加し、農村の戦は二六年以來しばしば暴動化の傾向をとり、二七年にはその傾向は一般化し、廣大な未組織農民までが大挙して闘争に参加した。しかもブルジョアジーはかくのごとき内外の危機に面してますます反動的な政策をとり、労働者農民は日常の闘争において國家権力と直面するようになってきた。また一方において、社会民主主義者の裏切りの事実が、ことごとくに暴露され、かつますます増大し、彼等は公然と國家やブルジョア機関と取引するようになってきた。とくに共産党が公然と出現して大衆の間に活躍するようになると、社会民主主義者の化けの皮はいやでもおうでも剥けて行かねばならなかつた。かかる情勢のもとにおいて、党の發展、大衆化のための闘争は有利に行われた。党员は少数の小ブルジョア・インテリゲンチヤの分子を除くほかは、すべて熱烈に党再組織の闘争に参加し貢献した。テーゼを實踐に移すに至つた経過は今まで述べたとおりである。

ここで二六年十二月の党大会における再建と二七年の再組織とについて説明しておく。二三年三月、共産党がコミンテルンの承認も得ずまたもちろん党会議の決議も得ずに、小ブルジョア幹部のために組織の解体を強要さ

れた後に、いわゆるグループ時代というものがあつた。これを正式に党として、いわゆる第一次共産党時代の地位にコミンテルンの関係も恢復して、正式な党としてグループから脱却して再建した。これが再建であつた。今度の再組織というのは、従來の、とくに再建大会において採用された決議に基づいて活動してきた党、これをより以上發展せしめるためには二七年テーゼが絶対に必要であつたので、党をこの二七年テーゼに基づいて根本的に、政治方針をもまた組織上の形態においても改組すること、これが再組織における重点である。政治上、組織上においてもコミンテルンの線に沿つて、誤つた指導を清算して根本的に作り替へるといふ意味で、再組織といつたのである。

## 2 再組織から三・一五檢舉まで

これから、再組織後の日本共産党の主要な闘争について述べる。日本共産党がコミンテルンのテーゼに基づき再組織に着手して直ちに当面した重大な闘争場面は、総選挙、普通選挙の最初の実施による國會総選挙戦であつた。この総選挙において日本共産党は現実に大衆党として發展する第一歩を踏みだし、実践によつて労働者大衆の党であることを大衆の間に示すことができた。共産党はこの選挙戦にたいしては、第二に党の實際の再組織を進めるために、何よりも第一に工場を基礎として党を築きあげるために、そして党の勢力を擴大するために、最大限にこの選挙戦を利用する目的をもつて参加したのである。

そしてまた實際に、この選挙戦のあいだ党中央委員会は新党员の獲得を盛んに激励した。この選挙戦に際して日本共産党がとつた根本方針は、たしかコミンテルン第二回世界大会のテーゼと思うが、議会主義に関するテ



ゼに根本的には則つた。そうして共産党の議会参加の原則を明らかにし、ブルジョア議会の階級の本質を暴露し、この選挙闘争において階級闘争の発展、プロレタリアートの階級的組織の成長を促すこと、ブルジョアジーにたいする権力の闘争に推し進めて行く方針を厳としてとつた。プロレタリアートは決してブルジョアジーの國家機關をそのまま継承して自分の機關とすることを得ないというマルクスの説、プロレタリアートは全く新しい自分の権力機關すなわちほかならぬソヴェート、そのみによつて権力を奪取し行使し、そうして社会主義建設につくことが出来ること、これらのことをなんら隠すところなく大膽に大衆の間に宣傳した。そして共産党は選挙戦には参加するが、改良主義的な立法を積み重ねてそれでプロレタリア階級が解放されるかのごとき、または支配の地位にのぼりうるかのごとき幻想を懐くことにたいして断乎として反対すること、ブルジョアジーの議会を内部から破壊してプロレタリアートの新しいソヴェート権力を作りあげるために、階級闘争の一つの補助的手段としてこの議会を利用し、選挙戦に参加するものであること、を宣傳したのである。

社会民主主義者たちはこの選挙闘争において、議会主義の幻想を大衆のなかにふり撒くことにつとめ、議会は國民の意思の表現であるという社会民主主義の思想に立つて、プロレタリアを騙すことに骨を折つたのである。が共産党は、——一般國民というような統一なものとは現在の日本社会においては決してない、あるものはただブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立のみである。議会による改良を通じてプロレタリアートが支配者となりうるというようなことは、ブルジョアジーと社会民主主義者との欺瞞である。プロレタリアートはただ大闘争によつて、しかもその大衆闘争の最高の形態である内乱によつて政權を把握しうるのである、——ことを大膽に明らかにしたのである。議会内の闘争は議会外の大衆闘争に従属してのみ役立つものであつて、

共産党はこれを階級闘争の重点とはみない、階級闘争の重点は議会外の大衆闘争にある、議会内の闘争は廣大な階級闘争の一個の補助支点到すぎないことを宣傳した。こういふ根本方針に基づいて共産党は選挙戦に臨み、具體的な選挙闘争においては、以上のような根本方針をもつて、共産党独自の候補者を立てて闘わなければならぬという方針をとつたのであつた。ただ当時の力関係においては、日本共産党が公然と候補者を立てるわけにはゆかなかつたので、当時の労農党その他の大衆政党といわれていた無産政党とくに左翼の労農党を通じて、その候補者として黨員を立候補せしめた。選挙戦においてまた議会において、徹底的にブルジョアジーと闘い得るものは鉄のごとき規律による統一ある組織のもとに活動する共産党だけであつて、いかに革命的な傾向をもつ闘士でも共産党の一員でないかぎりにはブルジョアジーとの徹底的な闘争を闘いぬくことはできない。ゆえにわが党は強烈な非合法の状態のもとにおいても、独自の候補者をどうしても立候補せしめて闘わなければならぬことになつたのである。

いふまでもなく共産党の候補者は党中央委員会の統制に絶対に服従する。このときには選挙統制委員会という特別な委員会が設けられたが、これを通じて党の指導部の統制に絶対に服従し、各候補者は全國オルガナイザーの直接の指揮のもとに活動する義務を課せられ、かつ共産党の候補者たる者はいかなる政見発表演説会においても党の原則を一步でも踏みはずしてはならぬ、少くともこれこれの内容を演説の中に織りこんで演壇に立たなければならぬ、という厳格な演説内容の要旨さえも中央委員会は授けて、これに絶対に従うべきことを命令したのである。

このような厳格な党の統制のもとにおいて、党の議員候補者は全国各地においてあらゆる大衆闘争の先頭に立



ち、演説会、大衆的な集会、とくに工場内部における闘争、集会または示威運動などに最も勇敢に活動しつつ全大衆の信頼を集めて闘った。共産党はこの選挙戦において何よりもその活動を工場に集中する政策をとつたことはもちろんであるが、一方また農業革命の切迫しつつある農民大衆を獲得するためには、とくに農民の要求たる大土地所有没収というスローガンを掲げて闘った。そして、この選挙戦における共産党の中心的スローガンとしては、二七年テーゼに決定された十三のスローガンおよびそれに結びつけて闘うべき中心スローガンたる「労働者農民の政府」、「プロレタリアートの独裁」をとり、とくにこの選挙戦において常に中心スローガンとして前面に掲げたのは「労働者農民の政府」であつた。中心的のスローガンとしてその他に二三を採用したが、結局は「労働者農民の政府」にこの選挙闘争の全スローガンを集中したのであつた。

なお、この選挙闘争においてわが日本共産党と大衆党といわれた「無産政党」がどういふ関係になつていたかについて少し述べる。当時の選挙戦においては選挙協定なるものが問題となり、社会民主主義者やブルジョア新聞はこれに最大の注意と興味とをかけ、そして、どれほどの当選者を出しうるかが彼等の唯一の最大興味であつた。日本共産党はそういう点にのみ注意を向けることをしなかつた。しかし当時においては、日本共産党は自身大衆党として出発したばかりの時代であつて、多くの大衆はまだ日本共産党なるものを知らず、多くは各無産政党とくに革命的な労働者農民の大衆は左翼無産政党であつた労働者を支持し、これが唯一の革命的な政党であるように考へていた。こうした事情に鑑みて、党はこれらの無産政党と機械的に対立せず、それとの交互作用に立つて活動する方針をとり、とくにブルジョア政党との対立においてはこれを支持し、これら無産政党の闘争を結合して共同闘争を発展させ、もつて無産政党合同の一つの懸け橋とする方針をとつた。党はこれらの無産政党を支

持するとはいへ、これらは決してプロレタリアートの革命政党ではないのであるから、かれらの誤りやかれらの社会民主主義的指導にたいしては、これを假借なく批判して大衆に暴露する批判の自由をあくまでも保留する政策をとつた。

しかしながら、例えば大阪から社会民衆党の候補者として立つた鈴木文治、また東北で立候補した赤松克麿、かくのごとき明々白々たる社会民主主義者にたいしては、批判を躊躇してはならぬ、大衆がかれらの指導を離れるように図らねばならぬという方針をとりながらも、鈴木文治はまだ大衆のある部分からは支持をうけているのだから、田中陸軍大將よりもまだましだ、だから我々も鈴木文治を支持しなければならぬ、墮落幹部が当選したところでべつに不利益でもなく、かれらみずからブルジョア議会においてその本質を暴露して大衆に弾かれるのだから、選挙では支持してもよい、というような極めて寛大な態度をとつたのであつた。——もちろんその後の實際が証明しているとおり、鈴木文治が当選して帝國議会の議員の椅子を占めてからの裏切りぶり、ブルジョアジの御用商人ぶりは露骨に露わられて、当時日本共産党が予言したとおりに、大衆の信頼を明白に失うようになつたのである。——しかし、当時においても日本共産党がかくのごとき社会民主主義者にたいして寛大な態度をとつたことは絶対に誤りであることをコミンテルンから批判され、社会民主主義者にたいする闘争がプロレタリアの運動の発展にとつて、共産党の成長にとつて、絶対に必要なものである、という二七年テーゼの正しいことを、我々はやはりここで確認したのである。

なお、この選挙闘争の結果は周知のとおり、無産政党と称せられるいくつかの政党にたいして約五十万の投票があつたが、この約五十万の投票のうち二十万近くは当時の左翼無産党であり、日本共産党の指導と統制の下



に最も活潑に最も革命的にこの選挙闘争を闘つた労農党に集まつたものである。すなわち日本共産党がこの選挙戦において中心スローガンとして掲げて闘つた「労働者農民の政府」に向つて二十万の投票が投ぜられたのである。このことは単に投票の数だけではなく、日本における階級闘争の尖鋭化を示すバロメーターである。日本共産党の発展の前途の有望であることを証明する一つの記念碑であつた。

そのほか、いわゆる三・一五の検査に至る間に、日本共産党は労働組合運動の方向においては、福本主義の影響のために労働組合運動が過小評價された傾向のあつたことを克服して、党と労働組合との関係の重要なことを強調し、左翼的組合である労働組合評議会の強化に全力をあげることに、労働組合の統一運動とくに大衆の下からの統一戦線を通じて労働組合の統一運動を進めて行くこと、こういふ方針をとつて着々と実現にうつした。また野田醬油会社の大労働争議、前年の後半期からつづいて長い野田の争議を支援するためにも闘争した。労働総同盟幹部は共産党および左翼労働組合の支援を拒絶したが、党と評議会とはこれにたいする大衆的な支援を組織することに努力し、各労働組合の野田争議にたいする共同闘争、共同支援を得るために闘つた。さらにまた、労働者の自衛のための闘争、——当時建國會その他の暴力団が労働争議や労働者団体の事務所を襲つてあらゆる暴行を逞しくしていたのにたいして、日本共産党は工場を中心として労働者の自衛隊を組織して訓練を行い、支配階級のあらゆる暴力手段に抗争することを学び、武装蜂起のために準備しなければならぬことを宣傳し、また実行に移したのである。

二月下旬、総選挙を終つて、党中央委員会は第二回全国組織会議を開き、この間の諸闘争の経験を集中した。第一回全国組織会議は最初の再組織のときに開催されたのであつて、これは第二回の組織会議である。

第一回の組織会議では、党の再組織のために全国にオルガナイザーを派遣するに当つて、党の組織部がオルガナイザーを集めて、二七年テーゼを各地方において実践に移すための重要な討議をなし、その結果に基づいて活動することを決定して、各オルガナイザーが地方へ派遣されたのである。これが第一回の会議で再組織の出発点となつたのである。二月下旬に行われた第二回の組織会議では、再組織の闘争の重要な経験を集中して、さらに党のボルシェヴィキ化のために重要な一つの決議が行われ、また公然と大衆の間において熱烈な活動をした。その経験が集積された会議であるから、非常に熱心な討論が行われ、その結果、数個の決議が可決された。

その第一は党の組織方針に関する決議である。これは組織活動における従来のセクト主義的な残存物を徹底的に清算することの急務と大衆的な組織方法を断乎としてとることの重要さを強調し、組織活動における機関紙として中央機関紙、地方機関紙ならびに工場新聞の重要な役割を強調し、工場とくに大工場の獲得に計画的体系的な努力を集中することを強調したものである。

また党のスローガンについて一つの決議が通過した。ここにおいては「労働者農民の政府」とは労働者農民の民主的革命的独裁を意味するものであることを確認し、また大土地所有の没収という共産党のスローガンと大衆の間ですでに採用されていた耕作権の確立についても決議した。また大衆の日常闘争と党のスローガンとの結合についても決議し、一般にかかる問題の決議が通過した。

第三には、いわゆる大衆党としての無産政党的合同問題についての決議を可決した。ここにおいては、大衆党は労働者農民の政治的ブロックであつて政党ではないという考え方を根底に置いたものであつて、この大衆党の合同は少くとも「労働者農民の政府」というスローガンを中心とした闘争によつて、この闘争の過程においての



み統一の途ができるのであることを規定した。

第四には、総選挙後の諸闘争に関する決議——総選挙戦において正体を暴露した社会民主主義者にたいする攻撃、きたるべき臨時議会の即位大典の予算にたいする闘争、これらを規定した決議が通過した。

第五には、当時の労農一派に関する決議を討議し可決した。ここにおいては、労農一派といわれる左翼社会民主主義者の先達者たちはいまや國內における階級的な反逆者でありまた國際的な裏切者であるという烙印を捺して、その中のある者にたいする党からの除名を確認したのであつた。これらの重要な決議をして、第二回組織会議は党のボルシェヴィキ化のための闘争の出発において一つの偉大なる功績をのこした。かくして党は、いまや眞に大衆の党としての活動を開始し、大衆の間に自己の政策を知らしめるに至つて、大衆の信頼はだんだん共産党に集まりつつあつたのである。

こういふ情勢のもとにおいて、党はコミンテルンの命じたとおりに、この闘争の一段階を境として党大会を召集する準備に取り掛かつた。およそ四月中に開催する予定で、新たに政治テーゼ、組織テーゼ、労働組合テーゼの草案を作成して、コミンテルンの指導者と党大会のための予備会議を開催する準備をなし、これらの諸テーゼ草案を携えて中央委員の一員がコミンテルンに派遣された。この間に、党大会の準備のまつさいちゆうに、日本共産党はかの最初の大弾圧たる三・一五検査の襲來を受けたのである。

党が再組織されてからいわゆる三・一五大検査までの党活動上の成果について、なお少しく補足したい点がある。再組織は日本の党の存在とその政綱とを大衆に公表して大衆に一つの強い光を與えたのであつた。いままで労農党を唯一の革命的政党と考へてその旗のもとに闘つてきた革命的労働者ならびに貧農は、この日本共産党の

公然の出現によつて、初めてブルジョアジーに対する徹底的な政治闘争をする政党は日本共産党であることを知つた。いままで労農党のもとに積極的に活動しながらも一定の活動限度にぶつかつて、漠然と労農党にたいする不満を懐いていた、かれら革命的労働者ならびに貧農の進歩的部分は、いまはじめてプロレタリアの革命政党を発見することができたのである。この再組織後の党の公然の出現によつて、共産党はかつて見ないほどの急速な速度をもつて、労働者大衆を量的に高度に吸収しうることになつたのみではなく、質の上でも、從來党内にあつた小ブルジョアの動搖分子を克服して、決然たる労働者党としての實質を帯びるようになった。

この再組織の事業は、二七年テーゼを承認せずにこれに背反して党とコミンテルンとを裏切つた明白な裏切者を党から駆逐しただけではなく、積極的にテーゼに従つて党の再組織のために党の擴大強化のために闘おうとしない小ブルジョア分子にたいしても断然たる処置をとつて大掃除したのである。さきに第二回組織会議の決議の中で労農派にたいする決議について述べたときに、労農派の除名を会議が確認したといつたと思ふが、これは言葉が足りなくて誤解を受ける憂えがある。事實は、この明白な労農派の裏切者にたいしては、既にこのときに党内の下部組織から、かれら労農一派は断然と党内の者ではないことを声明せよ、かれらを除名せよという要求が起つていた。また第二回組織会議では各地方で慘憺たる苦闘を続けてきたオルガナイザーの同志諸君が党の中央委員会にたいして労農派に関する問題を提出し、かくのごとき者が党に存在するかぎりには決して党は進展することができない、これは結局妨害物である、速やかに駆逐すべしという要求を出したのである。そこで第二回組織会議の決議として、労農一派の頭目連の除名を決議し、中央委員会が確認したのである。この種の明白な積極的な裏切者のほかに、さつきいつたような積極的にテーゼに基づいて活動しようとしな分子をやはり駆逐した



のであるが、この当時においてはなお、完全に駆逐しつくすことができなかった。この当時では充分に行うことを期待することはむりであつたのである。当時における小ブルジョアのインテリゲンチヤの要素は、コミンテルンの決議に表面は服従してその政治的方針のもとに党に従つていたが、その後、なかならず三・一五事件の大檢舉以後、ブルジョアジーの弾圧のもとにおいて、実践の上でこのコミンテルンの決議を裏切り、労農派の連中よりも大膽にコミンテルンを裏切り去つたのである。かかる分子はやはり党の実践活動、ブルジョアジーにたいする闘争の発展の中においてその正体を始めて暴露するようになったので、初めの間にはこういう分子が一部党内に止まりえたのも不思議ではない。

なお、三・一五に至るまでの間において、党は工場に確実な基礎を獲得しはじめた。また党のスローガン、とくに「労働者農民の政府」というスローガンは廣く大衆の間に普及しはじめた。また、社会民主主義者にたいする日本共産党の当初の闘争は前に述べたように極めて寛大であつて、大きな失敗であつたが、しかしその失敗を認めて爾後直ちにこれを清算して、このブルジョアジーの代理人、社会民主主義者にたいして仮借なき闘争をするようになった。普通選挙を中心とした当時の社会民主主義にたいする党の失敗は大きな教訓を與えたのであつた。

三・一五事件は周知のごとく、一九二八年三月十五日の曉に全國二十有余の検事局が動員され、共産黨員たる疑いをもつて一千名近くの労働者農民の戦士が逮捕されたのである。

### 3 三・一五から第六回世界大会まで

この三・一五大檢舉からだいたい同年の夏、革命の都モスコで開催されたコミンテルン第六回世界大会の前後に至るまでの党活動について述べたいと思う。

三・一五の大檢舉に際して、ブルジョア政府は一切の新聞報道を禁止して、全くの暗黒のうちに何百という労働者農民の前衛分子を処断しようとした。そして、あたかも暴動團、暗殺團のような陰謀が発覚したようにみせびらかしたのである。ブルジョア反対党や社会民主主義者たちはまた、この檢舉は田中内閣が選挙干渉に失敗したことをごまかすためだ、あるいは選挙中に内務大臣鈴木喜三郎が皇室中心主義の宣言を出して非常に不人気を買ひ味憎をつけたのをごまかすために、來議会の切りぬけ策として政略的にこの檢舉をやつたのだ、というようになしおらしい批評をしていた。しかしこれらはすべて、この檢舉の階級的意義を滅却するものだといふ見地から、直ちにわが共産党は、この檢舉はほかでもない労働者階級の前衛である日本共産党にたいする弾圧であり、労働者農民の前衛にたいする弾圧檢舉にはかならない、そしてつぎに來るべきものは労働者大衆團體にたいする弾圧であることを大衆に訴えて大衆的抗議運動を組織し、種々の労働組合、農民組合等の大衆團體を共同闘争に立たしめ、このブルジョアジーの狂暴なる弾圧に抗議せしめるように働きかけた。党の中央委員会はさらにこの檢舉事件の真相を明白に摘発して大衆に廣く知らせる必要を認め、つぎの意味を大衆に廣く知らせた。

第一に、日本ブルジョアジーは支那革命の発展に脅やかされ、支那とくに満洲蒙古における日本帝國主義ブルジョアジーの權益が脅やかされるのを防衛するために、武力をもつて支那革命の発展に干渉する必要に當面している。それのみでなく、支那の問題を中心として日本を主とする各帝國主義者との衝突はますます烈しくなり、新たな帝國主義世界戦争の危機が切迫して、日本の帝國主義はいやおうなしに來たるべきその戦に一大主役を演ぜ



ざるを得ない。こういう状態にあるがゆえに、日本のブルジョア政府は日本共産党にたいする大弾圧を行つたのである。なぜかというに、この日本共産党こそ、支那革命の支持、帝國主義戦争反対のスローガンを掲げてそのために眞に闘い、さらに「帝國主義戦争を内乱へ」「自國政府の敗北」というスローガンをもち、実際に自國ブルジョアジーの政權と闘争する唯一のものであるからだ。故に日本共産党はブルジョアジーと相容れない敵手である。かかる恐るべき日本共産党が無事安全に活動を展開して成長することは、ブルジョアジーの利益のために大衆を犠牲とする戦争を満足に遂行することができないから、日本共産党にたいする弾圧を行つたのである。

第二には、日本のブルジョアジーはとくに金融恐慌以來、激烈な野蠻な産業合理化政策を極めて強烈に遂行した。その遂行のために、日本共産党の影響のもとにあつて、それにたいして闘う革命的労働者を弾圧しなければならぬ、という理由によつて日本共産党を弾圧したのである。

第三には、農村における農業革命が農民のいろいろな暴動の形にあらわれて迫切しつつある。この危機において農民の蜂起を鎮圧するためには、農民の唯一の信頼すべき指導者であり味方である共産党、大地主の土地を沒收して農民に與えるために闘つている日本共産党を是非とも弾圧しなければならぬ。このために日本のブルジョアジーはこの大弾圧を行つたのである。

これらのことをわが日本共産党はあますところなく大衆に訴えた。

共産党は大弾圧によつて破壊された党組織の再編ならびにその機関の恢復に着手して、四月の末日には早くも全國的の連絡を恢復し、「赤旗」の再刊すらできるよになつた。日本共産党の中央機関紙である「赤旗」につい

て前に少しいもらしたからこですこし補つておく。日本共産党が中央委員会の機関紙をもつに至つたのは党の再組織以來のことであつて、その以前には中央機関紙をもたなかつた。この党中央機関紙は党中央委員会の政策を黨員ならびに党外の革命的労働者大衆にたいして知らしめ、中央委員会にたいする信頼を強めるのに重要な役割を演じ、それによつて党大会からつぎの大会までの間における党中央委員会の活動が大衆の間に強い影響と信頼とを植えつけ、大衆と党とを結びつける上に絶對的な役割をもつものである。この党中央機関紙をもつよになつてから、日本共産党は眞に大衆的な組織運動を充分に進めようよになつたのである。この「赤旗」は三一五事件によつて一時ごく短い期間中絶したが、いまいつたとおり、四月の末に至つて再刊することができ、しかも以前よりも一そう定期的にかつ頻繁に発行するよになつた。この大弾圧のもとにおいても、党の旗印はさらに一そう大衆の間に權威を強める働きをするよになつたのである。

弾圧を免れた黨員および党外の革命的労働者いわゆる同情者、シンパサイザーの同志諸君は、この弾圧および弾圧に引き続きブルジョアジーの白色恐怖的な弾圧の危険を犯して、自発的に工場細胞の再組織のために働き、また破壊された大衆團體の再建のために、團體のいろいろな機関を作るために、また大衆を動員して弾圧にたいする抗議運動を組織するために活動したのである。しかるに社会民主主義者の連中は、右から左まで公然または隠然と共産党の弾圧を支持し、弾圧にたいする大衆的な反対闘争をボイコットした。右翼の社会民主主義者は、日本共産党は天皇制廢止のスローガンをもつて、そんなスローガンをもつて、公然と臆面もなく國家によつて弾圧されるのは当りまえである、と共産党の弾圧が正当であるかのよになつて、公然と臆面もなくブルジョアジーと天皇とにたいして忠誠を誓い、ブルジョア國家の安寧に味方したのである。また社会民主主義



者の中の左翼は、共産党があまりやりすぎた、あるいは共産党は戦術を誤つたといふらして、この流血的なブルジョアジーの弾圧のもとに闘っている共産党にたいしてあらゆる悪宣傳を放ち、このことによつて実質上ではブルジョアジーの共産党檢挙、プロレタリア運動の弾圧を幫助したのである。

かくして、かれら社会民主主義者がブルジョアジーの味方をしてる間に、ブルジョア政府はさらに一步踏みこんで、四月十日に三大衆団体——労働組合評議会、労農党および無産青年同盟、この革命的な左翼団体にたいする解散を断行した。日本共産党はこの三団体解散にたいして、三・一五事件檢挙の引き続きとして大衆的抗議運動を宣傳し、そして暴圧反対同盟なるものの成立を授けた。このときに労農党の内部においては小ブルジョア幹部が、ブルジョア政府の解散命令にたいしては合法的な範囲で再び結党しろ、という敗北的な傾向を現わしたが、わが共産党はこれに対して断乎として闘い、労農協議会なるものをもつて闘うべきことを主張した。労農協議会は、ブルジョアジーの労農党の弾圧禁止にたいして政府の許す範囲で再結党しようとする敗北主義者にたいする闘争として、またすでに当時、労働者農民の政党といわれている無産政党の小ブルジョア性にたいして党がもつていた考えを、労農党にたいする弾圧を機会として表面に現わしたのであり、こういう労農党によつて闘うよりも労働者農民協議会の組織によつて闘うことを主張したのである。

さらに党は、労働組合評議会の解散にたいして直ちに評議会再建のために闘争した。これは産業別合同の運動と結びつけて、産業別評議会の組織を基礎にし、これを強化することによつて、評議会再建のための運動とすることとした。

なお、無産青年同盟の解散にたいしては、わが共産党はまず何よりも共産青年同盟を再建する方針をとり、そ

の方針の実現に着手した。この三・一五の檢挙ならびに四月十日の弾圧以後、日本のブルジョアジーは全く白色テロルの世界を現出したのであつて、この白色テロルのもとにおいて、わが共産党は諸大衆団体の先頭に立つて、しかも少しもひるむことなく、一そり大衆の間に強力な闘争を展開して行つたのである。

日本共産党は、この時代において、荒れ狂う白色テロルのもとにおいて、何より第一に力を注いで日本ブルジョアジーの中國にたいする出兵、帝國主義戦争の危機にたいする闘争を行い、その準備にたいして敢然と闘争した。わが党にたいする三・一五の檢挙は帝國主義戦争の危機にたいするブルジョアジーの絶對的な必要事であつた、という見解が全く正しかつたことは直ちに証明された。四月十日の三団体解散直後の四月下旬に、政府は中國の國民北伐軍が日本の利権の根源地たる滿洲北支那を脅やかすと称して、熊本、廣島、久留米の各師團から混成旅團を編成して出兵し、五月四日の濟南事件をひきおこした。この濟南事件は日本のブルジョアジーが、濟南という山東省の町に住まつている日本の阿片密賣業者および賣春婦を犠牲に供して、中國の軍隊との衝突を挑発したのである。周知のごとくに國民軍の方からは最初から、日本居留民を撤退してもらいたい、そのためには費用を出しても差支えない、といつて日本政府に交渉したのであるが、日本のブルジョアジーはいわゆる現地保護なる名目のもとに、あくまでも中國の領土内に止まつて勢力範囲を確保しようとしたのである。

濟南事件のために多くの日本人が慘虐な殺害を受けたように、日本のブルジョアジーは盛んにいふらして、「愛國心」を鼓吹して排外的敵愾心の挑発にこれ努めたのである。しかし濟南事件は日本ブルジョアジーが支那領土侵略のために、これを一つの道具に使つたものにすぎないことは明白である。当時の田中内閣は臨時議会で、おいてこの濟南事件を口実として直ちに三百万円の子算を要求し、さらに名古屋の第三師團、廣島の通信隊、各務



ヶ原の飛行隊などを中國の領土に送つて、國民軍と對戦せしめることにした。田中内閣はすでにそれまでに、四千万円を中國の武力干涉のために消費し、数千の兵を中國の領土に送つて砲火の危険のもとに曝し、さらにまた一億五千万円の「剰余金」を中國侵略のために自由に使用するという、フトブトしい帝國主義的政策をやつたのである。

こういう日本の中國侵略は一方においてアメリカとの対立を激化した。当時アメリカの政府は、日本の満蒙における特殊権益なるものを認めない、日本の中國出兵は不法である、として公然と抗議した。また日本政府も当然アメリカの抗議を予想していたので、この抗議にたいしては一步も退かずにアメリカとの戦争の決意を固め、中國の領土を舞台として戦争を断行しようとするばかりになつていた。このことを日本共産党は直ちに内外の情勢から見ぬき、日本帝國主義者の帝國主義戦争にたいする周到な準備、陰謀を摘発して、プロレタリアおよび農民に帝國主義戦争に反対して立つべきことを訴えた。すなわち、わが党はその当時党の種々の機關を通じて、日本の帝國主義者たちがアメリカとの戦争を具体的に用意しつつあることの実際の証據の一端を握つたのである。東京砲兵工廠においては六百五十名の臨時工が働いて武器の急速な製造に取りかかつたし、福岡の渡辺鉄工所は水雷の発射管の製造を急に開始し、また中島飛行機製作所、名古屋の内燃機工場、川崎造船所などでは俄かに陸軍の飛行機五百台の製造を開始した。こういう極めて僅かな事実によつても戦争準備の一端が証明されたのである。

党はこのときにおいて、全組織の破壊的な満身創痍の状態のもとにおいてもなお、この中國にたいする日本帝國主義の出兵に反対する闘争を大衆の先頭にたつて闘つた。まず中央機関紙「赤旗」をはじめその他の機關によつて、中國を侵略する日本帝國主義の戦争にたいして反対した。また日本共産党はこのとき、中國共産党の同志と共同會議を開催し、中國および日本の両共産党の共同會議において日本帝國主義の中國侵略にたいする共同宣言を發した。かくのごとく、中國と日本とのプロレタリアートの前衛が日本帝國主義にたいする闘争を実質的に共同して公然行ふようになったことは、日本の党において従來は極めて微弱であつた國際主義の強い発揚を証明するものであつて、実に中國と日本のプロレタリアートの友愛的提携の模範を示したものである。

なお、わが党は汎太平洋労働組合會議の日本の對支干涉にたいする闘争の訴えに應じて、労働組合評議會その他の労働組合を動かし、對支干涉にたいする大衆的な闘争を組織することをつとめ、この闘争は戦争反対同盟の形として現われた。党はまた全國の主要都市において、あるいは演説会あるいは合法的または非合法的な示威運動を組織することに努力し、常にその先頭に立つて闘つてきた。しかし、わが党は決して一般的な文書や集会の演説などだけでは満足せず、日本の出征軍隊にたいして、ブルジョアジーの利益のためにする戦争に反対せよと執拗に宣傳を行つたのである。洛南占領とともに第四次出兵が決定し、名古屋の第三師團が派遣されるようになったとき、わが黨員ならびに党の影響下にあつた革命的労働者わけても年若き青年戦士たちは、第三師團にたいして、自己犠牲的に最も勇敢に戦争反対の宣傳運動をやつた。名古屋の金の鯨鋒のもとで、戦争反対の「不穩」文書が到るところから出たことだけでブルジョアジーは驚愕して、遂に治安維持法を死刑法に改めたのである。当時の司法大臣は治安維持法を改正して死刑法にしなければならぬ理由として、共産党はいまなお絶滅どころではなく、支那にたいする戦争に邪魔を入れて困る、帝國軍隊の出征を妨害して困る、という理由を並べた。これによつても明らかのように、当時の日本共産黨員ならびに革命的労働者、わけても青年の戦士諸君が自発的



に決死的に日本帝國主義の出兵にたいして闘つたことは実にめざましいものがあつた。さらにわが党は、中國への軍隊の輸送や武器の輸送を止めるために、労働者にたいして中國への武器や軍隊の輸送を妨害せよと宣傳し、また実際に海陸交通労働者の間に組織的な活動を開始したのである。

わが党が三・一五の大打撃に引き続き官憲の追及と白色テロルの荒れ狂うものにおいて、かくも日本帝國主義者の中國侵略のための戦争にたいして頑強に闘争したことは、日本プロレタリアートの大きな成長を示すものである。

なお、日本共産党の当時における重要な闘争の一つは革命的労働者を死刑にする治安維持法を撤廃するための闘争であつた。日本共産党にたいして向けられた法律であり、反プロレタリア法律であり、反共産主義法律であるこの治安維持法の改悪にたいする闘争は、もちろんわが党がその先頭に立つて闘うべきであり、わが党は当時の田中内閣が議会で握り潰された治安維持法改悪を、僅か十日後の閣議に再び持ち出して緊急勅令として発布しようとしたのにたいして、激しい闘争を開始した。治安維持法の社会的な根拠は日本ブルジョアジーが労働者農民の骨までしゃぶらなければやまない酷烈な搾取を維持するため、そのためにこそ死刑法に改めなければならぬという欲望はまた日本ブルジョアジーの骨の髄から出たものである。したがつてこの治安維持法にたいする闘争はブルジョアジーの支配を顛覆するための闘争でなければならぬ、ブルジョアジーの支配そのものにたいする徹底的な闘争なしに治安維持法がゆるめられまたは廃止されるような。おめでたい平和的な日を待つわけにはゆかぬのである。こういうことを暴露して、國家権力にたいする大衆闘争と結びつけて、治安維持法の改悪にたいする反対、撤廃の闘争を行つた。なお、これを中國にたいする日本の出兵侵略反対の闘争、対支非干渉の闘争と密接

な関係をもたせ、両者を相結合させて闘争を展開した。またわが党は「共産党事件」の犠牲者の即時釈放のスコーガンを大衆の中に掲げて、大衆的に「共産党事件被告釈放運動」を組織した。

かくごのとく、治安維持法にたいする闘争および「共産党事件被告」の釈放のための闘争の先頭に立つて、労働者農民の革命的運動を進めていつたが、これにたいして社会民主主義者たちは、社会民衆党、日本労働党そのほかいわゆる労働一派に至るまで、この治安維持法にたいする闘争を陰に陽に拒んだ。かれらが治安維持法改悪にたいして一應、反対の言葉を述べたことは確かである。けれども、それはただ、治安維持法の改正を緊急勅令をもつて行わんとすることはいけない、それは明らかに憲法を無視し、議會を否認する非立憲的な行爲だ、議會を召集する手続きの期間があるのにこれを避けて緊急勅令によつてやるのは議會否認も甚だしい、というだけである。また日本共産党は「思想的犯罪」である、「思想的犯罪」を処罰し防止せんとすることは、かえつて社会に悪影響を及ぼすものだ、または思想運動にたいして徒らに極刑をもつて臨むのは單に法律の野蠻に止まつてならぬ効果もない、——まずこんなところで、さんざん日本ブルジョアジーにたいして親切な忠言助言をしている以外には、治安維持法にたいする實際闘争を一つもしなかつたのみでなく、大衆なかんずく自分の支配のもとにある大衆が反対闘争に参加することを、防ぎ止めるのに必死になつていた。

この期間における重要な闘争の一つは第五十五臨時議會にたいする闘争である。ここにおいては、対支出兵の三百万円の予算に反対することはもちろん、中國に派遣した軍隊艦隊を直ちに召還する要求を掲げて迫り、また治安維持法の改悪に反対してその撤廃を要求し、共産党の檢挙および三団体解散の不当にたいして議會に大衆の闘争を向けるように活動した。また議會に尾崎行雄が三大國難決議案なるものを提出したが、わが党は帝國主義



戦争の危機ならびに共産党の成長に脅威されたブルジョアジーの恐怖をそのままに現わした最も下劣陰險なる御用代辯であるとして、まづこうからこれに反対した。さらにまた、この議会提出の大典予算をわち天皇の即位を祝うだけに七百万円を國民から搾りあげる大典予算に反対した。大典において、いわゆる無産党議員がいかに見事な裏切りを暴露したとか。かれらはシルクハットをかぶり燕尾服をつけ、豊明殿に招かれて御馳走酒によつぱらい、千鳥足で退出する写真をブルジョア新聞に出された。この最も見事な裏切りをわが党は容赦もなく暴露弾劾して、かくのごとき無産党の議員なるものはけつしてプロレタリア農民の利益を代表するものではない、それどころかこれを裏切るものであることを大衆の前で痛烈に攻撃したのである。ブルジョアジーの犬であるこれらの社会民主主義者たちは、すでにすでに十年前も前から労働争議や農民争議において、資本家や地主の餌につられてストライキや農民争議を資本家や地主に賣つていたのだ。かれらがブルジョア國家の労働者農民抑圧機関の一つとして働いていることは、かれら自身の言動によつて明白に大衆に示されていたものであつた。

農民運動の方面においても、わが党はこの白色テロのもとで農民の間に生じた一部の動搖や、指導者の右翼化などにたいして闘争し、右翼的な農民組合の合同運動に反対して、各地方の農民の地主ブルジョア政府にたいする現実の闘争によつて合同に進むべきことを主張したのである。さらに農民の間に革命的思想を宣傳することに努めた。

東京電燈の争議、社外船の人員整理に対する闘争をわが党は指導した。当時行われた北海道における選挙および富山における電燈争議にたいしてわが党は大なる支持を與えた。

三・一五の大弾圧からその年の秋に至るころまでの間において、さらに党の発展が進むにしたがつて、いわゆ

る八月檢挙、十月檢挙と引き続いて檢挙を受けたが、治安維持法發布、死刑法發布、警察暴力團の荒れ狂ふ白色テロ、かかる条件のもとにおいても政治的には断然と一步も退かず、常にプロレタリアートの先頭に立つて闘争したことは、日本の党が未だかつてなかつたほどの強い根をもつたことを証明するものである。このとき、わが党が政治的に一步でも退いたなら、再びかの一九二四年の解党の悲惨を繰り返したかも知れないが、すでにわが党は断じてそうしたことができないほどに成長していた。かくのごとき、いままでも日本に類例のない大弾圧と白色テロとの中で、党はコミンテルンの正しい指導のもとに一步も退却しないのみか逆に進出して行つたのである。かような日本共産党の白色テロのもとにおける進展とその成功は、客観的には日本の資本主義がもはや維持しがたくなつてきつたことと、その中で労働者農民大衆が左翼化し革命化していることがもちろんその条件ではあるが、さらに重要なことは、日本共産党が政治的に正しく頑強に闘つて公然と大衆の間に政策を掲げて活動していることであつて、この、党の主観的な条件があつて初めて、自発的に労働者大衆が党の再建擴大のために闘うことができたのである。党がその機関紙をもつて公に政策を發表し、その他あらゆる非合法的な機関および諸集会などの組織によつて独自の活動を公然と大衆の間に行つてゆなかつたならば、いかに客観的条件が有利であつても、かくのごとき白色テロのもとにおける、党の再建とその擴大強化がかくも速やかに進むことは不可能であつたらう。かような状態は二七年以前のわが日本共産党においては絶対に見ることのできなかつたところであつて、この期間における日本共産党の活動の成果を見ると、三・一五以前において獲得しはじめた工場における組織は、この時期においてはとくに大工場経営に基礎を獲得することに発展し、ここに党の最も強い根城を据えることができたのである。またこの期間における対支干渉にたいする闘争、戦争にたいする闘争は、党の國



際主義の発揚を非常に高めたものであつて、これは重要なことであり、これなしに党は発展しないものである。社会民主主義者にたいする闘争は、かれら社会民主主義者の翼下にある大衆に耳を傾けしめ、右翼社会民主主義者の根城になつている総同盟その他の右翼組合の中にすら、わが党の黨員ができ党のフタクションができ、右翼組合内における革命的反対派が生れるに至つた最も重要な出発点を與えたのである。

最後に、この期間におけるわが党とコミンテルンとの結合についてであるが、はげしい白色テロルのもとにおいても、あらゆる危険を犯して、従来よりも一そうコミンテルンとの連絡を強め、種々の手段を講じてコミンテルンの指導と結びつくことに努力し、従來の數倍もコミンテルンとの指導的結合を強めた。これは五月四日のいわゆるコミンテルン政治局の日本問題に関する決議、党活動にたいする重要な批判を含んだ決議、そのほか有力なコミンテルン指導者の助言指令が従來になく頻繁にかつ迅速にわが党にもたらされ、わが党の活動を絶えず正しく指導してくれたためである。こゝういう状態にまで到達したことはまた大なる成果の一つでなければならぬ。

こゝういう風にわが党の発展が続けられてゆく間に、コミンテルン第六回世界大会が開かれ、劃時代的な重要なコミンテルン綱領を初めとして重要な諸テーゼが日本にもたらされ、日本の党のボルシェヴィキ化の運動にたいして一大拍車を與えることとなつてきた。これからコミンテルン第六回世界大会の意義について述べることにする。

## 六 コミンテルン第六回世界大會以後

### 1 コミンテルン第六回世界大会（二八年テーゼ）

コミンテルン第六回世界大会は二八年七月から九月の初めにかけてモスコイで開催された。この大会が開催されたころの情勢を見ると、全般には國際資本主義の一時的相対的安定も各方面から新たな危機が暴露されて、いわゆる戦後資本主義第三期に入つたときであつた。そして中國大革命をはじめ世界到る所の植民地、半植民地に革命運動が燃えあがり、帝國主義世界を揺り動かしていた。また、全世界にブルジョアジーの白色恐怖が荒れ狂い、ファシズムおよび社会民主主義が労働者階級にたいする直接の徹底的な敵として立つており、ファシズムと社会民主主義とが結合して社会ファシズムはすでに争いがたい形で結成していた。これにたいして各國のプロレタリアートは、ブルジョアジーおよび社会民主主義者との激烈必死な闘争を行うこと、自己の陣営内における右翼日和見主義と闘争すること、これらを緊急避くべからざる任務としていた。こゝういう情勢のもとにコミンテルン第六回大会は開催されたのである。

この大会は一九二四年の第五回大会らしいの四年間における國際革命運動の經驗を集積した上にひらかれた大会であつて、また最初のプロレタリア世界綱領たるコミンテルン綱領を討議決定すべき重大な大会であつた。この重大なコミンテルン世界大会にわが日本共産党は、かの三・一五檢挙という打撃にもかかわらず、數名の代議員の派遣を執行した。コミンテルン世界大会に日本國內から數名の代議員が出席したことはいままでにないこ



とであつて、コミンテルン大会の発展と日本共産党の発展をものがたるものである。

この大会では、第一にコミンテルンの綱領、第二に國際情勢とコミンテルンの任務に関するテーゼ、第三に國際情勢の中心である帝國主義戦争の危機に関するテーゼ、第四に植民地革命運動に関するテーゼ、最後にソヴェト同盟の情勢に関する決議が議題にのぼつた。こういう重要な諸決議にたいして、全世界の隅々から集まつた代議員は長時間の熱烈な討議を行い、これらすべての劃時代的意義のある綱領やテーゼが決定された。日本の代議員團ももとより全世界の同志たちに伍して積極的にこの討議に参加して、これらの綱領ないしテーゼの作成に力を盡したのであつた。

大会は日本の革命運動の発展にたいして注意を拂い、その國際情勢に関するテーゼの中で、日本共産党は何よりも第一に共産党自体が大眾党となる途を辿らなければならぬことを強調し、さらに、労働組合の獲得のために闘争すべきであり、また農民組合にたいして指導を強めなければならぬといつてゐる。

この大会で決定された日本問題に関する決議においては、何よりも第一に党の大眾化、黨員の大眾的吸収（現実目標として五千人の黨員獲得）、工場細胞の確立強化とくに大工場の獲得、地方委員会わけでも大工場の密集している大工業都市における大都市委員会の確立、およびそのイニシアチヴを發揮した活動の重要性を強調してゐる。労働組合運動の方面においては、労働組合が共産党とともにプロレタリア運動にとつて非常に重要な組織であることをさらに力説して、評議会の再建のための闘争に力を盡すこと、青年および婦人労働者の獲得、工場委員会を基礎とする労働組合運動、とくに大工場の獲得、最後に改良派労働組合内における革命的反対派の結成、これらの点を強調してゐる。

合法的無産政党の問題に関することはごく簡単に述べておく。合法的労働政党なるものについては、單に日本だけでなく南米やインドやブルガリヤにおける材料をも集めて、コミンテルンはその植民地的革命運動に関するテーゼの中で、かくの如き労働者や農民や小ブルジョアの二階級以上の融合の基礎の上に立つた党は、ある一定の時期では革命的性質をもつことがあるけれども、時期の経過とともに容易に小ブルジョア党となることを明白に指摘して、共産党はかくのごとき党を作るべきではないと規定してゐる。これに基づいて、日本においても労働党のごときは当時までは多かれ少かれ革命的役割を果してきたが、労働党およびいわゆる左翼政党にたいして、共産党はその根本的な大眾的性質を明らかにし、共産党のみがプロレタリアの党であり、労働者農民の唯一の味方であることを強調しなければならぬと述べてゐる。

また農民運動の方面では、大土地所有の没收と土地を農民へとのスローガンのもとに宣傳すること、そして従來のような小作農の地主にたいする小作組合団体だけではなく、廣汎な貧農の大眾闘争組織たらしめなければならぬこと、そして共産主義者は農民暴動の指導に当らなければならぬことを強調してゐる。

最後に党の宣傳煽動の方面に関しては、革命的闘争に導く平易なマルクス主義レーニン主義の線にそつた宣傳文書による大衆動員、大衆的示威運動、ブルジョアジーの決定に拘りなく合法的非合法的に強行する大衆的示威運動の必要、重要な工場から直接に街頭へ大衆を動員することの重要、これらについて強調してゐる。かかる意味の日本問題に関する決議がこの大会において決議された。このコミンテルン第六回世界大会の決議がこの年の秋から冬にかけて日本に到着し、いかにこの大会の影響が日本共産党の新たな躍進の一步に拍車を加えたかは前に述べたとおりである。



この時における日本の一般情勢を見ると、半年前に日本政府が三・一五の檢挙を必要とした諸情勢はいささかも緩和されずに、かえつてますます尖鋭化しつつあつたといえる。まず日本帝國主義の軍隊は依然として中國の一部を占領しており、また日本、アメリカ、イギリスの対立はますます高まりつつあつた。中國民衆の日本帝國主義の侵略にたいする猛烈な反抗によつて日本軍は日々に不利に傾き、しかもそのために世界の帝國主義戦争の危機が緩和されるどころかますます進展してゆく状態にあつた。日本ブルジョアジーはかくのごとき帝國主義戦争の準備と労働者農民にたいする彈圧とを隱蔽しかつ有利にするために、莫大な國費を投じて即位大典のお祭騒ぎをやつた。日本政府はこの大典を無事に行うために、その警備と称して数千名の労働者農民の戦士を逮捕投獄してあらゆる蠻行を加えた。実に即位大典は労働者農民の血によつて祝われたのだ。治安維持法の死刑法への改悪は勅令をもつて強行されており、日本の國家機關のファシスト化はますます鋭く露骨となつていた。実に日本はファシスト・イタリヤ及びポーランドと相並んで、世界屈指の白色テロ國となりつつあつたのである。

三・一五事件と三團體の解散とは一時的に労働者の闘争を減退せしめた。しかしすでにこの年の六月頃には、改良派幹部の抑圧を跳ね返してストライキは盛んに起り、ダラ幹の抑圧を破つての社外船のストライキが勃発し、七月八月には東京市電の争議が起つた。三・一五と三團體解散とによつて一時障害を受けて日和見主義の擡頭をもたらした農民の闘争も、再びさらにいよいよ深刻化しつつあつた。当時のブルジョア新聞が明らかにいつているがごとく、この労働者農民の闘争が一時抑えられて減退したのは、共產党にたいしてブルジョアジーが加えた彈圧のお陰にはかならぬ。このことはブルジョア新聞が明白に告白しているのだ。また一方、社会民主主義者の醜惡な裏切りは白日のもとにさらされ、かれらが最も下等なブルジョアの番頭であることは大衆の前にます

ます明らかになりつつあつた。

こゝろ情勢のもとにおいて、日本共產党はコミンテルンの重要な政治決議の精神に基づいて、党大衆化、党ボルシェヴィキ化のための闘争に躍進したのである。

## 2 コミンテルン第六回大会から四・一六まで

コミンテルンの第六回大会の諸決定が日本の党にもたらされてから四・一六の大檢挙に至る間の、日本共產党の重要な活動について述べる。この期間は短いけれども、この間は党の偉大なる発展の時期であり、重要な諸活動があつた。

第一にわが党は、このコミンテルン大会の國際情勢に関するテーゼが日本の党について強調した、日本共產党自身が大衆党たるべき道を辿らなければならぬ、という方針をまず実行に移すために活動した。ちようどこのときは、一方においては三・一五以來の數次に互る檢挙によつて党は打撃を被つており、恢復の道につくかと思ふとまた新たな檢挙を被つた。そしてこの新たな檢挙と絶えざる追求とのもとにおいて、少しもひるむことなく、全党員と革命的労働者とは党をまもり、党の一そのの擴大と強化のために自己犠牲的に活動したのである。が、しかしやはり、この數次に互る檢挙の打撃は争うべからざるものがあつた。しかるに他方においては、労働者大衆の革命的圧力は、いよいよ高まるばかりであつた。そこに、日本共產党の組織力と大衆の革命的圧力の高潮との間に大きな不均衡状態が生じて、党はややもすれば孤立する危険に絶えず脅かされてきたのであるが、全党員の熱心なる活動と第六回世界大会の決定に基づき新しいより強い大衆化のための闘争によつて、日本共產党はこ



の労働者大衆の革命的圧力を自己の力として導くことができるようになった。

党は大衆化のための闘争として第一に、共産党こそが労働者階級の唯一の党であることを精力的に宣傳した。とくに当時の新党準備会（三・一五以後、四月十日の政府の大弾圧をもつて解散を命ぜられた労農党の後身たる新党準備会）および労農同盟（新党準備会が結党を遂げた十二月の末における政府による禁止以後、政治的自由獲得労農同盟として再組織された同盟）等の左翼労農政党的革命的エネルギーを自己の組織の中に吸収し、そしてわが党の大衆化のための重要な一つの力とする方針を現実にとつた。

わが党はもちろん、党の大衆化を單に量的に黨員数をふやすこととしてそれのみに没頭していたのではない。そのためにも労働者と農民の日常の利益を擁護し伸長するための闘争に熱心に参加してその先頭に立つて闘い、改良主義的集團である社会民主主義政党的裏切りにたいして闘い、ブルジョアジーと社会民主主義者とにたいする闘争によつて、第一には工場の中に第二には貧農の結集した農村部落において活動的分子を獲得することに努力した。

また党はとくに、大工業都市の重要工業方面と軍需産業の大工場との労働者を獲得するために、実に執拗な計画的闘争に着手した。わが党のこの組織活動に接して、革命的労働者が従来は十分に發揮されなかつたイニシアチブを發揮して、党の政治的組織的活動に参加するようになった。

党はそのために、工場農村に党の細胞を組織せよ、というスローガンをかけ、すでに十二月の初めに再刊した党の中央機関紙「赤旗」に党大衆化のアピールを明らかに声明している。労働者大衆、とくに労農同盟の中にあつて今日まで共産党の影響のもとに革命的な政治闘争を遂行してきた革命的労働者大衆は党にたいする信頼

をますます強め、党の門前にはひしひしと多数の労働者が押しかけたという実情にあつた。

ここにおいて、これら党の面前に迫っている大衆を急速に組織の中に獲得する必要に迫られたために、党中央委員会は一九二九年二月に党外の革命的労働者大衆にたいして自発的に日本共産党の細胞を組織すべきことを訴えて、新しい黨員の集團的大衆的加入の途を開いた。

日本共産党の党外労働者大衆にたいする自発的党組織活動のアピール、黨員の集團的参加の途を開いたことは、この時のような特別な事情のもとでは必要不可欠であつたと思う。実際にまた、このアピールに應じて、従来労農党の中に閉じこめられていた革命的な大衆は、工場においてまた農村において、自発的に活動するためのグループをつくり、党の組織者の手がそこに及んだときには、いままでに多く見られた單に個人の党加入ではなく、一定の目標をもち一定の方針のもとに集的に組織的に活動して党の組織を待ち構えている集團的革命的労働者の團體があつたのである。かれらは党のその後における、なかならず四・一六の大檢舉以後における党の再組織のための絶えざる新しき源となつた。

もちろんわが党は、強烈苛酷な弾圧法であつた治安維持法が遂に死刑法にまで高められ、日本のブルジョアジーの白色恐怖がこの治安維持死刑法を先頭として全國に荒れ狂つている状態のもとにおいては、とくに鞏固なる非合法組織の必要を認めていたのである。強大なる建築物は必ず鞏固なる地下組織の上に築かなければならぬというコミンテルンのわが党に與えたところの指針は、我々がこういう情勢のもとにおいて最も注意しなければならぬことである。

わが党はこのようにして党活動の方面においては党の大衆化のための活動を進めていつたのであるが、この



運動の中においてわが党が特別に注意を拂つたことは、大工場に組織運動を集中するとともに、党の各階級における指導機関に、労働者要素わけても実際に工場の中に働いている就業労働者をひき上げてつかせるということ、従来よりも一そこに努力を向ける方針をとつた。実際に、工場で働いている革命的労働者を党の指導機関に引き上げることが、普通考えられるところでは多くの困難を伴うのであるが、それらの困難を押し切つて、してできるだけ工場から放さずに、工場で働いている労働者を党の指導の旗のもとに引き上げることが絶対に必要であると認めて、この方針の実現に努力した。

また一方においては、日本共産党の方針政策が中央機関紙「赤旗」ならびにその他の種々の党文書および全党員の組織的活動によつて廣く大衆の間に知られ、大衆が党の政策方針を支持し党に参加しようとする熱がますます高まつてきた。と同時に、絶えず小ブルジョアの層からプロレタリア階級に落ちこんでくるところの分子、これらがやはり党の周囲において党の小ブルジョアの同情者としてますます豊富に現われてきていた。これら小ブルジョアの同情者のほかに、わが共産党の眞に尊重する同情者はいうまでもなく工場労働者、産業労働者である。党の政策に賛成し党を支持し党に共鳴してはいるが、なお党の組織に参加するには至つていないこの労働者の要素、これこそ、共産党が眞に同情者として尊重するものである。いうまでもなく党員の意識的な積極的な働きかけによつてこの同情者の労働者は速やかに党に獲得しなければならぬものである。しかるに小ブルジョア同情者は絶えず党の周囲にあつて、情勢によつては極めて革命的な左翼的な言辭を口にし党を支持することを表面上強く現わすが、大なる困難に遭遇したりあるいは情勢が變つたりすると忽ち小ブルジョアの本性を暴露し、革命的な左翼的な非常に飛び上つた言動のその裏において忽ち右傾化した動搖、甚だしきは裏切り等を現出するに至

るのである。こういふ小ブルジョア分子、これらを一口にシンパサイザーとして、眞に共産党の尊重するところの革命的労働者の同情者とは嚴密に區別せねばならぬことを痛感したのである。これらの小ブルジョアの同情者は、とくに党の力が客觀的情勢に對應して比較的小さく弱い場合には、直接に党の方針に影響を興え、労働者の眞の革命の方針を妨害する危険が十分にあるものである。

現実において当時の二三の例をとるならば、東京市会の選挙戦において、労農同盟を中心として組織された選挙同盟が、「労働者無産市民の市会をつくれ」というスローガンを掲げた。これについては後に言及するが、これは党の周囲にあつて党に接近し、日本共産党の方針のもとに活動しているつもりでいた小ブルジョアの同情者たちが、この露骨きわまる小ブルジョアのスローガンを採用せしむるに至つたのである。

そのほか、検閲改正同盟のごときも、わが党は検閲制度の撤廃のスローガンを掲げて、一つの大衆的組織をつくつて闘わしめる方針をとつたのであるが、しかし党の比較的弱い力の周囲にあつた小ブルジョア分子に大なる影響を興え、検閲制度改正期成同盟の小ブルジョア的な動搖的なスローガンを出すに至つたのである。そういう種類の小ブルジョアの同情者にたいしては、わが党はその党外の諸活動において演ずるところの多かれ少かれ進歩的な役割を見逃してはならないと同時に、党内における重要な諸活動にこれらの小ブルジョアの同情者の影響の侵入を防ぐためにあらゆる手段を講ぜねばならぬ、という方針をとることしたのである。

これは四・一六の検査以後においては、もちろん闘争の発展とともにますます重要な意義を帯びてきて、以上のような方針が実現されたと思うが、当時においては、ただそういう方針をとつただけであつて未だ十分に実現の緒についていなかったといわねばならぬ。



しかしこういふすべての情勢は、やはり共産党にたいする大衆の廣大な信頼支持が、日本共産党をますます大衆党となす見通しを証明する、偉大な一つの歴史的進行を物語る事実であると考へる。実際においても当時のわが党の大衆化の展望は極めて豊富に開かれていたのである。

わが日本共産党が、かくのごとく大衆化の途を辿るに至つたのは、労農党の新党準備会、その後には労農同盟となつた新党準備会が密接に関連してゐるのである。そこで、わが党が新党準備会、後の労農同盟にたいしてつた方針について一言する必要がある。二八年の春、労農党の解散直後、労農党の内部にあつた小ブルジョアの指導者の現わした激しい動搖、それからわが党の力強い働きかけによる活動、新党準備会内部に強まつてきた労働者の革命的潮流、これらについては詳しく述べぬが、いわゆる百度解散せられるならば百度結党するという百度結党主義が、その秋になると比類なき敗北的な合法的結党方針に引つくり返つてしまつた。これは新党準備会の小ブルジョアの本質をみずから暴露したものであつて、「労働者農民の政府」というスローガンを撤去し、新党は大衆党であつて共産党ではない、新党は社会組織および経済組織の变革を目的とするものではない、というような未曾有の右翼主義、日和見主義を露出した。これは階級闘争の激烈な発展のもとにおいて、共産党でないところの小ブルジョア党がその本質を暴露したものだ。

共産党は新党内に擡頭したこの小ブルジョアの日和見主義にたいしてまつころから反対し、これと反対に、当時の新党準備会内にあつた革命的労働者の潮流を支持して、「労働者農民の政府」というスローガンを撤去することなしに新党準備会は結党に向つて邁進すべきことを訴へて、この運動を支持したのである。むろんわが党はこのときにおいて、コミンテルン第六回大会において採用された植民地の革命運動に関して規定されたテーゼにあ

る労働者農民政党内に於ける規定、すなわち労働者農民等の二階級以上の寄合世帯の上に築かれたところの政党内は、たとへ一時的には革命的性質を帯びることがあつても、時期の経過とともにすこぶる容易に小ブルジョア党に轉化するものである、という規定に立脚して、プロレタリア党はただ共産党のみであること、すなわち労働者農民の二つの異つた階級の寄合世帯であるところの労農党、一般に労働者農民の政党内は我々の眞実の政党内であるべきものではないことを解明し宣傳することに努めた。それと同時に、その宣傳だけではこの大衆のほうはいたる新党準備会の革命的結党への潮流を喰ひ止めることができないのみでなく、これを喰ひ止めようとすることは大なる困難と事実上における後退をもたらすという見地からして、わが党と大衆党との間に存在する事実上のギャップを認め、むしろそうした革命的結党への潮流を支持しこれをリードして、この流れを共産党の大衆化のために利用しようという方針をとつた。大衆はこの時も單に宣傳のみによつては一般の労農政党内の傾向を捨てさせることはできない、わが党に一挙にして参加することはできない。この革命的結党に向つて進んでゐる大衆にその結党運動を押し進めてブルジョア政府と衝突させ、かれら自身の経験によつて、ブルジョアジーの國家権力と抗争しうる眞の党はかくのごとき労働者農民の寄合世帯の党ではない、そういう党には求むることはできない、共産党でなければならぬ、ことを学ばしめること、これがその当時において我々のとつた根本方針であつた。

この方針は、十一月初頭にわが党が受けた檢挙によつて、それを発表することになつて「赤旗」再刊号が發行不能となつたため、直ちにこれにかわる宣傳方法をとつたけれども、この間に多少の困難を生じたことは争われぬ。しかも結局において、この方針はそのち当時の労農党にたいする党の根本方針として革命的労働者の圧倒的支持を得て、遂に十二月二十五日の結党大会となつたのである。わが党はこの結党大会を共産党自身の



大衆化のための宣傳舞台として、最大限に、あるいは合法的にあるいは非合法的に利用したのである、そしてその限りに於いて成功を収めた。

新党準備会の結党大会はもちろんブルジョア政府の解散を喰つたが、わが党はまっさきにこれにたいする抗議の運動を起し、共産党の大衆化、共産党のみがブルジョアジーによつて解散しえざるところのものであることを廣く大衆に知らしめるとともに、従來の新党準備会運動に熱心に活動した労働者にたいしてわが党に参加すべきことを訴え、同時にこの廣大なる労働者と農民の左翼的エネルギーを労働者農民の同盟の組織に導くために活動したのであつた。これをまず、最初の労農同盟、新党準備会の結党大会の強制解散にたいする抗議の意味において、抗議闘争の一つの組織として政治的自由獲得労農同盟という組織に再組織し闘争を遂行させる方針をとつたのである。しかし労農同盟はその成立後間もなく極めて急速な経過のうちに、一方において内部に残つていた小ブルジョア分子の動揺と日和見主義と政府にたいする屈服の傾向が、同盟をして再び同じ労農政党内に固定せしめる方向となつて現われたが、同時にその他面では、労農同盟のブルジョア政府にたいする闘争の中において、労農同盟の運動を共産党の大衆化の目的に向けられなければならないという方針のもとに自発的に活動するに至つた革命的労働者の分子があつた。

この二つの矛盾する潮流は、わが党が是非ともここで徹底的に解決しなければならぬものであつた。わが党の陣営内においても、党の影響下にある左翼労働組合の陣営においても、また革命的貧農の間においても、なお舊い労農党にたいする愛着は残つていたのであつて、プロレタリアートの党はただ共産党あるのみ、ということにたいしてなお遲疑の念があり、共産党が大衆党となることにたいする鉄のごとき確信が缺けていた部分があつた

ことは争われぬ事実であつた。これは、共産党が第一の党であるには相違ないが、しかしながら現在の日本のごとき事情のもとにおいては、この共産党を支持し共産党にたいして絶えず新しい力を送る源たるべき党の貯水池となり、また党と大衆との間のベルトとなるべき一つの労働者農民の政党が別に必要である、という空氣が濃く存在していたことによつてもわかるのである。共産党のほかになお別個の特殊な政党が必要であるというような考えがいささかでもあつたことは、当時のごとく階級闘争の發展したもに於いては、明らかに党の大衆化にたいする矛盾を証明するものであり、その骨髄において小ブルジョアの動揺であると断言すべきである。

かかる動揺は、プロレタリア階級党がかの一握りの金融資本家たちの自由に操縦するブルジョア政党の分派とは違つて、プロレタリア大衆の下から統一された絶対に單一集中的に組織された共産党だけであることにたいする充分な確信のないことを証明するのであつた。わが党はかくのごとき動揺や不確信を清算するため労農同盟の革命的解体を断行しなければならぬという決定に到達したのであつた。現在の労農同盟は他のいかなるものにも変化さるべきではなく断乎として解体させねばならぬ、しかしこの解体たるや労農同盟内の革命的エネルギー、革命的労働者の要素を日本共産党に組織することなしには行われぬ、これなくしては労農同盟の解体はできない、労農同盟の革命的勢力を日本共産党に組織することによつて労農同盟は解体の途につくことができる。——これが三月から四月にかけて党中央部の會議において最後の、従來の多くの經驗を綜合的に批判した結果であつた。

この解決のためには、従來ながく共産党ならびに左翼内にあつた共同戦線政党——一般に労農政党といわれている共同戦線党に関する従來の見解を清算する必要があつた。これらの決定は四月の檢挙前に到達したわが党の



見解であつて、これは党のごく少数の者にしか当時発表されていなかったのである。しかしこれが当時においては最も重要な意義をもつものであることを強調する必要がある。

日本におけるいわゆる共同戦線党なるものは最初わが共産党が主張したものであつた。一九二四年から二五年にかけて当時の日本共産主義グループの政策は、大衆とくに農民大衆を獲得するために労働者と農民とのブルジョアジーと地主とにたいする廣大なる反対闘争同盟組織が必要であるとして、無産政党組織運動の先頭に立つたのである。しかしながら、当時における日本共産党の共同戦線党の主張は、二八年当時において労働一派の主張していたもの、すなわち自己の小ブルジョア的、社会民主主義的、左翼民主主義的政党組織論を掩い隠すために用いていたものは全然別物であつた。

一九二五年十二月に組織されて直ちにブルジョア政府により解散された農民労働党、ここに至るまでの無産政党運動は、その中において日本共産党がつてきた方針のために十分に革命的性質をもつていたのであつた。これは何よりも第一に、当時極めて弱い勢力にすぎなかつたとはいえ日本共産主義グループの独自の存在が前提されてきたからであり、それが当時無産党運動がなお革命的性質をもつていたことの一つの重要な条件であつた。これは当時わが党が明らかに主張していたとおり、共産党の大衆獲得の舞台であつた。コミンテルンの二五年一月のテーゼならびに二六年二月テーゼにも、この主張、この意義は明白に現わされている。実際に当時、わが党の無産政党組織運動の過程において、この無産政党をして革命的な行動綱領を採用せしめるために闘争したことは、その後もななく革命的な労働者農民大衆の間に強い記憶となつているところである。その第一回無産政党綱領審議会において、死んだ同志渡辺政之輔がわが党の主張する革命的行動綱領のためにいかに強く闘つたかは忘るべからざる一つの記憶である。なかならず植民地の独立解放という主張を擁護していかに我々の代表が闘つたか、そして社会民主主義の代表者たちが植民地の自治という日本帝國主義にたいする支持援助を意味する恥すべき日和見主義的綱領をもつて我々にたいしたかは、当時の無産政党組織運動における革命的潮流と社会民主主義的潮流との闘争の一つの頂点を示していたのである。

さらに無産政党の組織方面に関する問題については、わが党が最も頑強に主張した大衆団体の連合組織、大衆団体を中心とする組織の主張、すなわち団体中心主義の主張、これによつて無産政党なるものがわが党にとつていかなるものであつたが示されていたのである。無産政党なるものは決してプロレタリアートの党ではない、嚴密な意味においては政党ではない。労働組合、農民組合の諸々の大衆団体を集めて、ブルジョアジーにたいする闘争の渦中において、共産党の代表する左翼の主張と社会民主主義者の代表する右翼の主張とを公然と争わしめ、これらの大衆諸団体の中における公然の共産党の勢力獲得のための闘争舞台とすること、これがすなわちわが党の無産政党組織運動においてとつた方針であつた。当時山川均氏が主張していたごとき、労働者と農民と小ブルジョア、これら種々の階級の間の特異な政治的共同戦線党であるというがごとき見解は、決して当時におけるわが党の無産政党組織運動に関する根本方針ではなかつた。むしろその反対であつたといえるのである。

実際において左翼労働組合はわが党の当時における方針を支持した。かの無産団体評議会なる組織をもつてわが党にたいする支持を表明していたのである。一方社会民主主義者たちが我々の無産党組織運動の方針に強く反対して、これを一個の社会民主主義のもとに統一された社会民主主義政党たらしめんとしたが、これらの運動はわが党にたいする大衆の支持によつて打ち碎かれ、二五年十二月の農民労働党の成立となつたのである。しかし



この成立にたいしてはブルジョア政府は社会民主主義者が失敗したことを自己の國家権力をもつて遂行し、この政党の禁止解散を命じたのであつた。そしてその後における社会民主主義者たちの卑劣な厚顔無恥な無産政党運動の日和見主義化右翼化のために拂つた慘憺たる努力がいかなるものであつたかについては、いまさら詳しく述べる必要がない。いづれにせよ、この農民労働党にたいする禁止を境として、いわゆる無産党組織運動は社会民主主義的政党の組織運動に全く変形されてしまつたのである。

しかし、ブルジョアと社会民主主義者との最も密接な協力結合によつて行われた、この無産政党の社会民主主義化の運動も、決してたやすく運ぶことはできなかった。当時の労働組合評議會を先頭とした革命的諸大衆團體の重要な頑強な闘争によつて、その後の無産政党運動は一般に知られているように、最右翼の社会民主党から日本労働党をへて労働党にいたる分裂をしたのであつた。この分裂後における左翼労働党運動の根底には、労働者農民の闘争同盟という思想が存在していたことは疑いなくであるが、しかし、政党の形にもつていつたところが必然的に、労働党の運動をプロレタリアートのヘゲモニー、眞の革命的導指の下における労働者農民の同盟という正しい途からそれ背馳せしめたのであり、三・一五事件以後、とくにその二八年の秋の合法的屈服的結党方針にそのことが露骨に現われた。この期になると労働党の運動は、それがいかに左翼の側に立つていようと、政党として存在するかぎりには、いやでもおうでも右翼日和見主義に陥り、必然的に社会民主主義政党化する途を踏まねばならぬことを証明したのである。

二八年の初めころは、共産党が唯一の大衆的プロレタリア党であることを強調するとともに、一面においては大衆党あるいは大衆的労働党という名前によつて労働党の存在を一時容認していたが、二八年の後半においては、もはや絶対に容認する余地のないものとなつたのである。すでに一切のプロレタリア政治闘争は最高に集中された強力な共産党にのみ集められねばならぬことは、わが黨員においてももちろんのこと廣く革命的労働者大衆の間に理解されるに至つたのである。

かくのごとくにして、わが党は二九年の三月から四月にかけて労働同盟の革命的解体という方針を決定し、その実行を用意したのであつた。

以上は、わが党の大衆化に関連して、無産政党、労働同盟の問題についてわが党のつた方針を述べたのである。

一九二八年十二月、有名な板舟事件で東京市会が解散されて選挙が行われた。その選挙活動ならびに引き続き二九年三月ころから六月ころまで全国的に挙行された市町村会議員選挙戦、これらの闘争は当時の日本共産党の活動の重要なものであつた。これについてごく簡単に述べたいと思ふ。

日本共産党が全国的に選挙戦に参加したのはその当時まで二回あつた。その第一回は一九二七年（昭和二年）秋の普通選挙による最初の府縣会選挙戦であつた。この時にはまだ党独自の大衆の間における公然たる活動がなく、完全に労働党を通じてのみ選挙戦に参加したのであつた。この選挙戦において労働党をはじめ他の諸無産政党は幾人かの府縣會議員を選出することができたが、しかしこれらの議員諸君は、共産党のある同志をのぞくはかすべて、当選した後に厳格なプロレタリア的政党の統制がなかつたため、当時すでにその大部分は墮落してプロレタリア農民の利益を裏切り、またあるものはそれほどでなくとも、活動の基準がないために無力なものになつてしまつていた。つぎに日本共産党が参加した選挙戦は前に述べた二八年春の國會総選挙——最初の普通選



挙による国会選挙戦であつた。そして二八年末の東京市議員選挙を初めとして引きつづく全国的な市町村議員選挙に臨むに至つたのである。

この選挙戦において、党はまず東京市議員選挙で新たな経験を待たのであつた。東京市議員選挙では、ブルジョア諸政党が「市政浄化」とか「人格本位の候補者」とかいつて大衆を欺瞞しようとしたのにたいして党は正面から抗争した。社会民主主義者たちは「市会を民衆の手に奪還せよ」という一見景氣はよいが、その実は全く小ブルジョア的なスローガンを掲げて大衆を獲得しようとしたが、党はこの小ブルジョアの本質を摘発暴露して闘争した。さらに、当時の左翼の労農同盟を中心として組織された選挙闘争同盟が採用したスローガン——それはさきにもちよつと引合ひに出したが「労働者無産市民の市会の樹立」という日和見的なスローガンにたいしては、それを掲げた選挙闘争同盟が左翼の団体であるにもかかわらず、党は痛烈なる攻撃を放つたのである。そしてわが党は「革命的労働者を市会に送れ」というスローガンのもとに、当時獄中であつた「日本共産党事件の被告」同志唐沢清八を初めとして革命的労働者数名を候補者に立て、これらの革命的労働者の候補者を支持して戦い、また党の東京地方委員会は重要工場を目標としてそこに工場細胞を建設し確立し擴大するために、労働者の日常闘争を激発してその先頭に立ち、党のスローガンを示したビラやポスター類を盛んに工場地帯に撒布し、さらにまた種々の合法的、非合法的な大衆集会を組織することに努めた。

こういう方法によつてわが党は東京市議員選挙に参加したが、その成績は東京地方委員会の同志諸君の熱烈な活動にもかかわらず、結果においては不十分であり、とくに旺盛な煽動宣傳の活動にたいして組織的の活動が不足であつたことが痛感された。

これらの経験によつて来るべき全国市町村会選挙戦にたいする日本共産党の方針を十分に討議決定する必要をみとめた。党の中央部は数次の会合において市町村会議員選挙に対する方針を討議し、四月に最終的に決定したのである。市町村会議員選挙にたいして党が決定した方針の主な点を挙げて見る。

これらの市町村会選挙戦へ参加する原則は、前回国会総選挙に関する党の活動のときに述べたとおりの革命的議会主義の原則、これである。また市町村会選挙戦は国会選挙戦ほどに大きい全国的な強い影響を大衆の間に起しはしないが、労働者および農民とくに貧農の日常の利害に密接なる関係があり、したがつてその意味の強い興味を大衆が感じていた。これにたいして、わが党は第一に地方自治体と称せられている市町村の階級性を暴露すること、すなわち市町村は地方自治体とはいわれてはいるが、実際になんら地方的なものでも自治的なものでもなくて、実にブルジョアジーの中央集権國家の不可分なる構成要素にほかならないものであること、それは資本家、地主、富農が利益を独占して労働者農民の利益を劫掠するための機関であること、その骨の髄まで搾取しなければ承知しないブルジョアどもの投資買収の具として腐り果てていること、とくに大都市は今日においては金融ブルジョアジーの自家薬籠中のものであること、こういうことを暴露する方針をとつた。

我々の方針に對立して、社会民主主義者たちは盛んに地方分権、地方自治徹底、都市社会主義、農村ギルド主義など、さまざまの幻想を大衆の間にふりまき、市町村会に労働者農民の代表が多数を占めさえすれば、労働者農民大衆の自治機関に轉用することができる、という社会民主主義的議會主義的幻想をふれ廻つていた。これにたいしてわが党は徹底的に闘争すべきであるという方針をとつた。

今日のブルジョア中央集権國家の圧制から市町村を救い出すという改良的言辭に隠れた、実は反動的な社会民



主義の主張、これとの闘争なくしてはわが党がプロレタリア階級の利益を代表して市町村会選挙に参加する意義は失われるのである。

当時においても、左翼シンパサイザーの中には、例えば内務大臣や府縣知事らが市町村政に干渉する権利に反対する、すなわち干渉権絶対反対というスローガンを掲げる可能性が十分にあつた。こういうスローガンは前にいつた見地からみて、全く小ブルジョアのスローガンであつて、決してプロレタリアートのスローガンではないことをわが党は大衆に知らせた。そしてわが党はこの選挙戦におけるスローガンとして、各地さまざまな情勢や力関係の相違によつて一律に決めることはできないが、その主要な基本的なものとして、つぎのような体系を必要とすることを決定した。

第一には、労働者農民の日常利益を主張するスローガン、例えば、労働者とくに市町村機関で働いている労働者の賃銀そのほか一切の労働条件の改善、労働者住宅、無料宿泊所、労働者の食堂、浴場、そのほか労働者および貧農のための文化的娯乐的な諸施設の要求、農村においてはとくに帝國主義的重圧を加えられている租税、高利貸による莫大な借金、土地、水利、肥料、そのほかこの種の問題で農村人口中の貧農の利益を主張するスローガン、こゝういふものが必要である。

第二には、市町村の政治に關しては、十八歳以上の男女の公民権、労働者の投票日における公休、労働者農民の投票を事実上において妨害する一切の障害の除去、村長の一般投票、市町村財政なかんずく農村における歳入歳出および村有財産や共有財産の処分にして地主や富農たちの利害に対して貧農の利益を主張すること、ブルジョアおよび地主の掌中にある現在の産業組合、農会等を廢すること、青年團処女会などを自治化すること、そ

のほか、とくに農村における地主的、且那的、官僚的な種々の支配にたいして反対すること、こゝういふ要求を表現したいろいろなスローガンが必要である。

第三には、一般的全国的なスローガンが必要である。労働者農民の言論、集会、出版、結社の自由、團結権、示威運動の自由、治安維持法そのほか一切の反労働者法令の撤廢等で、これはいかなる選挙戦においても全国的一般的スローガンとして大衆の間に宣傳されなければならぬ。

そして最後に、中心スローガンとしては「労働者農民の政府」をとることに決定したのである。つぎにこれらの選挙戦において、選挙闘争のための組織として、党は東京市会選挙戦までの經驗に鑑みてつぎのように決定した。

第一に重要なことは、これらの選挙戦における指導の中心を共産党のみが堅く握ることである。これは党が一切の革命的階級の勢力を編成し集中して、その中心に立たねばならないことを意味する。東京市会選挙戦のときに現われたような、労農同盟と日本共産党との二重の不一致な指導、したがつて小ブルジョアの動搖や、日和見主義を免れなかつた状態を断然と清算しなければならぬ。党が選挙闘争の中心に立つて唯一の指導者として働くためには、まず工場内に、また経営細胞の周囲に大衆的な労働者選挙同盟を組織すること、そして革命的労働組合や農民組合および改良派労働組合の中の革命的反対派を糾合して、工場や農村にこれらの諸団体連合のプロレタリア的な選挙同盟を組織し、わが党は到る所において選挙同盟の仲介となり、またその精神となつて働かねばならぬ。しかしながら、この同盟はいかなる意味でも決して共産党にかわりうるものではない。そのスローガンにおいても、その候補者においても、その他すべての活動においても、この選挙同盟をもつてわが党にかえては



ならぬ。党はあくまでもスローガンその他の活動一切において独自でなくてはならぬ。ただこの連盟を現在の状態のもとでは党の宣傳を有効に大衆と結合するものとしなければならぬ。以上が選挙闘争の組織に関して決定した事項である。

なお、党は二八年の春の国会選挙の経験およびコミンテルンの指導的意見や批判にかんがみて、社会主義の諸党派、いろいろの名前をつけて労働者農民の味方であるように装っているブルジョア代理政党、これらはいかなる意味においても我々の味方でない、これにたいしては断然と階級の敵として徹底的に抗争しなければならぬとの方針をとつた。わが党と社会主義の諸政党との間にはいかなる意味でも妥協協調は許されないが、しかしこれらの諸政党に属している労働者農民の大衆にたいしては、共産党および革命的労働組合が下から、工場から農村から共同戦線を張つてつくりあげてゆく必要を少しも妨げるものではない。このことは重要であつて、工場の選挙連盟やプロレタリア選挙連盟はやはりこの方法で、農村から工場からの大衆の共同的戦線として築きあげるべきである、という方針をとつた。

選挙闘争において重要なことは大衆行動を組織することである。そのために、労働者の経済的ストライキの激発、農村大衆闘争の示威運動、また情勢に應じて政治的ストライキの組織、大衆集会、示威運動、これらが選挙闘争において党が大衆をリードし獲得するために必要であることを決定した。さきに述べたとおり、東京市会選挙戦においては文書による宣傳煽動が盛んであつたのにくらべて、組織的な指導が伴わなかつたために、種々の失敗をした事にかんがみ、とくに工場内におけるまた街頭への労働者の動員、大衆集会への示威運動、家庭に帰る労働者を家庭から誘い出すのでなくて工場から集团的に街頭に動員すること、これらを合法的にだけ

でなく非合法的にも強行しなければならぬことを決定した。また党の候補者はすべてこれらの諸闘争の先頭に立つて大衆の注意と信頼とを一身に集め、とくに街頭の政見発表演説会よりは、むしろ工場内の諸集会や闘争に参加しそれを指導することが重要であることも決定した。

選挙戦における候補者については、党は党の候補者を党の厳格な統制のもとにおくこと、選挙連盟の候補者として立つ者でも、これを選挙連盟の統制のもとに置くのでなくて、党の統制のもとに活動せしめることが必要である。党候補者を出せない地方においては、革命的労働者候補を支持する方針をとつたが、もちろん、革命的な約束は百でも千でもするが、一たび当選しての椅子に坐りこむとかならず階級を裏切るような分子は徹底的に排撃することが必要である。

なお、ブルジョア政党や社会主義諸党派は、投票を正しく行使すべしということをさんざんに宣傳して、大衆の利益は一に投票にかかつていよういふが、これにたいしてはあくまで闘争しなければならぬと同時に、左翼の陣営内に存在する当落は問題でないというような一種の消極主義的傾向にたいしてもやはり闘争しなければならぬ。そして、重要なことは散票をかき集めるのではなくて、工場、農村とくに工場の大衆の組織され集中された投票を獲得することである。これをもつてはじめて投票が眞にプロレタリアートの力のバロメーターであり、党の選挙戦における活動のバロメーターであるといふことができる。「組織され集中された」、これが必要である。

このようにして当選した場合には、市町村会議員はいわゆる選挙区にたいする責任ではなくて、完全に党に責任を負うべきであり、これがまた眞に選挙人に責任を負うことになるのである。この議員の一切の議会的行動は



完全に党によつて統制され、重要問題にたいする発言、提案、演説はすべて党の承認のもとに行うべきであり、党の命ずるところを一切無條件に服従し実行しなければならない。党の議員たるものの重要な任務は、議員の特権を最大限に利用し、必要な場合には特権の限度を踏み越えても、ブルジョア議会の階級性を暴露し、大衆行動を煽動してその先頭に立つてブルジョアジーと戦うことであつて、議員の特権を利用して共産党およびそのスロガンを公然と大衆の間に宣傳煽動することである。

以上、要目だけを挙げたが、こゝろ趣意のもとに、市町村議員選挙にたいする方針を決定し、その実行に移らうとしていたのであつた。

四・一六検査までにおける党の活動の重要なものは多々あるが、それらはここでは述べないこととする。

ただ一つ、三・一五らしい二八年、二九年とひきつづいて依然として荒れ狂つているブルジョアジーの白色テロとの闘争について述べる。これはいかなる闘争においてもたえずわが党の直面するものであり、常に闘争しなければならぬものである。このブルジョアジーの労働者農民にたいする弾圧迫害は実に多くの同志にたいする拷問傷害そして殺害、実にありとあらゆる犠牲を出している。なかんずくわが共産党の古き指導者であり、当時におけるわが党の最高指導者であつた日本共産党書記長同志渡辺政之輔は、一九二八年十月七日、党の用務を帯びて活動中、台湾の基隆で日本ブルジョア官憲のため殺されたのである。

この同志渡辺政之輔の犠牲にたいしては、当時、ブルジョアはありとあらゆる綿密周到な手段をもつて、同志渡辺政之輔は官憲に殺されたのではなく自殺したのだと盛んにいい触らして、この優れたわが党の指導者同志に加えたブルジョアジーの惨虐行爲にたいする大衆の憤激を隠しおわんと努めたのであつた。

わが党は、同志渡辺政之輔は日本ブルジョアジーの白色テロルの犠牲となつたもので、決して自殺ではなくてブルジョア官憲のために殺害されたことを事実によつて確認することができた。同志渡辺政之輔の台湾における行動はすべてわが日本共産党の正規の連絡において行われたのであつて、同志渡辺政之輔の台湾基隆におけるブルジョア官憲による殺害の報は直ぐにはわが党に到達しなかつたが、まもなく海外の途を通じて——正式にコミンテルンの途を通じて——わが党に到達した。これによつて同志渡辺政之輔はブルジョア官憲に捕えられて殺害されたのだ、ということが明白になつたのである。

これにたいしてわが党は、同志渡辺政之輔がわが党のためにいかに活動したか、わが党の発展のためにいかに偉大なる働きをなしたか、なかんずく一九二七年の日本問題に関するコミンテルンの決議を實踐に移すために、いかにすべての同志の最先頭に立つて犠牲的に英雄的に活動してきたか、そして彼が台湾において斃れるその時まで、わが党の最も困難なる時期において常に大衆に率先してわがプロレタリア階級の英雄として活動してきたか、を大衆に宣傳した。同時に、この同志渡辺の遺業を継いで、わが共産党に参加し、日本共産党の事業のために戦い、日本共産党のボルシェヴィキ化のために闘わなければならぬことを大衆に訴えた。この同志渡辺の犠牲はブルジョアジーのあらゆる逆宣傳にもかかわらず労働者農民を欺くことはできなかつた。同志渡辺の犠牲はますます大衆の間に共産党の勢力を養いだすところの絶えざる偉大な力となつた。

なお、当時の白色テロルに殺された同志山本宣治がわが党を間接に支持して闘つた功績を回顧し、暴力團の兇刃に斃れた同志山本宣治は單なる暴力團の犠牲となつたのではなくして実にブルジョアジーの白色テロルの犠牲であるという見地から、同志山本をわが党の旗の下に葬ることにしたのであつた。



殊に白色テロルの荒れ狂う下において、わが党は三・一五の第一周年を迎え、これを記念するために到るところにおいて合法的に非合法的に集会を開き、党の大家化のために闘争し、この日を記念して種々の事業をなすこと、各細胞においては各々工場新聞を発行すること等、党の具体的な活動を決定して実行したのである。

この間において「日本共産党事件」の公判は開かれた。捕えられた同志たちが公判廷において、日本共産党の正しいことを一步も譲らず主張して、いかに強く闘っているかを明らかにし、またブルジョアジーが公開を禁止して暗黒のうちに葬ろうとするのには、ブルジョアジーが「共産党事件」の公開を禁止せんとした禁止するのは何故か、わが日本共産党がプロレタリア階級の唯一の正しい党であり全労働者農民大衆の味方であることを知り、それが大衆の間に知れ渡ることを恐れるためであることを、明らかに宣傳して闘ったのである。

かようにして、四・一六事件までにわが党は大いに闘争を進め、新しい組織の発展を見るにいたつたので、全国組織者会議をひらき、つぎに党大会を開催する準備にかつた。そのために当面の政治情勢とわが党の任務に關するテーゼ、党の組織に關するテーゼ、農民運動に關するテーゼ、この三つの重要なテーゼ草案の作成のために特別委員会を設け、殊に組織問題の特別委員会はすべて海外に置き、着々と大会の準備を始めていたのである。この大会準備のまつさいちゆうに四・一六の大檢舉を受けたのである。

四・一六の大檢舉はいまさらいうまでもなく、一九二九年の初頭からまたもや燃えあがつてきた労働者および貧農の階級闘争の激化、帝國主義戦争の危機の切迫、この下において日本共産党が絶滅しないのみかますます大衆の信頼をえ、大衆の味方となり、大衆の間にその勢力を擴大しているのには、ブルジョアジーが一大打撃を加えなければならぬ必要に當面したからであつたのだ。

## 結 語

以上で、だいたいわが党の創立から四・一六の檢舉までの重要な活動を述べた。もちろんわが党の活動の十分の一をも百分の一をも述べつくしてはいない。しかしこれによつて、わが党がその創立以來いかにプロレタリア階級のためにその先頭に立つて闘つてきたかはわかると思う。わが党は創立以來九カ年の間、決して斬新奇抜な奇想天外なことをしたのではなく、ただ労働者階級の利益を守り、労働者階級の解放のために闘い、貧農の利益、その解放のために闘つたのにすぎないのである。

すなわちわが党は、労働者の日常利益の擁護伸展のために闘争し、とくに資本主義的産業合理化にたいして闘つた。労働組合の組織とその革命化と統一戦線とのためにいかなるものよりも熱心に忠実に闘つた。またさらにわが党は農民とくに貧農の利益のために、また切迫した農業革命のために闘争した。

わが党はあらゆる青年ならびに婦人労働者のために闘争し、共産青年同盟の支援のために活動した。なお、労働者農民の團結のために、労働者農民の言論集会結社の自由のために、またブルジョアジーの惨虐な反プロレタリア法律、階級法案、過激社会運動取締法、治安維持法、その他の反プロレタリア法にたいして、また世界に類例稀な惨虐な警察テロルにたいして——白色テロルにたいして、ファシスト化しつつある政府にたいして、闘争してきた。

わが党は世界におけるプロレタリアートの唯一の國家たるソヴェート連邦防衛のために、また支那革命支持のために、植民地解放独立運動のために闘い、そのほか國際的な労働者の團結のために闘争した。また、帝國主義戰



争の危機にたいして闘い、対外出兵にたいしてはもちろん、あらゆる排外主義軍國主義にたいして闘争した。これらすべての闘争をわが党は現日本國家の倒壊——天皇側の廃止を含む全國家の倒壊のために、労働者農民解放のために、プロレタリア独裁のために、プロレタリアの闘争のために集中したのである。かつ、すべてこれらの闘争においてわが党は常に社会民主主義との激烈な闘争を行つてきた。

また重要なことは、わが党それ自身の内部における種々の右翼的日和見主義にたいして、とくにコミンテルンの指導の援助によつてその克服のために闘つてきた。

党はこの間に多くの成功とともにまた失敗をも重ねた。このことをなんら隠そうとするものではない。日本共産党はコミンテルンの支部として、コミンテルンの指導との結合が強かつたときには常に正しく発展している。党がコミンテルンの指導から離れたときには、必ず崩れて、どんな形においてか固定してしまつて大衆から離れ孤立してしまつていた。

革命的理論なくしては革命的行動はありえない、この革命的理論はマルクス・レーニン主義の理論によつて武装されることが絶対に必要である。この革命的理論は労働者農民の闘争の中においては困難なく容易に党が獲得することのできるものである。

また党は工場内に深く深く根をおろし、工場からいささかでも浮び上ろうとするすべての傾向にたいして戦わねばならぬ。

また党はあらゆる場合に自己批判が絶対に必要である。自己批判は党の発展にとつて何よりも必要である。そしてこのことは、党の発展を妨害する諸要素、諸傾向、すべてマルクス・レーニン主義、コミンテルンの線から

離れる諸要素を遠慮なく駆逐することによつて党は成長しうるのである。またわが党は單にそういう過失、誤り、偏向だけでなく、大きな政治的誤謬や過失にたいしても断然たる処置をとらねばならぬ。それなしには党は発展しえないことを教えている。

わが党は過去九年間に、種々の行程、逆路の途を経てきた。なかんづく三・一五、四・一六の大檢挙を受けて、白色テロルのもとにわが党の犠牲となつた諸同志らのプロレタリア英雄主義と革命的忠誠とに刺戟され、荒れ狂う反動のもとに党を再建するために後から後から新しい同志が立つて戦つていく。これは中國共産党の大きな英雄的な活動にはまだまだとらいてい及びもつかないが、しかしこれは党にたいするますます増大する大衆の支持と党の大衆化とを約束するものであつて、わが党はもはや、断じて三・一五、四・一六の大檢挙を敵に許さないであらう。

しかしわが党はなんらの犠牲なしに成長し勝利することは不可能である。かくのごとき犠牲は党が闘うかぎりには免れないものである。われらの同志がいつておるとおり、つぎの数百数千の黨員が得られることに比較すれば、多少の犠牲はなんでもないことだ。

「党の発展は必然である。党の勝利、すなわちプロレタリアートの勝利は必然である。」



## 最終陳述

(一九三二年七月五日検事諭告、七月十四日から最終陳述に入り市川正一のは二十四日であった。)

天皇、三井、三菱、徳川等々の一握りの大金融資本家、地主的貴族を代表して、検事は同志三田村に対して死刑、同志佐野、鍋山及び自分に対して無期、諸数百数十人の同志に対して千数十年という前代未聞の有期懲役を求刑した。しかも、この求刑に先だつて同志渡辺をはじめとする数十人の同志が虐殺されているのだ。また、論告の日にはこの裁判所の間近かに機関銃がすえ付けられたとのことである。この機関銃が労働者農民に対してすでに火蓋をきつたとはまだ聞いていないが、この機関銃が労働者農民を虐殺するために用意されたことは明らかだ。同志三田村に対して死刑を要求した資本家地主どもはガツガツと血にうえているのだ。労働者農民の血を欲しているのだ。

だから労働者農民はこの裁判を自分自身の身に迫る危険だと感じている。そしてこの死刑重罰に憤激して、工場に農村にいたるところに騒起しているのだ。東京だけの例をみても、すでに城北の四十一の工場代表者会議が開かれて共産主義者の死刑重罰反対を決議しており、城南方面でも十幾つかの工場の代表者が集まつて「おれたちの前衛の即時無罪釈放」「前衛の奪還」を決議している。それから十九日の夜には共産党公判批判演説会が開かれたそうだが、そこには官憲隊の重囲をついて七百余人の聴衆が押しよせ、労働者は工場から会場へ雪崩をうつて押しかけてきたとのことである。そして、大衆の憤激を恐怖した官憲によつて演説会が解散されると「共産主義者の死刑重罰絶対反対」「共産黨員ならびに一切の階級的政治犯人の即時無罪釈放」を叫びながら、革命的労働



者がデモを敢行したとのことである。

実に労働者農民その他一切の勤労大衆がわれわれの死刑重罰に断乎として反対し、身をもつて闘争していることは、この一事を見ても明々白々である。

裁判長は、先日、検事の論告求刑を支援して、裁判長を激励する意味の手紙が裁判所にきているなどと得意になつてゐるが、ブルジョア地主がこの階級裁判に激励の手紙をよこすのは当然だ。どんな連中が共産主義者の死刑に賛成なのか、ちよつと名前を知らしてくれ。

元來、共産党事件全体が白テロとデマとでデッチ上げられている。検事は極めて空々漠々たる言葉で論告をやり、そのなかで「七千万國民の信念であるわが國體」とか「社会の安寧秩序は私有財産制度の上に維持されている」とかなんとかデマつてゐる。

だがこんな抽象的な文句でもウツカリと聞きのがすことはできぬ。何故なら、検事はわが党ならびに共産主義者が七千万同胞の敵である、だから死刑重罰をもつて断罪しなければならぬとデマするため、公開の法廷を利用して、論告の形式のもとに悪煽動をやるからだ。今日までも検事が警察政治の手先としてまた資本家地主の代理人としてわが党ならびに共産主義者をどれほどザンブ中傷し來つたか、どんなに悪煽動をやつてきたかは、彼等が解党派の製造にいかん狂奔したかの一事をあげること事足りる。この方面で最大の手柄をたてて資本家地主どもからお褒めにあづかつたのは亀山検事だとのことだ。また現にそこに座つてゐる戸沢検事の如きは近ごろ保釈出獄を要求した同志たちに向つて「外の同志達が愛想をつかさうな一札を入れなければ外にはだせぬ」と強要し誘導し、われわれの同志を腐敗墮落せしめることに憂身をやつしているとのことである。彼らは「七千万國民

の信念」だとか「千古不磨の憲法」だとか「三千年來の確信」だとかいい加減な抽象的な文句で、階級裁判の一部である論告求刑の階級性を神秘化しようとした。しかしながら、検事が軍事的警察的天皇制の子飼の犬であり、資本家地主の忠実な奴僕であることは明らかだ。

平田検事は資本家の最高の政策決定機関である工業クラブに出かけていつて、共産党検挙の経過報告やら同志達や解党派連のいちいちの傾向行動の報告やらをやつたとのことである。検事がこの度の論告求刑に際して工業クラブや経済聯盟から直接の指揮命令を受けたかどうかは知らぬが、平田検事は大資本家連と会合し懇談して、今度の論告求刑に何等かの教訓をえたことは疑う余地がない。

検事ばかりではない。裁判長もこの公判を利用してわが党ならびに共産主義者を盛にデマつた。ブルジョア國家の司法官でありながら、わが党の組織原則を批判して「鉄の規律が鉛となるのではないか」とデマつたり、背教者カウツキーや第二インターナショナル社会民主主義者の裏切者を引合に出して、マルクスやレーニンまでをデマつたのである。

天皇の名による裁判の超階級性とはこんなものだ。わが党ならびにわが党の旗の下に戦う労働者農民氏に対して、検事は陰然と裁判長は公然と毒ずきデマるのである。

さて検事はわれわれ共産主義者が犯罪人であると論告した。だが一体、共産主義者は誰にたいして犯罪人であるのか。

國民の八割を占める労働者農民大衆の自由を根こそぎ奪い取り、人民大衆を奴隸の鉄鎖に縛りつける反動的な革命的な天皇制を打倒することが、一体たれに対して犯罪であるのか。一握りのブルジョア地主の利益のために



労働者農民大衆を同胞殺戮戦に追いやる帝國主義戦争に反対するものは何人の敵であるのか。労働者の生活条件の根本的改善、七時間労働制の確立のために戦うわが党が果して労働者の敵であるというのか。農民が土地を要求して闘争にケツ起しつある時、この闘争の先頭にたち、皇室領、官公有領、寺社領ならびに一部の寄生地主領の土地没収のために闘うわれわれが農民大衆の敵であるというのか。

実に圧倒的多数たる人民大衆は資本家地主天皇制をこそ敵としているのだ。天皇制と帝國主義戦争に反対し、米と土地と自由のための労働者農民政府樹立のための人民革命に向つて闘争しつあるわが党は、断じて労働者農民に対する犯罪者ではない。われわれは一握りのブルジョア地主に対する敵なのである。パーセンテージにも上つてこないほどの極めて少数の資本家地主の敵であるにすぎないのだ。

しかるに検事はわが党ならびに共產主義者が人民大衆の恐るべき敵であるかのようにデマリ、われわれを「七千万國民」の敵として断罪せんとしているのだ。これこそが空々漠々たる論告の政治的意図である。

検事はまた、われわれ共產主義者は現実を無視するものであるとデマリ、あたかもわれわれが労働者農民大衆の利益となんらの関係もなしに空想家として行動しているかのようにいつた。だが、現実にあるものは検事のいうところと正反対である。わが党のスローガンである天皇制の打倒、寄生地主土地の没収、七時間労働制確立は労働者農民大衆の利益としたがつて信念と背馳するものではない。わが党はこのスローガンの下に、すでに十年間闘つてきた。このわが党が大弾圧を加えたからといって、労働者農民の利益は少しも伸長されないのである。

現に日本では、七千万國民の九割余を占める労働者農民その他一切の勤労大衆、さらに二千名を超える朝鮮台湾の植民地民衆は飢餓のドン底にツキ落されているのだ。そして、人民の大多数が喰うや喰わずにいる時に大資本

家どもがドシドシ腹を肥やしているのは、天皇政治の警察的支配が労働者農民の反抗を屈服して資本家地主の利益を擁護しているからに他ならぬことを、すでに人民大衆は氣ずいて來たのである。國体とか私有財産とかに対する人民大衆の信念はドシドシと押し流され、これにかわつて、階級闘争の信念が、共產主義の信念が、プロレタリア独裁の信念が、日本共産党に対する信念が、労働者農民大衆の間に洪水のように増大し成長している。これが偽らざる現実だ。検事はわれわれが現実を無視すると論告しているが、これこそトンデモないかさまごことである。

しかしながら、検事が國体の尊嚴、天皇の神聖をいつているのは、單に現実無視のためのみではなくて、実は深い階級的な魂膽があるのだ。今日の天皇制は資本家地主の利潤追求の武器である。また日本の國体すなわち軍事的警察的天皇制には前時代的な反動的な野蠻性があつて、これが人民大衆の政治生活をしめつけているのだ。検事はこういう現実をば陰蔽し欺瞞せんがため、七千万國民の信念を引き合に出したり、千古不磨の大典というような美辭麗句をならべ立てたのである。

この検事のデマゴギーは東京市長永田秀次郎の述べている國体論すなわち皇室論と同一である。永田秀次郎は皇室の効用ということ論じているが、その第一効用は皇室の存在は人心を安定せしめ國民間のアツレキを緩和することであり、第二効用は大赦を行い慈善事業を行つたりして社会風教上の最高役割をつとめていることであり、第三効用は國家存在の表象であり國民精神の表象であり國防の表象であり、軍人精神の表象であることであり、第四効用は國民の文化生活を奨励し向上せしめる役割をすることであるとしている。

だが天皇はこんな超階級的な存在ではない。



第一に皇室は年に二千万円の利潤を生ずる大土地所有者であり大株式所有者である。だから皇室はブルジョア地主の利益を代表し、ブルジョア地主の労働者農民搾取の前衛となつてゐるのだ。

第二に皇室の慈善事業大赦とは何か？ 一九二八年の大赦のときの大赦はどうであつたか。階級的の政治犯すなわち治安維持法違反者を全部除外し、さらに大典を口実に八千人の労働者農民を逮捕し弾圧したではないか。また日本帝國主義の蹄鉄の下からふるい立つた植民地大衆を飛行機の爆撃と毒ガスとで大衆的に虐殺して鎮圧してゐるではないか。ほんのちよつぱり傷痍兵士の救恤金を出してところで、天皇が労働者農民に対してやつてゐる流血の弾圧を償ふことはできぬ。たちの悪いゴマカシヤにすぎない。

第三は天皇は軍人精神の表象であるというが、今度の中國侵略戦争においては戦争を拒否した兵士を数百人も大衆的に虐殺したではないか。

第四に皇室は國民文化生活を向上せしめるといふが、それは日本の一切の反動的、封建的野蠻文化の中心となつてゐるではないか。

かくのごとき天皇制すなわち國体なるものは「七千万國民の信念」どころか、その九割八分をしめる人民大衆の敵対物である。かくの如き國体は変革しうるし、またせひとも変革しなければならぬものである。

かくの如き反動的革命的國体を人民革命によつて粉碎することはブルジョア地主にとつて絞首台に値いする犯罪であるかも知れない。だがそれは七千万民衆にとつては断じて犯罪ではない。それは労働者農民大衆の信念となりつつあるのだ。

検事は論告において「私有財産は將來においてあるいは改革を可とする点あらんも、現在においては社会秩序

は私有財産制度の上に維持されつつある現状でございます」といつてゐる。このことはブルジョアの手先である検事みずからが、ブルジョアの偽購をバクロしたことを示してゐるものだ。日本ブルジョアは治安維持法を一九二八年に改悪するにあつて、國体の変革を私有財産制度の変革と區別し、特に國体の変革に対しては死刑無期をもつて処罰することにした。これによつて彼らは治安維持の主要目的が國体の防衛にあるかのように見せかけようとした。けれども平田検事は論告において私有財産こそ社会制度の根本であり、國体すなわち天皇制はその上に立つその擁護物であることを述べてゐる。これ治安維持法の根本目的は資本家的私有財産制度、地主的私有財産制度の擁護であることをバクロしたのだ。ブルジョアは神秘的な神聖な仮面をして天皇制を眞先に突き出し、それによつて労働者農民大衆を偽購し、自己の階級利益をまもつてゐるのだ。

むかしの諺に「將を射んとするものはまず馬を射よ」というのがある。國体―天皇制は馬で資本家的私有制はその將である。ブルジョアは天皇制という馬にのつて労働者農民を弾圧してゐる。だからわれわれはまず馬である國体―天皇制を打ちたおすことに主力をそそがねばならぬ。

第一にわれわれは天皇制を打ちたおさなければならぬ。馬からおちても大將はすぐには死なぬ。落ちた大將の首をカキ取らねばダメだ。だから天皇制を打ちたおし、さらに資本家的私有財産制度、資本主義制度を粉碎するのである。

ブルジョアは私有財産制度一般というものがあるかのようにみせかけ、それを擁護するかのようにゴマカしてゐる。だが、一般的な私有財産制度というものは決して存在しない。あるものはただ、資本家的地主的搾取的私有財産制度である。われわれはこれとたたかい、これを顛覆せんとするものである。



資本家的搾取財産制度は労働者を賃銀奴隷として資本の搾取にしばらくつける鉄鎖である。労働者を貧困と奴隷と失業と飢餓と墮落と、一切の悲惨な非人間的な状態につきおとしているのは、この資本家的搾取財産制度だ。さらにまたこの私有財産制度は農民を零細農として地主の搾取に縛りつけて高利貸の収奪にまかせている。またなお、この制度は小市民中間層を窮乏と没落に追いやり、彼らをしてヒステリックな反抗と無氣力に彷徨せしめている。労働農民大衆を惨虐な帝國主義戦争に引っぱりこみ植民地労苦大衆を苛烈に搾取弾圧しているのもこの搾取的私有財産制度なのだ。

この資本家的地主的搾取私有財産制度は打破されなければならぬ。収奪者は収奪されなければならぬ。大工場、大鑛山、大交通運輸機関、大銀行等の搾取財産は大資本家の手から労働者の手に収奪され労働者の管理に移されなければならぬ。天皇および地主の寄生的土地は没收され農民にわかたれなければならぬ。検事はいう「私有財産制度は將來において改革を可とする点これあるも」と、これは單なる僞瞞だ。ブルジョアジーは資本主義の矛盾のために、また労働者階級の猛烈たる反抗のために自己の搾取財産制度がグラついたので、これを國家権力によつて食いとめて強力にしようとして、ファシスト的暴力的変革をつけ加え、もつて自己の生命のはかなき延長をはかつているのだ。すなわち検事はファシスト的独裁支配への道を開かんとするものだ。

平田検事は被告等が千古不磨の大典にもとづく七千万國民の信念の上にたつ國體、私有財産制度の変革を企図していると責め、暴力革命によらんとしていると攻撃する。このブルジョアジーの手先たる検事はかくして、日本共産党をゴロッキ團のごとく極めて凶暴なものであるかの感を労働者農民大衆に抱かせようとし、たくらんでいる。だが、この検事の陰謀は失敗だ。

労働者農民はストライキや小作争議そのほか極めて切実な日常闘争の場合、警官憲兵ゴロッキ團がいかに凶暴な暴力をもつて彼等に迫つてきたかも身をもつて経験している。そして彼等は自己の勝利をうるためには武装した暴力によつてこの資本家的暴力と戦わなければならぬことを明らかに知るにいたつた。さらに労働者農民大衆は資本家と地主との搾取、隷属、失業、飢餓、墮落から解放されるためには、また帝國主義戦争の悲惨からまぬかれるためには、日本共産党の指導の下に大衆的な武装蜂起をもつて公然と資本家地主の國家権力と武力闘争をなし、労働者農民の日本ソヴェート権力を樹立しなければならぬことを知るにいたつている。平田検事のブルジョアジーのための陰謀は失敗に帰している。

労働者農民の暴力とは何であるか、検事の好んでいう「七千万國民」の圧倒的多数をしめる労働者農民の力そのものである。組織された集團的な力だ。個々人が爆弾を投げて走りまわり、ダンピラをさげてハネ歩くことが共産主義者の暴力でない。平田検事は日本共産党を暴力團のごとくにいう。だが、凶暴な反動的暴力の使用者こそ平田検事とその前にヒレ伏す資本家地主なのだ。警官憲兵検事裁判官看守ゴロッキを使つて日々、労働者農民に暴力を加えているのは資本家地主ではないか。自ら作つた僞瞞的な法律を自ら破つて労働者農民に白色テロを加えている。共産主義者の検挙において、ストライキ、小作争議においても、暴行凌辱拷問、あくことをしらぬ惨虐な野獸的的白色テロを労働者農民に加えている。これを否定しうるか。ブルジョアジーこそ凶暴な暴力の使用だ。このことは労働者農民大衆が身をもつて深く知つているところだ。

検事は日本共産党が秘密結社であることを攻撃する。果して日本共産党は労働者農民大衆にとつて秘密の存在であるか。労働者農民はその力関係において労働者農民の組織が資本家地主の國家権力に対して秘密であるべき



ことを知っている。しかも日本共産党は労働者農民大衆に対してはいかなる時にもその存在を公然とし、その政策を公表し來つた。労働者農民にとつては日本共産党は断じて秘密結社ではない。

実に秘密を行うものはブルジョアジーおよびその手先どもである。この裁判を見よ。ブルジョアジーの手先たる警官検事予審判事判事等が暗黒の裡にプロレタリアートの前衛を断罪せんとしているのだ。秘密の行爲をなすものはブルジョアジーおよびその手先たる警官検事判事ブルジョア学者ブルジョア代議士とその亜流どもである。このことを労働者農民大衆は身をもつて知っている。

検事は、日本共産党員およびその支持者が労働者農民大衆の利益を代表して、帝國主義戦争反対のために、天皇制の廃止と資本家地主政府の顛覆と労働者農民の日本ソヴェート政府樹立とのために、戦つたという理由をもつて、共産主義者の虐殺、永久的拘束を要求し、労働者農民の前衛の血をもとめている。これこそ檢挙以來、ブルジョアジーの手先どもによつて警察裁判所監獄内で行われた血にうえた白色テロの集中的な帰結である。檢事の暴虐な求刑はかくのごときもので、それはブルジョアジーが労働者農民の前衛の血をすすらんとしていることを示しているものだ。

檢事の求刑もまた実に偽瞞にみちたものである。ほとんどすべての被告に五年六年という重刑を要求しているが、治安維持法の法文をすら破るかのように見えるこの重刑は、四年五年に互る長期の未決拘留を合理化せんとする魂膽だ。

つぎに檢事は同志三田村に対して死刑を要求し首を求めている。この同志三田村に対する首の要求は実にわれわれ全被告に対する断罪の集中的なものだ。否、全労働者農民に対する彈圧の集中的なものだ。檢事は同志三田

村が逮捕に向つたスパイ高木信平に向つてピストルを発射したことをあだかも無賴漢の行動のごとく印象せしめて死刑を合理化せんとしている。しかしながら同志三田村のピストル発射は全く党防衛の政治行動である。彼らは同志三田村の死刑によつて四・一六以後の党防衛のために勇敢に武器を使用した一切の共産主義者を死刑にするためにその前例をつくりとするのだ。さらになお同志三田村がプロレタリアートの前衛として忠実に勇敢に闘い優れた指導者として活動してきたから首を要求しているのだ。われわれはブルジョアジーのかかる彈圧に対して徹底的に最後まで闘うものである。

ブルジョアジーおよび地主は檢事の論告求刑によつて、自己の利潤追求と搾取支配の維持のために、労働者農民労苦大衆の指導者として革命運動の組織者として闘つてきた日本共産党員およびその支持者に対して、法律の名によつて、人民大衆の名をかたつてその血を要求している。帝國主義戦争反対、天皇制の廃止、資本家地主政府の顛覆、労働者農民政府の樹立、米と土地と自由のための人民革命の実現、をめざして闘い來つた前衛の血を要求しているのだ。

われわれはかくの如き檢事の論告求刑裁判に対して大衆が一齋に立つて反対を叫ぶのみならず、行動をもつて抗議し、かれらの企みを不成功に終らしめ、搾取者とその手先どもの息の根をとめるためにこれを顛覆し葬り去るであろうことを信ずる。

われわれはいま戦争と革命の時代にいる。周囲にはブルジョア地主の支配維持の最後の努力が最も慘酷に凶暴にすすみつつある。労働者農民に対する日々の彈圧、帝國主義戦争と満洲侵略戦争による日滿人民の虐殺、そしてソ同盟に対する干渉戦争の危機が目前に進行している。



帝國主義戦争反対！ 天皇制の打倒！ 米と土地と自由のための人民革命は切迫しつつある。人民革命は必ず  
到來する。

日本共産党万歳！

コミンテルン万歳！

註

- 一 いわゆる「三・一五、四・二六統一公判」は一九二二年六月二十五日から東京地方裁判所公判廷で開かれた。市川正一氏は七月二十一日から党の歴史について全被告を代表して陳述した。
- 二 全國労農大衆党は、一九三〇年に成立した全國大衆党と労農党と社民実現同盟との合同により、三一年七月五日成立した。その政策の第二項外交の三に、労働者農民の世界的入國居住の自由をあげている。(一九頁)
- 三 第三インタナショナル(略称コミンテルン)は一九一九年三月三日モスクワで成立した各國共産党の統一指導体。詳しくは山辺健太郎著「コミンテルンの歴史」参照。(二二頁)
- 四 日本帝國主義の植民地時代の朝鮮では一定の犯罪には定まつた数だけ棒でなくなる刑があつた。これを管刑といふ。(二二頁)
- 五 一九〇六年九月五日に開かれたポーツマス條約反対の國民大会は大騒擾となり戒嚴令がしかれた。(二四頁)
- 六 片山潜とブレハノフとの握手は一九〇四年八月十四日のことである。なおブレハノフは当時すでにメンシエヴィキであつた。ソ同盟共産党小史参照。(二五頁)
- 七 米騒動は、大正七年夏米價暴騰のため富山縣の漁村主婦たちが大挙して米屋の賣惜米を摘発したのを口火として全國的にひろがつた革命的大衆行動。この運動は指導者がなかつたために鎮圧されたが、第一次世界大戰後の革命運動の口火をきつたものであつた。(二五頁)
- 八 過激社会運動取締法案は「朝憲を紊亂し社会の根本組織を……不法手段により変革せんとする者を取締る必



要上」一九二二年二月十八日貴族院に提出され、修正によつて骨抜きとなつて三月二十四日同院は通過したが、審議未了になつた。翌二三年に再提出しようとしたが、無産団体の反対で葬り去られた。(二七頁)

九 一九二一年一月友愛会機関紙に棚橋小虎氏(現存)は「労働組合へ帰れ」なる一文を発表した。(二八頁)

一〇 同志佐藤三千夫は宮城縣登米郡の生れ。一九二二年六月いらい沿海州バルチザン部隊に参加し、白軍、帝國主義日本軍に抗戦した。病軀をおして奮斗していたが同年十二月四日ハバロフスク陸軍病院に仆れた。時に二十四才。(二九頁)

一一 極東民族大会は正しくは極東共産主義的革命団体第一回大会である。詳しくは徳田球一氏「革命の思ひ出」を見よ。(三一頁)

一二 コミンテルン第二回世界大会は一九二〇年七月十九日からモスクワで開かれた。(三三頁)

一三 ストライキ数は政府統計によれば一九一九年度件数四九七、参加人員六三、一三七人で、件数、参加人員数とも大正年間のピークとなる。(三九頁)

一四 普選運動——財産の制限なく成年男子に選挙権を要求する運動は第一次大戦後一九一八年から始まる。憲政会(当時總裁加藤高明)は後の民政党。政友会總裁は高橋是清、革新クラブは二二年三月成立、犬養毅、尾崎行雄等はその領首。上記諸政党的のいわゆる護憲三派内閣が二五年三月、普選を織りこんだ選挙法改正を行つた。(四二頁)

一五 対露非干渉同盟——二二年六月十三日神田青年会館に発会式をあげた。そのスローガンは、一、ロシアに駐屯せる日本兵の無條件即時撤退。一、ロシアに対する通商貿易の開始。一、ロシアの飢饉に対する救済金を

品の贈與の三箇條。資本主義諸國に封鎖されたソヴェト・ロシア(今日のソ連邦)の大飢饉の救援運動が英國労働組合評議会等によつて発起されたのに呼應したもの。(四五頁)

一六 「前衛」——「前衛」は一九二二年一月から発行された。関東大震災により廃刊。「赤旗」、「階級戦」と題名を変えて圧迫に抗しつづつ月刊発行をつづけた。ここにいう山川均氏の論文は、七・八月号に出た「無産階級運動の方向轉換」をさす。(四五頁)

一七 尼港事件——ニコライエフスク事件は一九二〇年三月十三日起る。(四六頁)

一八 ルール占領——第一次大戦後の賠償をドイツ共和國が履行しなかつたためフランス軍は二三年一月ルール地方を占領。ルール炭坑労働者がストライキにはいりフランスの労働者も抗議運動を開始した。(四七頁)

一九 リベツ化——リベラリズム化の短縮で、当時の指導的スローガン。共産主義運動を自由主義運動に引きさげることになる当時の運動。もちろん、これは解党決議の精神と一致した日和見主義的傾向。(五一頁)

二〇 赤松克麿——彼はそののち完全なファッショとなりきつた。彼の「科学的日本主義」は雑誌「新人」(一九二四年十一月号巻頭言)にあり、これを反バクしたものとしては、志賀義雄氏の「科学的日本主義を駁す」(雑誌「マルクス主義」一九二五年六月号所載)がある。(五二頁)

二一 護憲三派内閣——二四年六月、憲政会、政友会、革新クラブのいわゆる護憲三派による加藤高明内閣成立。総理大臣加藤、外務大臣幣原は三菱の姻戚。鉄道大臣仙石貢も三菱と深い関係がある。(五八頁)

二三 無産者新聞——一九二五年九月に第一号を発行。(六〇頁)

二三 日和見主義的組織論——山川均氏は協同戦線党論(これは本年の社会党大会の協同戦線党論まで尾をひい



ている)を提唱している。共産党なしの政党で労働組合幹部の指導力を強くして、これをもつて全闘争の指導体としようとするタワイもないものである。(六一頁)

- 二四 共同印刷争議は一九二六年一月二〇日から三月十八日まで。参加人員二、二〇〇。(六四頁)
- 二五 日本楽器(濱松)争議は四月二日から七月七日まで。参加人員一、三〇〇。(六四頁)
- 二六 別子銅山争議は一九二五年十二月十日から翌二六年二月十六日まで。首になつた三百名の組合幹部が戦つた。(六四頁)

二七 新潟縣北蒲原郡木崎村耕作禁止事件は大正十五年五月五日、遂に差押米競賣処分にあたり、農民側と警察側の衝突となり多数の刑事被告人を出した。(六四頁)

二八 「無産者新聞」第十八号(二六年三月五日)四面、相談欄に「共産党なる語が逆宣傳に使はれるのはなぜですか」の間に編集者は「この頃、他人を共産党だと逆宣傳して陥れる者があるが、お互ひに無産階級の利益は一致するから、共産党といつて排撃する事はやめまじよう。」と答えている。(六五頁)

二九 昭和金融恐慌、五億円の補償——一九二七年震災手形法案議会上程され弱体銀行の内情に不安を生じ、銀行の休業続出し金融恐慌となる。台湾銀行も休業するに及び一時モラトリアムを施行し、五月四日、日銀をして諸銀行に融資せしめその損失を七億円まで補償する法案が臨時議會を通過した。(七一頁)

三〇 「マルクス主義」——後に党の理論的政治機関紙となる。一九二四年五月発刊。一九二九年四月(四・一六事件により)廃刊。(七七頁)

三一 上向線にある……。「日本問題に関する方針書決議集」九頁、「日本資本主義はイギリス及びヨーロッパ資本主義諸國とは反対に、疑ひもなく今日なほ発展の上向線上にある。……」(七八頁)

三二 議會主義に関するテーゼ——コミンテルン第二回世界大会は議會主義に関するテーゼを可決し公表した。新しい状態に應じてのコミンテルンの新任務、議會の役割の変化、議會に対する党の戦略、議會フラクシヨンに対する組織原則等を詳細に規定している。一読すべきものである。(八五頁)

三三 労農派——一九二七年十二月雑誌「労農」が「戰闘的マルキスト理論雑誌」と銘うつて発行された。それは当時の共産党の悪口をいう事を任務とする雑誌であり共産党の裏切り者の機関紙であつた。主要寄稿者は山川均、荒畑寒村氏等で、小堀甚二氏が編集兼発行人となつている。一九二九年四月頃まで続き、その後また再刊された事もある。この雑誌の寄稿者が所謂「労農派」である。(九二頁)

三四 第一回無産政綱領審議會——一九二五年九月一七・八日、大阪中央公会堂會議室に開催される。この會議で総同盟と評議會との代表者の間に大激論があつた。植民地の自治解放は重大な対立であつた。(一一二頁)

三五 無産青年同盟——一九二五年八月、創立。事務所を大阪に置く。(九八頁)

三六 板舟事件——東京の魚河岸では、着船に板をわたす利権が一部問屋に独占されていた。この板舟権廃止問題を中心とした大規模な腐敗事件が東京市会で起つた。(一二三頁)



1949年12月25日 新版發行  
1950年3月25日 再版發行

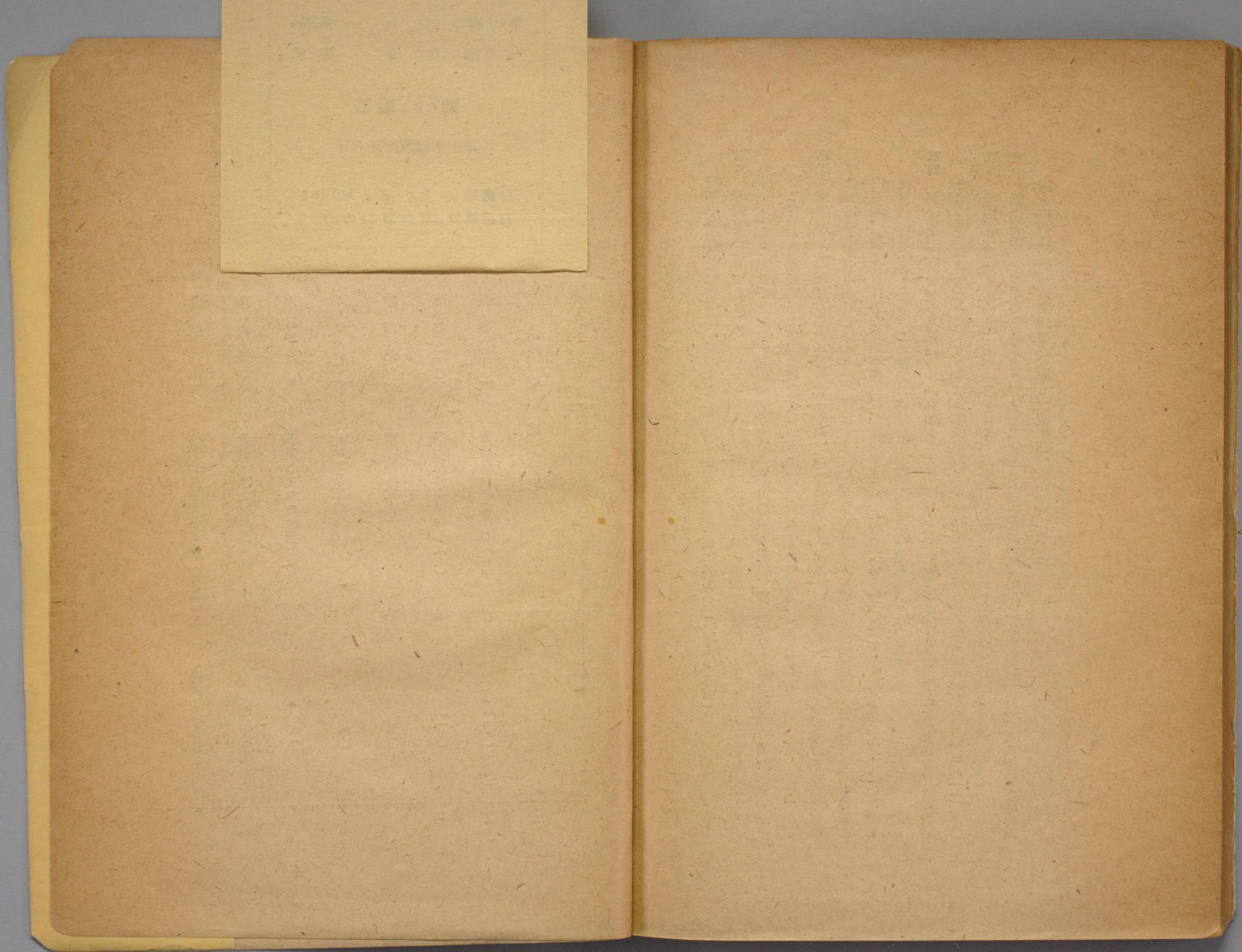
日本共產黨鬭爭小史

定價100圓

著者 市川正一  
發行者 市川義雄  
發行所 曉明社

東京都千代田區神田小川町3の24  
振替東京30396番







1	市川正一	日本共産黨闘争小史(改訂)	豫價 一〇〇
2	藏原惟人	共産主義とは何か	五〇
3	志賀義雄	戦後の日本の危機と財政	八〇
4	ノムラ・シゲオ	ロシア十月革命	八〇
5	市川正一	獄中から父母へ	九〇
6	春日正一	労働組合のはなし(上)	一〇〇
7	春日正一	労働組合のはなし(下)	一〇〇

(以下 續 刊)



